

なんとかマサラ人

コツクリ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

誰もが知っているメジャーアニメの主人公じやない人に生まれ変わったお話。

いろいろオリジナルな展開を繰り広げてキャラも壊れたりしてます。（性能的な意味  
で）

処女作なため生温かい目で見てください。

※最近戻りました。すいません。そして超遅筆です。

1

次

物紹介		ノーマルマサラ人	2話
	ノーマルマサラ人	3話	1話
	ノーマルマサラ人	4話	
	ノーマルマサラ人	5話	
	ノーマルマサラ人	6話	
	ノーマルマサラ人	7話	
	ノーマルマサラ人	8話	
	ノーマルマサラ人	9話	
1話	ノーマルマサラ人	10話	
+ 登場人			
111	99	87	66
	60	46	33
	24	10	5
	1		

ノーマルマサラ人 23話  
a n o t h e r スーパーマサラ人  
a n o t h e r スーパーマサラ人

354 2 347 1 337

# ノーマルマサラ人 1話

転生したい世界はどこですか？と聞かれたらあなたはどんな二次世界（妄想世界）に行きたいですか。

色々な所に思いを馳せるだろう。MHの世界・東方の世界・親父にもぶたれたことのない世界。

どの世界も魅力的だ。どの世界にも行つてみたい。どの世界でも原作知識を活かして英雄（ヒーロー）になりたい。

そんなことを一度は考えたことがあるだろう。（主にこんな駄文を読もうとしている読者様方とか）

しかし、現実と妄想は違う。妄想世界にリアルの現象があれば妄想に浸ることが樂しくなくなるだろう。

例えば・・・

「真ん中ねらいまーす。・・・・（ヒュツ・・・バスツ！）・・・・次、2番ねらい

まーす」

まさに、今現在進行形の訓練だ。

「8番ねらいまーす。・・・・・(ヒュツ・・・ガン!)」

「ハイツ、また最初からね。一球も外さずビンゴ出来るまで朝ごはん食べれませんからね」

「o r z」

ポケットモンスター、略してポケモン。

今では子供から・・・というよりもはや大人向けゲームになりつつあるようなそんなゲーム。

そんなゲームに私こと、この駄文の主人公が転生してきました。

「次、4番ねらいまーす。・・・・・(ヒュツ・・・バスツ!)」

「はい、とりあえずビンゴ出来たから今朝の練習は終了。朝ごはん食べて学校行きなさい。」

帰つたら夜の練習もちやんとするのよ」

そう。ポケモンなのだ。ここは間違いなくポケモンの世界のはずだ。

町の外を歩けば野生のコラツタは出るし、水道を見ればコイキングが泳いでるし、テレビを見ればバトルの中継がされている。

だれがなんと言おうとポケモンの世界なのだ。

のつけからわけのわからんことをしていると突っ込まれていてもしかりがこれにも理由があるのだ。

「ポケモンをゲットするにはボールを投げる！これは常識ね。けれどボールは当たらなければ意味がない！」

だからボールを百発百中にする訓練が必要！」

「言いたいことは理解した。けれどやつてることに疑問があります。この訓練初めて1カ月経つんだけど

「いつまでやるの？」

「カーブで2枚抜き、かつビンゴが出来るまで。もちろん一発も外さずに。」

「Orz」

そう、現実と妄想は違う。ゲームのようにボールを使用すればポケモンに当たること

が必然ではないのだ。

故に、こんなスト○ツクアウトみたいな訓練をせねばならんのだ。

・・・トレーナーになりたいとしか言つてないのに。

「肩を痛めないように正しいフォームで投げなさい。それから出来るだけ胴体をねらいなさい。

もし相手が動いても腕とかに掠ればボールに入るから」

「わかつたよ。それじゃ学校に行つてきます。帰りに研究所に寄ると思うから少しあそぶくなるよ」

「はいはい、おじいちゃんの邪魔にならないようにな。いつてらっしゃい、シゲル」「いつてきます、姉さん」

こうして、転生主人公ことシゲル（8歳）の話が始まります。

# ノーマルマサラ人 2話

「えーと、フシギダネの種が以前より5cmほど成長。それに伴いフシギダネの身長も成長。体重も問題なし。つと」

学校が終わり、習慣となつている研究所の手伝い。

この世に生まれ（転生）物心つくころから研究所に出入りしてポケモンを見ているのだ。

普段、研究所は新人トレーナーがポケモンを貰いにくるか、図鑑を見せに来る人が来る程度で俺のような見た目子供が来る所ではないのだが、

「おーい、シゲル。そつちは終わつたかの」

「今終わつた。問題なしだつたよ」

このオーキド研究所は名前のことおり、俺の祖父ことオーキド博士が建てた研究所なのだ。

ゲームでもほとんどのシリーズに登場か名前が出る有名な博士だ。

そして俺はその孫。遠慮する必要もなく、むしろ生まれたときから來てる所だから家のような感じだ。

「そうか、このポケモンたちも来週には新人トレーナーの誰かの最初のポケモンになるのだからな。小まめに健康チェックをせねばな。」

そう、このポケモンも来週には旅立つのだ。

この世界は10歳からポケモンと共に旅立つことが許されているのだ。

ゲームでは意識しなかつたが10歳つて早すぎね、ホームシックになつて帰つてくるんじやね。などと思うがこの世界では常識なのだ。

かくいう俺も早く旅立ちのだが、あと2年待たなければならぬ。

「それにしてもシゲルもずいぶん仕事が出来るようになつたの。おかげでわしも腰痛に悩むことが少なくなつたわい」

「じいちゃん、さすがにその年で自転車で段差降りるのは無茶だつて。トキワシティなんて歩いていいけるじやん」

「たまにアグレッシブになるじいちゃんなのだ。

「いや／＼なに、若い頃を思い出して自転車で移動したかつたんじや。あの頃は洞窟の中でも自転車で移動したんじやが。」

「フラツシユせずに適当にぶつかりながら出口に出たんですね、わかります」

初代じや頻繁に真つ暗になるし、いちいちフラツシユ選択するのめんどかつたし。  
「しかし、シゲルも8歳か。2年後には旅立つか?」

「そのつもりだよ。サトシもそう言つてたね」

「サトシは俺の幼馴染だ。一緒に遊んで、一緒にポケモンについて語つたり、どこにでもいる幼馴染だ。・・・女の幼馴染はいないけど。

「そうか、今はその訓練をやつとるんだつたな」

「・・・うん。トレーナーの訓練・・・だと思う」

相変わらず続けるカーブ2枚抜きビンゴゲーム。

決してそつちの道のプロになるつもりはない。

「シゲルは将来なんになりたいんじや、研究員か？」

「さあ、まだはつきり決めてないよ。今みたいにポケモン観察して研究員になるのも悪くないとは思つてるけど」

この世界は転生前の世界と違つてほとんどの仕事にポケモンが関係する。

政治や環境問題にもポケモンが関係するのだ。

たしかに数学や物理などの基本的なことは変わらない。けど歴史や宗教になるとまるで変わる。

今現在カントーは150匹しか確認されてないが、ゲームではポケモンが世界を作つたとか、ポケモンが過去や未来に移動する。

そんなことが図鑑に載つてた気がする。

なんの仕事するにも今までと価値観が違うのだ。

流石に、小・中学生レベルの算数や理科などは問題ないので成績は優秀だ。  
そういうことから研究員が俺には向いてるのかもしれないけど。

「サトシは『ポケモンマスターになる!』ってはりきつてたけど

「うむうむ、サトシらしいのう」

しかし、ポケモンマスターってどうやつたらなるんだろうか。

リーグ優勝?いや、そしたらチャンピオンだな。

ポケモンを知り尽くす?それって博士って呼ばれるんじやなかろうか?

ポケモンを極める?・・・なにそれ?

いまいち定義がわからんな。

「とりあえずポケモンは好きだから、トレーナーになつて旅に出て、いろいろ考えてみるよ」

「うむ、なにをするにしてもポケモンと関わるならまずは一人前のトレーナーなること  
じゃからな」

じいちゃんも洞窟で自転車乗つてたときはいろいろやつてたんだろうか？

「それじゃ、そろそろ帰るよ。あんまり遅くなると姉さんが心配して、『出来るだけ早く帰れるように』つていいながら走り込みの訓練メニューを追加してくるかも知れないから」

「そうか、今日は遅くなると伝えておいてくれ」

・・・これが俺の日常だ。

# ノーマルマサラ人 3話

「さあ、ポケモンは突つ立つてゐわけじやないんだから、ポケモンに逃げられないようには足腰鍛えないと」

「・・・・・姉さん、これ・・・いつまで・・・走ればいいの」

「もちろん。ポケモンより早く走れるまで。そうねドードーは無理でもドードリオぐらいまで頑張りなさい」

「ドードー」・・・ふたゞりポケモン

とつぜんへんいでみつかつたふたつのあたまをもつポケモン。じそく100キロではしる。

b y ファイアレッド図鑑

「ドードリオ」・・・みつゞりポケモン  
しんかのときにドードーのあたまのどちらかがぶんれつしたちんしゅ。じそく60

キロいじょうで はしる。

by ブラック・ホワイト図鑑

あれ遅くなつてね？？？そんな突つ込みを入れる余裕もなく、現在、私ことシゲルは走つてます。

・・・時速60キロの壁を目指して。

いつか来るだろなあと思つてた走り込みの訓練。

この訓練を初めてからどれくらい経つだろ。時速60キロの壁はいまだ越えられず、ただ走り続けております。

おかげで姉さんの言つてたとおり足腰がかなり鍛えられております。

正直、この年でここまでふくろはぎが引き締まつたら何年後かに来る成長痛がやばいんじやなかろうか。足の成長痛つて骨が出つ張つて痛いんだよね、膝とか踵とか。

「ほら、とりあえずあと一時間走りなさい。私はお昼御飯の用意をしてくるから。」

姉さんがなにか言つてるなあ。

ああ、そういうえば今日はまだ休憩を取つてないないなあ。  
忘れられてるんだろうなあ。

(バタツ)

◇◇◇

目を開けて回りを見ると清々しい晴天だ。

ここはどこだろう。

俺は今、虹の橋を渡つている。

本来ならあり得ないこと。

それを当り前のように歩いている。

間違いなく夢の中だ。

虹の橋を渡り切ると、なぜかカフエが建つていた。

とりあえず覗いてみると

「8月30日の期間限定のため当店は閉店しました」

そんなことが書かれていた。

なんの期間だつけ？

どつかで見たことがある日だ。

他にも無いので近くの森に入つた。

森に入るとミノムツチを見かけた。

カントーではまず見ないポケモンなので懐かしい気分になれた。

次にドーブルに会つた。

なぜかドリンクを運ぶよう頼まれたのでミノムツチまで渡しに行つた。

こんなもんいるかと捨てられたのでミノムツチの糸を引きちぎつてやつた。

ドーブルにそのことを伝えるとサムズアップしてきた。

サムズアップし返した。

お礼にきのみをくれた。

ドリンクを運んだお礼なのか、糸を引きちぎつたお礼なのかわかりません。

また森の中を歩くとイーブイに出会つた。

こつちに擦り寄つてくる。

どうやらきのみが目的みたいだ。

きのみをあげると喜んだ。

イーブイがなつきました。

イーブイと一緒に森を歩くと大量のニヨロゾがいた。  
ニヨロゾが一斉にこつちを向いた。

おなかのうずまきを見ると睡魔に襲われた。

とりあえずこつちもニヨロゾに向かってうずまきと逆方向に指を回してみた。  
ニヨロゾがなぜか興奮しだした。

ニヨロゾが一斉に襲ってきた。

イーブイ抱えて逃げた。

しかし追いかけてくる。

しようがないので島から飛び降りることにした。

どうせ夢だから大丈夫だろ。

イーブイごと飛び降りた。

アイキヤンフラーイ

(バシャツ)

「あら、起きた。もう、ダメじゃない。走つてる最中に寝たら」  
バケツの水のおかげで目が覚めました。

「……疲労で睡魔に襲われたら（気絶）、さらに睡魔に襲われて、最後に30匹近くのスイマーに襲われました」

「頭打った？」

これが3日前の出来事であつた。



いきなりですが、あと来年で10歳になります。

それに伴い姉さんの訓練も種類がどんどん増えてきました。

旅に出てから簡単に作れる料理、食べられる野草の区別、野宿するときのコツ、etc

c

いろいろなことも学びました。

ところでこの訓練つてほかのトレーナーもやっているのだろうか。  
サトシはいつも元気でやつれてるところを見たことがないんだが・・・。

(この一家だけです。)

さて、来年で10歳になり、旅立つことが出来るのだが、じいちゃんの研究を見たところ、どうやらこの世界ではまだ個体値・努力値は発見されていないようだ。  
それと性格についても、特に気にされていない。

しかし、ポケモン図鑑でポケモンを確認すると性格が表示されている。・・・なぜだろう？

そうなると、やはり実際に3匹の性格を確認してから選んだほうがいいだろう。  
最初にもらうポケモンなのだから長く付き合いたい。

性格さえ合えばなんとか育てたいように育てられるだろう。

個体値などのほかにも、この世界はまだまだポケモンについて発見されていないことが多いのだ。

例えば、ゲームの初代カントーはでは無かつたこと。

金銀のジョウトで発見された出来事。

厳選という形で当たり前のようにあるゲームシステム。

廃人ならば一体のポケモンに4、5日かけて厳選したりもする。  
それは、「タマゴ」だ。

・・・・「タマゴ」拾いました。

「姉さんめ、失神した相手に脂っこい肉料理を食わせるなんて。・・・あれ？」

今日も今日とてトレーナー必須訓練（と言われた）を終え、日課であるポケモン観察をしに、研究所に向かってる途中珍しい人にあつた。

「・・・ナナカマド博士ですか？」

「ム？ おお、シゲル君か」

ナナカマド博士、何でもじいちゃんの通つていたタマムシ大学での先輩らしい。

シンオウ地方のマサゴタウンに研究所を構え、主にポケモンの進化について研究しているのだとか。

「お久しぶりです、ナナカマド博士。珍しいですね、わざわざマサラタウンに来るなんて」

「うむ、実はオーキド君にポケモンが新種の細菌に感染されていると聞いてな」「ああ、ポケルスのことでしたか」

「ポケルス？」

「じいちゃんがそう呼んでいましたよ。仮名として名づけたらしいですが」

・・・ポケルスについてはググつてください。

「送られた資料を見たが、確かに新種のようだな。私も自分の目で確認したいと思つて来たのだ」

「そういうことですか。今はじいちゃんも居ますのでどうぞ」

「うむ」

年を考えずにトキワシティまで自転車で行つてゐるからな、あのじいちゃん。

「ところで気になつていたんだが？」

「なんでしよう？」

「そのタマゴはなにかね？」

「川から流れてきたので拾つたんです」

「・・・タマゴをかね？」

「タマゴをです」

「・・・なんのタマゴかね？」

「さあ？」

「・・・随分と大きいようだが」

「はい、けつこう重いです」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・なにか？」

「・・・なぜダンボールに入れて持ち歩いているのかね？」

「・・・姉が狙つてるからです」

夕食的な意味で。

所変わつて研究所。

「ほう、これが新種のウイルスか。やはり珍しい色をしているな  
「ナナカマド博士、やはり新種のウイルスですか？」

「うむ、少なくとも私は初めて見るウイルスだな」

「おお、そうですか。これでまたポケモンの研究が進みますな！」

「うむ！」

楽しそうだなあ、じいちゃんたち。

傍から見ると子供がはしゃいでるように見える。

けど、懐かしいなあ。ポケルスつて言葉。

この世界に生を受けて早9年。

流石にゲーム内での言葉を久々に聞くと懐かしい気分になる。

「このウイルスを解析し、特許が取れれば、ワシはがっぽがっぽですな！」

「くつ！なんとうらやましい。私の研究所の機材も買い替えたいというのに！」

「H A H A H A、これで念願のマツハ自転車を手に入れることが出来る！」

「なん・・・だと・・・。くつ、私はランニングシューズで隣の町に通っているというのに！」

楽しそうだなあ、じいちゃんたち。

傍から見ると狸の皮算用に必死なジジイ共にしか見えない。  
内容のレベル低いし。

「ブイ」

「どうか見たところ、ナナカマド博士ってポケモン持ち歩いていないような？」

「ブイ」

ということは、このマサラタウンまで『そらをとぶ』で来てない。

「ブイブイ？」

シンオウ地方からカントー地方は船で行き来する。

「ブイ」

カントー地方の港はハナダシティしかない。

「ブイブイ」

自転車もなく、『そらをとぶ』を使つてない。

「ブイブイ？」

つまり、あの人は徒步でハナダシティからマサラタウンまで来たということだ。

「ブイブイ！」

けつこう年食つてるはずなのに、アグレッシブだな。

「ブイ！」

自転車で移動するうちのじいちゃんもだが、トレーナーつてすごいな。

「ブイブイ」

俺もいつかああなるんだろうか。いやだなあ。

「ブイ」

「・・・・・ブイ」

「・・・どちらさまで？」

「ブイ！」

タマゴの破片が散らばつていました。

# ノーマルマサラ人 4話

あれから色々あつた。

「ブイ」

まずタマゴからポケモンが生まれて、じいちゃんたちが発狂した。

「ブイブイ」

そして、この「ブイ」しか言わないナマモノを観察した。

「イー」

なんか反抗しやがつた。・・・昔の全身黒タイツの雑魚みたいな鳴き方だぞ。

「・・・ブイ」

話を戻して・・・タマゴの殻とかこのナマモノを世間に公表した。

「ブイ！」

そしてポケモンはタマゴから生まれるということを世界に電撃発表した。

「ブイ！」

ついでにタマゴの第一発見者である俺も発表された。・・・ついでにいろんな所に顔を出す羽目になった。

「ブイ」

俺とこのナマモノこと「イーブイ」は一躍有名となつた。

「ブイ！」

ナナカマド博士はハナダシティまでランニングシューズで駆けて帰つていた。

「ブイ！」



「いいよなあ、シゲル」

「なにが？」

「だつてさ、もうポケモンを持つてるんだぜ」

「モンスターボールに入れてる訳じやないから持つてるってのは語弊があると思うぞ」「くく、俺も早くポケモンをゲットしたいぜ！」

「・・・人の話聞いてる？」

「ブイブイ」

10歳まであと2か月。

タマゴの第一発見者の俺はここ数カ月いろいろとバタバタしていた。

こうしてサトシの家で話をするのも随分と久しぶりだ。

ちなみにこのイーブイはまだゲットはしていない。

まだ10歳ではないからモンスターボールを使うことが許されないのだ。

余談だが、こいつはやたら俺の肩に乗りたがる。足が短いのに器用なものだ。

あと、見た目よりけつこう重い。

「けど俺たちもあと2か月だな」

「ああ！やつとポケモントレーナーになるんだ、楽しみだぜ」「そうだな、確かに『やつと』って感じだな」

「ああ、ようやくポケモンマスターの第一歩だ！」

相変わらずサトシはポケモンマスターを目指している。『ポケモンマスターになる』、  
は昔からの口癖だった。

未だにポケモンマスターってどんなもんか分からんけど・・・。

「そういや、シゲルは最初にもらうポケモンは決めたのか」

「うん？いや、俺は実際に見て決めるつもりだよ」

「そつか。俺もまだ決めてないんだよなあ」

「ま、とりあえず俺にとっての最初はこいつになるのかね」

「ブイ！」

胡坐をかいている俺に座りおとなしくしているイーブイを見ながら考える。  
イーブイというポケモンは中々野生で見ない珍しいポケモンである。

そして進化する種類の多さで有名だ。

初心者用の最初のポケモンとこいつの進化させる『タイプ』についても考慮する必要があるな。

流石にリーフィアやグレイシアは距離的にちょっと無理あるけど進化はさせておきたい。

チャンピオンリーグまでイーブイのままとか正直戦力にならん。

タマムシシティのデパートで石が売つてあつたはずだから遅くともそれまでに決めておきたいな。

「旅に出たら俺とシゲルはもうライバルだな」

「まあ、ジムバッジ8つ集めてポケモンリーグに出ればやりあうかもな」

ポケモンリーグはトーナメント方式らしいし。

「そのときはお互い本気でバトルしようぜ！」

「わかってるつて。これだろ」

そういうつてポケットから半分に割れたモンスターボールを出す。

「ああ、俺とシゲルがライバルの証だぜ」

「そうだな、将来の目標つてのはまだはつきりしてないけど、俺もバトルで負けるつもり

はないよ」

「俺だつて絶対に負けないからな！」

ポケモントレーナーまであと2か月。

こうして友人兼ライバルとの何気ない会話もあと2か月。

習慣となつているトレーナー訓練も研究所の手伝いもあと2か月。

こうして間近になつてみるとなんだかさびしい気分になつてくる。

・・・・・別にさみしがり屋なわけじやないんだからな！

目尻が熱いのは今までの訓練を思い出したせいなんだからな！ホントだぞ！

・・・本当に熱くなつてきた。

「・・・ところで話がかわるんだけどさ」

「なんだ？」

「このさつきからテレビで流れてる番組なんだけどさ」

「これ？シゲルが居なかつた時に放送されていたポケモンバトルを録画したやつだけど」

「いや、これを見せるためにわざわざ録画して見してくれるのはうれしいんだけどさ」「どうかしたのか？」

『おーっと！ここでサンドパンを出しました！』

『対する相手はスターミーを選出つ！』

『サンドパン！スピードスターだ！』

『スターミー！かわせ！』

『スターミー、見事にかわしました！』

『スターミー！こつちもスピードスターだ！』

『サンドパン、避けろ！』

『サンドパンも見事回避！両者熱いバトルが繰り広げられます！』

「・・・・・」

「どうしたシゲル？この試合は今回の名勝負だつたんだぜ！」

「・・・いや、俺もこういつた番組はそれなりに見るけどさ」

「どうかしたのか？」

「・・・・なんでもない」

スピードスターは星型のなにかを飛ばすだけの攻撃なんですね。

そして「かわせ」という技があるんですね。

スピードスターすらも回避出来る優れた技なんですね。

・・・・解せぬ。



「ただいま」

「ブイ〜」

「あら、ちょうどよかつた、ちょっと待つてね・・・シゲル、電話よ〜」

「電話？だれから」

「話せばわかるわよ、ほら変わつて」

そういつて受話器を俺に渡し、意味ありげな笑みを浮かべながら姉さんはキツチンに去つて行つた。

「・・・？。もしもしお電話変わりました！」

『あら、お帰りになられたのですね、シゲルさん！』

「・・・・・エリカ？」

# ノーマルマサラ人 5話

念願の10歳となり、待ちに待つた。ポケモントレーナーとして旅立つ日。

二日前から荷物の準備をし、何度も何度も忘れ物がないか確認した。

そして昨日の夜は遠足に行く子供のように寝つけが悪かつた。

こつちの世界に転生してから、あれほど緊張した夜は初めてだ。

旅なんかしたことがないから当然だろう。

本日は晴天なり。

見上げれば雲一つない空をポツポの群れが見える。

旅立ちにふさわしい空だ。

「それじゃ、行つてらっしゃい。立派なトレーナーになりなさいよ」

「・・・姉さん」

「あら、忘れ物があつたの？」

「いや、そうじやないけど」

これからしばらく、もしかしたら何年もここに戻らないこともあるかもしねれない。

やつと旅立つことが出来ると思う反面、やはりさびしいと思う気持ちもあるわけで。

実年齢はともかく、なんだかんだで体は10歳になつたばかり。  
無意識に一人で旅に出ることに不安があるのかも知れない。  
言いたいことは今言うべきだと思つた。

「姉さん、今まで俺の訓練に付き合つてくれてありがとう。姉さんのおかげで色々な  
ことも学んだよ」

何度も気絶したが姉さんの訓練のおかげで前の自分じやあり得ないぐらいたくまし  
くなつた。

「姉さんが鍛えてくれなかつたら、もつと不安な気持ちで旅立つことになつてたと思う」  
「・・・」

「つらくてやめたといつて思つたこともあつたけど」

「でも姉さんの訓練のおかげでこれから何があつても大丈夫だつて思えたりもするん  
だ」

「・・・」

「だから、ありがとう」

本当はもつと言いたいけど恥ずかしさが出てこれが限界だつた。

姉さんの顔を見上げると目が少し潤んでた。

こんな姉さんの顔を見るのは初めてだ。

「・・・シゲル。あなたは今までよくがんばったわ。今ではフォークボールを使って2枚抜きができるようになり、ドードリオに引けを取らないほど走れるようになつたわ」

潤んだ目で俺を見ながら今までの俺の頑張りを認めてくれる。

「あなたはこの旅が終わつたら、今の自分よりもっと立派になつて帰つてくるわ」「姉さん、俺きつと・・・」

「そのときは、今度はイワークを超えるように鍛えてあげるわ！」

「イワーク」・・・いわへびポケモン

おおきないわをもくらいながらじめんなかをほりすすむ。そのスピードはじそく  
80キロ。

by プラチナ図鑑

とんでもねえオチがつきやがつた!!

「だから頑張りなさい。そしてちゃんと帰つてくるのよ・・・

・・・・・つまり、立派になるまで帰らなくていいってことだよね。

「姉さん、俺立派になるよ。・・・時間が掛かると思うけど」

たぶん<sup>4</sup>、5年ぐらい時間掛ける・・・じやなくて掛かると思う。  
少なくともイワークを忘れてくれるぐらいの時間が。

「・・・それじゃ行ってきます」

「ええ、行つてらっしゃい!!」

潤んだ目でハンカチを振り出す姉から、走つて逃げたい気持ちを抑え研究所に向けて歩き出す。

旅はまだ始まつても足取りはすこぶる悪い。

旅立ちにふさわしい晴天なのに気分は全く晴れやかではなかつた。

静かに足を叩いて首を左右に振るイーブイのしぐさに哀を感じながら俺の旅が始まる。



「おお、一番最初に来たのはシゲルじやつたか」

「あれ、誰もいない。早すぎた?」

時刻はAM9:00。

これまでの先輩トレーナーもだいたいこれくらいの時間に研究所にきてたはずだけど。

せつかちな人は前日の夜に研究所の前に居座つて、寝袋でスタンバつてるくらいだ。正直、あれはうつとうしかつた。

「実はのシゲル、今日は少々問題があつてな」

「問題?」

「うむ、本来初心者用のポケモンは人数分用意されるんじやが」

この研究所で長いことその手伝いをしているから、それは知つてる。

「しかしのう、前日になつて内1体のポケモンの具合が悪くなつてのポケモンセンターに送つたのじや」

「え? もしかしてもらえないつてこと」

「いや、送つたのは1体だけじや。ただ人数分のポケモンが用意されてないんじや」

「・・・たしか今回旅立つトレーナーつて、俺とサトシ含めて4人いなかつたつけ?」

「そうじや、しかし今用意されてるポケモンは3体しかいない」

あれ、そうなつた場合どうなるんだ?

「まあ、こうなつてしまつた場合早いものの勝ちじやな。今までそういうことがあつたしのう」

ポケモンをもらう時は基本的に人数分用意されている。

新人トレーナーが何人いても一匹を渡せるように予備も用意しておくのだ。

旅立つトレーナーがよほど多い町とかは誕生日に期限を記入して別々に取りに来させる所もある。

ただ、マサラタウンのようなそれほど大きくない町はこうして一斉に取りにこさせる所もある。

なぜならトレーナーが来るたびにポケモンの様子をチェックして渡さなければならない。

それならばまとめた日に来させてポケモンもまとめてチェックして用意したほうが楽だからだ。

またオーキド研究所は研究員が少ない。

そのため必然的にポケモンや図鑑の説明はじいちやん一人でやる。

しかし、仕事が重なつて他の町に出かけることもあるため、その人の誕生日に無理があつたりする。

もろもろの理由からマサラタウンでは決まつた日にちに旅立つようにしてゐる。

「といつても、ポケモンセンターからの連絡では3日で戻つてくるようじや。一番遅かつたトレーナーにもちゃんと渡すことは出来る」

「そうだけどせつかく旅立つのにいきなり3日延長つてがつかりすると思うよ」「しかし、こればかりはのう。・・・まあ4体目がいないわけじやないんじやが」

「え、なに？」

じいちゃんが目をそらしながらぼそそとなんか言つてる。

じいちゃんは首を振り、なんでもないとつぶやきながら少し奥に進み、

「さあ、シゲル。気を取り直して最初のポケモンを選ぶのじや！」

そういうてじいちゃんはモンスター ボールを置いてる円形の台から一つを手に取り・・・

「まずは炎タイプ・ヒトカゲじや」

そういうてモンスター ボールが開き、中から光と共に赤色の体色のトカゲが現れる。

「次に水タイプ・ゼニガメじや」

2つ目に出でくるのは甲羅を背負つた水色のカメだ。

「最後に草タイプのフシギダネじや」

3つ目は緑色に大きな種を背負った・・・・力エルかな?  
ゲームもやつてたし、こっちの世界に来てからも見てたんだが図鑑じゃ「たねポケモ  
ン」としか書いてないんだよ。

まあ、いちいち突っ込んだら駄目なんだろうけど。

「さあシゲル、この中から一匹を選ぶのじや」

やつぱり色違いはいないな・・・ちよつとは期待してたけど。

「その前にじいちゃん。ポケモン図鑑くれない」

「なに?」

「1匹しかもらえないんだから、せめて他の2匹も図鑑に登録しどきたいんだ」

ほんとは違う理由だけど。

「なるほど、そういうことか。ほらこれがポケモン図鑑じや」

そういってじいちゃんはポケモン図鑑を渡してくれた。

「ありがとう。それじゃ早速」

ポケモン図鑑を開き、さつそく3匹をそれぞれ図鑑に登録する。

そして同時にポケモンが覚えてる技と性格に目を通す。

「ヒトカゲ」・・・うまれたときからしつぽにほのおがともつていて。ほのおがきえたときそのいのちはおわっててしまう。

『おくびょう』な性格 特性—もうか

わざ『ひつかく』『にらみつける』『ひのこ』

「ゼニガメ」・・・ながいくびをこうらのなかにひっこめるときいきおいよくみずでしつぽうをはつしやする。

『ゆうかん』な性格 特性—げきりゆう

わざ『たいあたり』『なきごえ』『あわ』

「フシギダネ」・・・うまれたときからせなかにしょくぶつのタネがあつてすこしづつおおきくそだつ。

『おだやか』な性格 特性—しんりよく

わざ『たいあたり』『なきごえ』『つるのむち』

うむ、やはりゲームの時と違つて各タイプのわざを最初から覚えてる。

この世界の初心者用ポケモンはゲームの時と違つてある程度育てられてる。

今までも先輩トレーナーのポケモンを見せてもらつた時もそうだつた。

たまに最初から『ほのおのうず』や『バブルこうせん』を覚えてる個体もいたな。おそらく親から遺伝したのだろう。

まあそれよりもポケモン図鑑を先に渡してもらつた理由はわざだけじゃない。

俺が一番気になったのは「性格」だ。

ポケモンを育成するにあたつてどういった育成をするかを決めるのは性格といつても過言ではない。

ポケモンは性格によつて上がりやすい能力と上がりにく能力が決まつてゐるのだ。

例えば「ヒトカゲ」の『おくびよう』な性格は

「すばやさ」が上がりやすく、「こうげき」が上がりにくい。

似たような性格で『ようき』な性格の場合は

「すばやさ」が上がりやすく、「とくこう」が上がりにくい。

この二つの性格を比べた時、上がりにくい能力が「こうげき」と「とくこう」と分かれている。

つまり物理主体の技構成（『ほのおのパンチ』や『つばきでうつ』など）の場合は「とくこう」が下がつても気にする必要はない『ようき』な性格が適している。

逆に特殊主体の技構成（『かえんほうしや』や『ひのこ』など）の場合は「こうげき」

が下がつても気にする必要はない『おくびょう』な性格が適している。

これは一例に過ぎず、『ゆうかん』の性格は「こうげき」が上がりやすく、「すばやさ」が上がりにくい。

「こうげき」が上がりやすい性格だが「とくこう」はなんの影響も受けないため、「こうげき」・「とくこう」両方の技を覚えさせる（両刀型）なんてのもある。

さてこれ以上はキリがないからこれまでにしておこう。

問題はこの3匹からどいつを選ぶか・・・。

『おだやか』な性格のフシギダネは選択肢から除外する。

『おだやか』な性格は「こうげき」が上がりにくく「特防」が上がりやすいからだ。

ゲームの対人戦では十分活躍できる性格だが、ストーリー攻略の際はあまり活躍できる性格ではない。

基本的にストーリー攻略を優先するならば攻撃寄りの性格を選んだほうが手っ取り早い。

対人戦特有の読みあいがないためゴリ押しでどうにかなるからだ。  
ゲームと違うとはいえたが、バトル中継を見る限り、技の読みあいはあまりない。  
ほとんどが攻撃技の応酬。ゴリ押しだ。もしくは補助技に頼りきる戦い方だ。

そしてほとんどのトレーナーが「かわせ」と指示してたりする。

・・・解せぬ。

話を戻して、選ぶならヒトカゲかゼニガメのどちらかだが、こいつのことも考慮しなければならない。

「イーブイ、ちょっとといい」

「ブイ？」

「ついでにお前も図鑑に登録しておくから、ジツとしといて」

「ブイ！」

こいつの性格も確認して、進化形に目途をつけておこう。

物理攻撃寄りの性格ならブースター・特殊攻撃寄りの性格ならサンダース・防御寄りの性格ならシャワーズにしよう。

あとはタイプがダブらない方のポケモンを選ぶのが無難だろう。

「イーブイ」・・・3しゆるいのポケモンにしかかるかのうせいをもつめずらしいポケモンだ。

『ひかえめ』な性格

特性—きけんよち

わざ『たいあたり』『しつぽをふる』『すなかけ』

特性——きけんよち

・・・・・

特性——きけんよち

「アイキヤンフラーヴィ

「ブレイ！」

この子、ドリームワールド産のポケモンでした。

# ノーマルマサラ人 6話

「イーブイ！『たいあたり』!!」

「ブイ！（ヒュツ・・・ドゴツ！）『ピカツ！？』

イーブイの『たいあたり』が決まり後ろへ吹き飛ぶピカチュウ。

これで三度目の攻撃。ピカチュウもかなり弱つている。

ここトキワの森であっさりと野生のピカチュウにエンカウンタしたのは運がいい。  
手持ちのポケモンのレベル上げに来ただけのつもりが思わぬ僥倖だ。

「ピカー！！」

「ブイ！」

放たれる『でんきショック』を難なく避けるイーブイ。

『すなかけ』を一度も使ってないので二度目の回避だ。

命中率100%の攻撃をかわしきつている。

指示も出してないのにすげえ・・・。

状況は完全にこちらが有利。

イーブイはノーダメージであり、対するピカチュウは息が荒く倒れそうになつてゐるがなんとかこらえている状態だ。

遭遇した時に図鑑で確認した通り『がんばりや』な性格のようだ。

「イーブイ、ピカチュウの動きを抑えるんだ！『すなかけ』！」

最近知つたことだが技には本来の効果以外にも副次効果があつたりするようだ。例えばこの『すなかけ』。本来の効果は相手の目を砂でつぶして命中率を下げる技だ。しかし、実際目を砂でつぶされたらその場で目をこすつたり（目をこするのは良くないけど）かぶつた砂をはらうために頭を振つたりする。要は多少なりとも相手の動きを抑えられるのだ。

イーブイの『すなかけ』をもろに食らい予定どおり目をこすりだすピカチュウ。完全に動きが止まつてゐる。今ならただの「まと」だ。

「イーブイ、ピカチュウをゲットするから攻撃するなよ」

俺の指示通り少し距離を取り待機するイーブイを確認し、腰のホルダーから空のモンスター・ボールを手に取る。

ボールのボタンを押し手のひらぐらいの大きさに変える。手に馴染んだ感覚だ。

2年前から始めていた2枚抜きbingoゲームで使用してゐた球はモンスター・ボール

と全く同じ大きさであつた。

あの何度も心が挫けそうになつた訓練も無駄ではなかつた。

今ではカーブからフォーカスボール、チエンジアップすら投げることが出来る俺に目の前の「まと」を当てることなぞ造作もない。

・・・チエンジアップは無駄だつたかも知れない。

狙いは胴体、ピカチュウの腹部。

両手で目をこすつてるために完全に無防備。

球種は一番速度があるストレート。

右手にボールを構え、左足を上げ、腰を捻る。

狙いを再確認し、左足を着け、腰の捻りと同時にボールを、投げる!!

「——行け！モンスター！ボール！！」

「ピツ・・・・・・・・・・・・・・ゴフウ  
!!??  
」

・・・・・・・・・・・・・・あれ?

「ピ・・・・・・・・・・・・・・ウウ・・・・オエ・・・」

・・・・・状況を確認しよう。

狙いは胴体、ピカチュウの腹部。

両手で目をこすつてゐるためには、完全に無防備。

球種は一番速度があるストレート。

そして俺の投げたストレートは狙い通りピカチュウの腹部に当たつ・・めり込んだ。モンスター・ボールは「ポケモンを入れる」という仕事をせずにピカチュウの腹部から転がり落ちなんの反応も起こさない。

そして両手で腹部を押さえ蹲りながら今にも『ヘドロばくだん』しそうなピカチュウ。すでに口元から『いえき』が垂れている。

ようやく状況がわかり呆然とする俺。

風が吹き地面を転がり始めたモンスターボール

今だ呻いているピカ丘エウ

「勝った、勝った！」と言わんばかりに辺りを飛び跳ねるイーブイ。

……なんでやねん。

◇◇◇

「お待ちどうさま。お預かりしたポケモンはみんな元気に・・・なつたはずなんだけど、なぜかこのピカチュウだけすぐく震えてるの」

「そ、そうですか・・・」

現在ニビシティポケモンセンター。

あの後明らかにオーバーキルしてしまったピカチュウをポケモンセンターに運びジョーイさんに預けた。

流石にあのまま放置するのは良心がブローケンしそうであつた。

手持ちのポケモンと一緒預け、治療から返ってきたピカチュウであつたが・・・

「・・・ピ・・・ピ・・・ピカ・・・」

・・・めっちゃ震えてる。

明らかに怯えている。ピカチュウからすれば自分をオーバーキルしていた奴と再びエンカウントしてしまったのだから当然と言えば当然だろうが。

「えっと、大丈夫か。ピカチュ「ピガ――――――――!!」 うおつ!?」  
語りかけようと近づくと悲鳴をあげて逃走するピカチュウ。

ちょうどポケモンセンターにだれか入ってきて自動ドアが空いた瞬間、全力疾走で野生に帰つていった。

あのピカチュウ・・・絶対トレーナー恐怖症になつちまつたな。

意図せず強烈なトラウマを植え付けてしまつたピカチュウに心から謝罪。

・・・次あつたら土下座でもしよう。即座に逃げそうだけど。

「君！あのピカチュウ逃げちやつたわよ!!」

「あ、大丈夫です。あのピカチュウ、俺の手持ちじゃないんですよ」

「あら、そうなの。じゃあ君はけがをしたピカチュウをわざわざ連れてきてくれたのね」

「・・・え、ええ。・・・まあ」

「ふふ、やさしいのね」

「ハ・・・ハハ・・・ハハハ」

言えなかつた・・・。「モンスターボールを叩き込んだ」なんて俺には言えなかつた・・・。



しかしまいったな。モンスター ボールでひんしなんて洒落にならんぞ。  
ポケモンをゲットする道具がポケモンを倒す道具とか。

思えば腹部とかもろ急所じゃないか。オーバーキルにもほどがある。

その後手持ちポケモンを受け取りポケモンセンターにて早めのランチタイム。  
ここポケモンセンターではポケモンの回復だけでなく、トレーナーなら誰しも食事や  
宿泊がタダで使用可能である。

まさに至れり尽くせり。・・・というかどうやって利益がとれるんだろうか。  
手持ちのポケモンに無料のポケモンフードを渡し、ふと思い出す。

「今思えば、お前をゲットした時はヒゲに当たつてたな」

「二ド？」

「呼んだ？」といった感じでポケモンフードを一心に頬張っていた二ドラン♀がこちら  
を向く。

「いや。もしあの時、お前が動かなかつたらツノを根元からへし折つてたかもつて話」  
「二ド!?」

あの日マサラタウンから旅立つた俺はまつすぐにトキワシティ・・・の西のほうにあ

る22番道路へ直行した。

目的はこのニドランをゲットするためだ。

途中出てきた野生のコラツタやポッポなどは経験値としておいしく頂いた。

正直♂でも♀でもどっちでもよかつたが、たまたまエンカウントしたこのニドラン♀、性格が『しんちよう』だった。

「とく、う」が上がりにくく、「とく、ぼう」が上がりやすい性格だ。

防御寄りの種族値をしているニドクインには悪くない性格だったのでゲットしようとした。

ピカチュウ同様『すなかけ』を使用し、相手の動きを抑えてからモンスター・ボールを投げたのだが、こいつはピカチュウと違い完全に四足歩行のポケモンだ。

つまり目をこする事も出来ないため頭をめちゃくちゃに振り回して砂をはらつていた。

狙つた通りならモンスター・ボールは額の近く、ツノらへんに直撃するはずだった。

しかし当たる直前にちようど顔を側面に向けボールはヒゲに当たった。

ヒゲだとするとポケモンに当たつたことには違いないのかモンスター・ボールが反応。

そのままゲットした。

「よかつたなニドラン。最悪の場合、毒技が出せない毒タイプのポケモンになつてたぞ」

「・・・ニド」

「ニドラン」・・・ちいさくてもどくばりのいりよくはきょうれつでちゅういがひつよう。メスのほうがつのがちいさい。

『しんちよう』な性格 特性—どくのとげ

わざ『ひつかく』『なきこえ』『しつぼをふる』

現在のニドランのステータス。

なぜ最優先でニドランをゲットしたかというとニビジム攻略のためだ。

2日前からここニビシティに滞在しているが今だニビジムの門を叩いていない。  
というのも今の手持ちのポケモンでは勝ちが見込めないからだ。

「カゲ？」

「いや、なんでもないよ」

そう、俺は初心者用のポケモンの中からヒトカゲを選んだのだ。

これにはイーブイの夢特性が関係していた。

「・・・ブイ」

「ん？もういらないのかイーブイ。お前はこいつらと違つて食べる量が少ない気が、・・・・・『ひかえめ』な性格つてそういう意味じやないよな」

夢特性のイーブイ。

夢特性のポケモンは通常の個体とは違う特性である。同時に進化形の特性も変わってくる。

通常のイーブイ進化形の特性は、

「ブースター」 特性——もらいび・・・受けた炎技を無効にし、自身の炎技の威力が1・5倍になる

「サンダース」 特性——ちくでん・・・受けた電気タイプの技を無効化し、最大HPの25%を回復する

「シャワーズ」 特性——ちよすい・・・受けた水タイプの技を無効化し最大HPの1／4を回復する

と、それぞれ自身と同じタイプの技を無効化する特性だ。

ゼニガメかヒトカゲを決める時、イーブイの性格を見てサンダースが適していると思つたが、夢特性ならば事情が変わる。

夢特性のイーブイが進化した場合、

「ブースター」 特性——こんじょう・・・状態異常のときに攻撃が1・5倍になる

「サンダース」 特性——はやあし・・・状態異常のとき素早さが1・5倍になる

「シャワーズ」 特性——うるおいボディ・・・雨のときに状態異常が治る

このように特性が大きく変わる。

そしてこの中で特性とタイプが一番マッチするのがシャワーズだつたりする。シャワーズはイーブイの進化形の中で一番体力（HP）が多い。

またサンダースと同じ「とくこう」の数値を持つていたり、「ぼうぎよ」の数値は低いが「とくぼう」の数値は平均以上を持っている。

つまりサンダースのような速攻アタッカーとは違い、居座つて安定した戦いが出来るのだ。

そしてこのうるおいボディとは非常に相性が良い。

大まかな流れとしては、

「あまい」→「ねむる」→「うるおいボディが発動」→「起床」

といった長々と居座ることが出来るようになる。

また雨の状態では水タイプの威力が1・5倍になる。

こういったことからこのイーブイ、シャワーズに進化させようと判断。水タイプの枠が埋まつたから炎タイプのヒトカゲを選んだ。

しかしそうなるとノーマルタイプのイーブイ・炎タイプのヒトカゲではニビジムの岩タイプのポケモンに有効打がないことになる。

そこでこのニドランである。

ニドランは序盤手に入るポケモンの中で格闘タイプの「にどげり」を覚えることが出来る。

相手は岩・地面タイプを持つていてが地面タイプの技を覚えていないので毒タイプでもさほど問題ない。

つまり、このニドランがニビジム攻略のカギになってくれるだろう。

「さて、飯も食つたしそろそろ行くか」

といつてもまだニドランが「にどげり」を覚えていないため現在トキワの森でレベル上げの最中だ。

ゲームと違つてレベルを数値として見れないためどれくらいレベルが上がつたかわからぬ。

ひたすら野生のポケモンを相手にして図鑑で確認する。  
今日中には覚えてほしいところだ。

(・・・おい、聞いたか。あの話)

(ああ、聞いたとも。どうやらまじらしい)

・・・うん?

(3番道路の方から来たらしい)

(ああ、自転車で来たみたいだぜ)

飯を食つてた反対側の席。窓際の席の二人がなにやら小声で会話をしている。

・・・余計怪しいだろうに。

(まじか、自転車で來てたのか。あの「へそ出しルック」の子)

(今はトキワの森に行つたらしいぞ。その「へそ出しルック」の子)

・・・へそ出しルック?

# ノーマルマサラ人 7話

「いや、参った。お主強いでござるな！」

「・・・はあ、どうも」

「拙者もまだまだ力不足だということを体感したてござる」

「・・・はあ、そうですか」

「こうなればひたすら修行でござるな！」

「・・・はあ、頑張ってください」

現在トキワの森、トキワシティ方面。

私ことシゲルは今日の前のトレーナーとバトルを行いました。  
正直、どうリアクションをとればいいかわかりません。

なぜトキワの森に住んでるのか。

なぜ語尾に「ござる」をつけるのか。

なぜトキワの森に出ないはずのカイロスを持つてるのか。

なぜ『かたくなる』しか使わないトランセルを出したのか。

そんなことがどうでも良くなるような疑問を抱いています。

「うむ、お互い精進するでござる！ハーハツハツハ！」

・・・なぜノースリーブシャツと短パンで鎧兜を着けてるのか  
・・・なぜ刀を差してて背中に虫取り網があるのか

非常に気になつてます。

「・・・ところで拙者の格好どう思うでござる」

「個性的です」



『スピアーガ?』

『左様、最近妙に攻撃的でござる』

『……例えば?』

『普通スピアーはなわばりに入るものには容赦なく集団で襲うでござる』

『そららしいな』

『ただ、最近は森で見つけたものは片つ端から襲いかかってるでござる』

『1匹で?』

『いや、2・3匹のグループで巡回して襲うでござる。それから持ち帰れそうなものは巢に運んで行くでござる』

『……ちなみにいつぐらいからそんなことに』

『そうでござるな。だいたい2・3日前ぐらいでござるな』

『……』

『どうしたでござるか?急に考え込んで?』

『いや、なんでもないよ。情報ありがとう。えつと・・・・・落ち武者君?』

『サムライでござる!』

そんな会話で別れたのが今より2時間前。

俺はその間ずっと、さつきのスピアーカーのことを考えていた。

・・・というよりも多分原因は俺かなと思つたりしてゐる。

22番道路でニドランをゲットしたのは3日前。

そしてここ2・3日間、ニビシティのポケモンセンターとトキワの森を行き来して経験値を稼いでいた。

主な標的はコクーンやトランセルだ。

理由は単純。楽だからだ。

この2匹はトレーナーの指示で『どくばり』や『たいあたり』といった攻撃が出来る。しかし野生のこの2匹は身を守ることが最優先なのか『かたくなる』しかしない。

ニドランに『にどげり』を覚えさせたい俺からすれば非常においしい話だ。

だがさつきの話を聞く限り、どうやらコクーン大量虐殺の結果、スピアーダ激怒となつてしまつたようだ。

おそらくグループで巡回してるのは巣にいないコクーンを探して、見つけ次第巣に運ぶ仕事をしているのだろう。

もしくは餌になりそうなものを運んでいるか。

ちなみについ先ほど「にどげり」を覚えた。

「目的は達したし、今日はもうポケモンセンターに戻るか」

「ブイブイ！」

夕日も沈み始めて夜行性の虫ポケモンが活発にもなるだろう。  
さつきの話から下手に長居してスピアード遭遇するのは望むところじゃない。  
さつさと戻つて寝よう。

「・・・ブイ？・・・ブイ！」

「・・・どうしたイーブイ、トイレか？だつたらそちらへんの木でいいだろう。マークリングはほどほどにな」

「ブイ！ブイ！」

「つてどこに行くんだよ!?マークリングならそこでいいだろ！・・・え、ちがう？」  
いきなり駆け出すイーブイ。

もしや大か?ならばエチケット袋をとついて行きながら用意しだす俺。  
しばらくついて行くと、イーブイがいきなり止まりだす。

ここで大か、と袋を広げた俺の視界に入つたのは・・數十匹のスピアード。  
そして大量に気にぶら下がつてゐるコクーンと木に張り付いてるビードル。  
ついでに糸でぐるぐるに縛られ木にぶら下がつてゐる「へそ出しルック」。

・・・「へそ出しルック」・・・だと・・・!?

・・・モノホンの「へそ出しルック」を見ました・・・。

# ノーマルマサラ人 8話

旅に出た理由は単純。居心地が悪かつた。

アタシには3人の姉がいる。両親はいない。

そして前々から居心地が悪かつた。

ジムに居れば3人の姉さんたちと比較され、嫌味や面倒事を押しつけられる。ジムのショリーを見に来る客も姉さんたちを見に来るだけで陰で苦労しているアタシを見向きもしない。

姉さんたちもそれをいいことに「ハナダジムの美人三姉妹」なんて自称して自慢していく。

うろ覚えの両親はアタシが幼い頃に家を出て行つた。

姉さんたちには服や鞄を買っておいて末っ子のアタシには姉さんのお下がりしかもらえない。

・・・ポケモンのひな人形、欲しかったな・・・。  
もうまともに顔も覚えていない。

だからアタシは旅に出た。

姉さんたちに強気な啖呵を切つて。

行き先は決めていない。どこでも良かつた。

姉さんたちに比較されず、嫌味や面倒事を押しつけられなければ良かつた。

旅に出た感想は「楽しい」だつた。

なにもかも自由だつた。

欲しい服を買つたり、好きなものを食べたり、好きな所に行つたり、自分の好きなよう<sup>う</sup>に時間を使える。

とても楽しかつた。

・・・野宿には慣れず、毎日お風呂に入れ訳でもなく、ご飯が缶詰だけのときもあつたが。

とにかく楽しかつた。

それでも同じ所に長居するのではなく少しずつ場所を変えて・・・ハナダシティよりも遠くの場所へ行つた。

姉さんたちの居る所から遠ざかりたかったのかもしれない。

自転車に乗つて好きな所で好きなように時間を使える。

とても楽しかつた。

だからこそ油断・・・いや、単に浮かれていた。

そして知らなかつたのだ。

旅は楽しいことだけでなく、恐ろしく危険なこともあるのだと・・・。

3番道路を抜けてトキワシティで軽く買い物をし、トキワの森へ向かう。

旅に慣れ始め、そろそろポケモントレーナーの本分、ポケモンをゲットしようと思つたからだ。

ここまで來るのにアタシの欲しいポケモン、水タイプのポケモンを見かけることもなかつた。

そしてトキワの森に入ること数十分。

水タイプのポケモンが好みそうな絶好の水辺を見つけた。

歓喜しながらも急いでバツグから道具を取り出す。  
使い込まれた「つりざお」とルアー・・・「カスミちゃんスペシャル」。  
これで釣れぬものなし。

釣りを始ること数分。

今だつりざおに当たりはない。

釣りをすればこういうこともあるのだ。こういうときはひたすら待つ。  
正直じつと待つのは苦手だが大好きな水ポケモンのためにひたすら待つ。

ハツと顔を上げれば夕日が出ていた。

当たりの景色がオレンジ色に染まっている。

随分と根気強くじつとしていたようだ。

竿に当たりはない。今日はぼうずだつた。

こんな日もあるかとため息一つ。つりざおを上げルアーを回収。

つりざおをカバンにしまう。

今日はニビシティのポケモンセンターで泊まろう。  
近くのポケモンセンターでお風呂やご飯が食べれるのにわざわざ野宿する必要はない。

木に立てかけていた自転車へ向かい、気付いた。  
・・・立てかけていた自転車がない。

(まさか盗られた!?)

そんな慌てふためくアタシに妙な音が聞こえた。

一つではない複数の、背筋が震えるいやな音が。

恐る恐るゆっくりと振り返る。

見たくない・・・そう否定しながらも確認しなければ気になつてしまふがいい。

ゆっくりと振り返り、そこにいたものを見てアタシは、「こおり」ついた。

・・・3匹の「スピアー」がそこにいた。

悲鳴を上げる前に「こおり」ついて硬直したアタシに、スピアの『いとをはく』。3匹からの『いとをはく』でぐるぐる巻きにされたアタシをそのまま連行。

スピアーノ行きついた先は虫ポケモンの巣、スピアーノだけでなく「コクーン」や「ビードル」の巣だった。

(あ・・・ぼろぼろの自転車がある)

おそらく私と同じくここに連行されたのだろう。

所々かじられたような跡がありタイヤもパンクしていた。

それらを理解し、ようやく「こおり」状態から回復したアタシ。

同時によみがえる背筋の悪寒。込み上げてきた心の叫びを無意識に発していた。

「いや～～虫はいや～～～～～!!!!」

◇◇◇

(・・・どうしよう?!どうしよう?!どうしよう?!)

叫んだ瞬間、一斉にこちらを向いた虫。ポケモンを刺激しないよう慌てて口を噤む。これ以上刺激すればどうなるかわからない。

(・・・どうしよう、もう夕暮れなのに。こんな時間に他のトレーナーなんて・・・)

辺りは暗くなり始めている。

こんな時間にこの辺りを通る他のトレーナーなんていないと思う。アタシだつてそろそろポケモンセンターに行こうと思つたのだ。他のトレーナーだつてそうだろう。つまり助けを期待できない。

(だからって、どうしろっていうのよ!?)

通りがかつてくれる人は期待できない。

近くにいたとしても大声を出せば虫。ポケモンが反応する。かといってこのままジツとしていれば、

(あの自転車と・・・同じ末路に・・・)

刺激しないようゆっくりとぼろぼろの自転車に視線を向ける。

パンクしているタイヤ、かじられた跡があるハンドル、穴があいているカゴ。この中であんなことをするのは「ビードル」だろう。つまり私にも「ビードル」が這い寄り、かじられる。

(・・・死には・・・しない、わよね・・・)

自分で思つてて自信がない。

そもそも「ビードル」に這い寄られる時点で完全にアウトだ。精神が保てそうにない。

けれど打開策がない。

手持ちのポケモンはカバンに入ってるが、こうも縛られている状態では両手が使えな

い。

(・・・だれも助けにきてくれない)

だんだんと恐怖で竦んでくる。

楽しかった旅を思い出して気を紛らわそうとしても、

(・・・だめだ。・・・そういえばアタシ、旅に出てから一人だつた)

ジムを飛び出してから一人だつたことに気づく。

あの居心地が悪いハナダシティにも口うるさくも姉さん達がいつも一緒にいたことを思い出す。

・・・さびしいなんて今まで思つたこともなかつたことに気付いた。

横暴でわがままな姉さんたちに会いたい。

さびしい思いをしなくて済むから、姉さんたちに会いたい。

(・・・こんなことになるなら、旅なんて・・・)

だんだんと涙ぐんできたアタシに、

「二ドラン！　『たいあたり』!!」

男の子の声が聞こえた。

◇◇◇

(だれかいるの!?)

湧き上がる期待感で涙腺が緩んでくる。

「だれかいるの!お願い助けて!」

思わず声を出す。

周囲のスピアードの目を気にする暇なんてない。

そんなアタシの目に映つたのは1匹のポケモンが木に『たいあたり』をしていた。  
大きく揺さぶられる木々。

いきなりの振動で驚いたのか次々と落ちてくる「ビードル」。

振動で糸が切れ地面に転がる「コクーン」。

そして「ビードル」と「コクーン」を保護しようと慌てる「スピアード」。

私の周りにいた虫。ポケモンが遠ざかっている。

「おい、君！走れる……訳ないよな。担ぐぞ！」  
「え、ちょっと!?」

いきなり私の前に現れた男の子。  
年は、アタシと同じぐらい。

その子がアタシの体をつかむと一気に引っ張る。  
アタシを吊るしてた糸を引きちぎった。

そして、アタシを荷物のように肩に担いだ。

「ちょっと待つてよ！なんでこんな格好！先に糸ほどきなさいよ！」  
「そんな時間無いし、こっちの方が速く走れるんだよ。両手ふさがらないし。戻れ、二ド  
ラン！」

ポケモンを戻し、アタシを担いだこの子。

ものすごい速さで一気に巣の外へ駆けだした。

「悪いけどお姫様だつこの所望は今度してくれ！」

「？・・・だれもそんなもの所望してないわよ！つていうか降ろして！」  
 「君が俺よりも速く走れるなら降ろすよ！つて、もう来たか！」

そんな言葉に気付きアタシは顔を青ざめただろう。

なにせ數十匹のスピアード一斉にこちらへ向かつてくるのだから。

「どうするのよ！このままじや追いつかれるわよ！」

「わかってる！・・・直線なら負けないけど足場が・・・つと、こうだと思ふように走れないな！」

私たちが走っている（走っているのはこの子だけど）足場はひどく乱雑な道だ。

というよりも道ではない。ひたすら森の中を走つている。

おかげで凸凹した道であつたり、むき出しの木の根つこのおかげで飛んだり跳ねたりしている。

対して向こうは飛んでいる。道の良し悪しなんて関係ない。

「うお！『どくばり』飛んできた！・・・なあ、君。俺は走るのに集中するから盾になつ

「てくんない？」

「はあ？！いやよ！つていうか助けてくれるんじやないの！？」

「いや、そのつもりだつたけど……。いざ命の危険に晒されるとやつぱ自分が大事とか思つちゃつたり」

「なによそれ！つていうかアンタ、なんか余裕じやないの！？」

「旅に出る前から命の危険があつたからね……つと。けど流石に毒の耐性の訓練なんて……」

「……なによ、いきなり黙つて。つてまた『どくばり』飛んできたわよ！聞いてる！」

「……いや流石に姉さんでもそんなことは……やばい、してそうだな」

「なによさつきからぶつぶつと」

「……いや、漫画みたいに実は幼い頃から食事に少しずつ毒を入れて耐性をつけてたつてオチがありそうな」

「……言つてる意味はわかるけど、そんな事する人なんていないでしょ、つて数が増えてきてるじゃない！」

「いや、姉さんならやりかねん！……なあ君、ポケモン図鑑で俺の特性とか見れないか。『めんえき』とかだつたらどうしよう……」

「いいから！速く走りなさいよ！」

なんで命の危険に晒されてる状況でこんなアホみたいな会話をしてるんだろうか。アタシたちのアホみたいな会話をなんてお構いなしにスピアーガ少しづつ距離を縮めてくる。

「どうすんのよ！このままじゃ逃げきれないわよ！」

「この先に開けた場所がある！そこを超えた先の川に飛び込むぞ！」

「開けた場所つて！囮まれちゃうじゃない！」

「平坦な道なら負けないよ！それに、下手な場所で打つて山火事になつたら困る！」

「山火事つてなに!?」

「行けばわかる。つていうか着いた！・・・ヒトカゲ！」

男の子の声の先に赤く灯る火が見える。  
たき火・・・ではない。動いてる。

この子がさつきいつた通り、ポケモンの「ヒトカゲ」だ。  
アタシたちを待っていたかのようにそこにたたずんでいた。  
そしてヒトカゲとすれ違い、走り抜く。

「ヒトカゲ！『ひのこ』!! 狹いをつける必要はない、まき散らせ！」

「カゲ！」

この子の指示に従い返事をするヒトカゲ。  
この子の手持ちのようだ。

ヒトカゲから出される『ひのこ』。

辺りかまわず『ひのこ』がまき散らされる。

この子の言った山火事の意味がわかつた。

いきなりの炎タイプの攻撃に驚き速度を緩めたスピアーツたち。

効果はバツグンだ。

そして狙いをつけずに適当に吐き出されているためスピアーツたちも戸惑っているようだ。

とはいえた時間を稼いだのは数十秒ぐらいだ。

距離を取り態勢を整え始め、一斉にヒトカゲに襲いかかろうとする。

「よくやつた、戻れヒトカゲ！」

ヒトカゲの稼いだ数十秒の間にかなりの距離を稼いだアタシたち。

走りながら後ろを向かず片手でモンスター・ボールにポケモンを戻す様子を見て場違

いにも器用だなと思つた。

「このまま川に飛び込むぞ。長いこと潜るから息吸つとけよ！」

「潜るつて言つたつて・・・スピアードが待ち構えてたらどうするのよ？」

「別に飛び込んで通りすぎるのを待つわけじゃない。そのまま下流まで泳ぐぞ」

「下流まで？」

「ここから下流に向かえばオニスズメのなわばりだ。虫ポケモンは寄つてこない。そこまで泳ぎきる」

「つて言つてもアタシ糸で泳げないわよ!?」

「俺が泳ぐ！君はひたすら耐えてりやいい」

「そんなこといつたつて・・・」

「川が見えてきたぞ。息を吸つて、じつとしていてくれよ」

「・・・わかったわよ。・・・離さないでよね」

「途中離れて溺死したら俺の枕元に立つていいよ」

「離さないといいなさいよ！」

そんなやりとりをしながら深呼吸をして心臓を落ち着かせる。  
不安ではあるが、この方法でしか逃げきれないとも思う。

距離を取つたとはいえ少し離れた所からスピアーラの集団がこちらへ向かつてくるのが見える。

・・・ 覚悟を決めよう。

「行くぞ！・・・ つ！」

「・・・ つ！」

思つたよりも流れの速い川に身を投じたアタシたち。

アタシの体をしつかりと抱きしめてくれてる、思つたよりも力強い腕を感じながら、

「・・・ つ！・・・ つ！」

私の意識は真つ暗になつていつた。



「ぶはっ!! ゲホツ!! ゲホツ!!」

景色はすっかり暗くなっていた。

あのスピアードかなりの時間鬼ごっこをしていたらしい。

「……はあくく……ゲホツ！ 流石に2分近く泳ぐのは初めてだ。……よつと」

抱きかかえていた女の子を地面に横たえる。意識がないようだ。  
無理もないと思う。

「まさか必要ないと思つてた潜水訓練が役に立つ日が来るとは……」  
姉さんの訓練（強制執行）で学んだ潜水泳法。

正直なんの意味があるのかと何度も問いかけそうになつたことか。

「つて回想に浸つてる暇はないな。イーブイ、いるか！」

茂みが揺れイーブイが顔を覗かせた。

予めここで荷物を置き、番を頼んでいた。

「イーブイ、枯れ木を集めててくれ。それと辺りに野生のポケモンがいたら『すなかけ』して遠ざけといて」

「ブイ！」

「さてと・・・」

横たえた女の子を見やる。

女の子のまな板・・・・胸板を確認し、呼吸を確認する。  
素人目だが規則正しい呼吸をしていると思う。

とはいえ素人目の判断は危ういだろう。

2分近くも潜水したのだ。水を大量に飲んだ可能性もある。

念のため姉さんから教わった救命法を試した方がいいかもしれない。

「えつと心臓マツサージで押す場所は、胸の真ん中で・・・」

ここでマウス  $t \circ$  コラツタなんて甘酸っぱい展開なんて起こさない。

溺水した人に何よりも優先するのは心臓マツサージだ。

人口呼吸は熟練した人がやって効果を發揮するのだ。

素人は人口呼吸よりも心臓マッサージを行い、意識を回復させることのほうが確実だ。

「手の甲に手のひらを合わせて、手首に近い位置で強く押さえて・・・」  
テンポは1分間に100回・・・だが、いちいち正確に数えられる訳ない。  
出来るだけ早く、リズミカルに押すことが肝要。

「意識を起こすために声を掛けながら・・・」

あとは意識を覚醒させるために声をかけながら、心臓マッサージ！

「へそ出しルツク!!へそ出しルツク!!へそ出しルツク!!」

ひたすら声を掛けて心臓マッサージ！

「起きろ、へそ出しルツク！目を覚ませ、へそ出しルツク！」  
心臓をリズミカルに押しながら強く押し続ける！

「風邪引くぞ、へそ出しルツク！腹壊すぞ、へそ出しルツク！」

何度も何度も意識が回復するまで、回復しなければ最終手段のマウスtοコラツタをしなければならない。

「なんでへそ出しルツク!?子供なのにへそ出しルツク!?!」

深く考えずとりあえず言葉を発する。ひたすらに。

「へそ出しルツク!!へそ出しルツク!!へそ出しルツク!!」

「・・・つ」

「へそ出しルツク!!へそ出しルツク!!へそ出しルツク!!」

「・・・つ！」

「へそ出しルツク!!へそ出しルツク!!へそ出・・・ゴフツ  
!!!!」

突如放たれた右ストレートがボディにめり込む。

くずれ落ち蹲ながらふと思い出す、あのピカチュウ。

あの時のピカチュウの気持ちが少しわかつたかも。

「ゲホッ!!ゲホッ!!だれが・・・はあ、はあ・・・・へそ出しつ・・・!!」

怒ってる・・・なんとなくそんな気がする。

そして今までの鬱憤をはらすような怒号が響き渡った。

「アタシは・・・・『カスミ』よ!!」

# ノーマルマサラ人 9話

「つていうわけで、今からニビジムに挑戦するつもりだよ」

『なにが「つていうわけ」なのかわかりませんけど、とりあえず頑張ってください』

こうしてエリカと話をするのも、旅に出る2カ月前に電話で話した以来だ。

その後は経営している香水の店が忙しくなつてくるということでお互い連絡を取らなかつた。

「タマムシシティまで遠いけどバッジ集めていくつもりだから必ずエリカのジムに寄るよ」

『はい、楽しみにお待ちしております。そのときは私も手加減いたしません。

・・・あの、ところでシゲルさん?』

「ん? なに?」

『シゲルさんは今・・・お一人で旅をなさつてるので?』

「?・・・ニビシティまではそ�だつたけど」

『そうですか、お一人で旅を! ・・・ニビシティまで?』

「いや、別に一緒に旅をしているわけじゃないんだけど、

一昨日ちょっとしたハプニングとその被害にあつた女の子と知り合つてさ」

『……女……の子……ですか?』

「たしか年は俺と同じだつ (ちょっとシゲル! いつまで電話してんのよ!) (

……ごめん、ちょっとせつかちな子だからそろそろ電話切るよ」

『……え、シゲルさん!? ちょっと』

「次の町のハナダシティに着いたらちやんと連絡するからさ。それじや」

『いえ、それよりも! 一緒にいる方は一体どんな (ブツツ)』

切る時なんか言つてたな。次に連絡したときにでも謝つとこ。

受話器を置き、一昨日出会つた『せつかち』な子に向かい、溜息一つ。

「カスミ。電話くらいゆつくりさせてくれよ」

「アンタ今日ジム戦でしょ! なのにんびりしてるのよ!」



「それで、どうするつもりなのよ」

「・・・・・なにが？」

「なにがじゃないわよ、ジム戦よ。はつきりいつて勝ち目なさそうじやない」

一昨日出会った「へそ出しルック」の子ことカスミと一緒にポケモンセンターで朝食。メニューは簡素なパンとスープとポツポの卵のスクランブルエッグ（無精卵）。ポケモンを食つてることなど今さら気にしない。ここでは当たり前なのだ。  
対面に座つてるカスミもポツポの卵を使つただろうオムライスを食している。  
・・・朝から重くないか。

「勝ち目のない戦いはするつもりないよ。相手から挑まれても断つて逃げるさ」「・・・かつこ悪いとか思わないのアンタ？」

「まつたく」

人それを「へたれ」という。

「それよりイーブイの尻尾弄りながら食事は行儀悪いぞ。イーブイもいやそうな顔して

るし』

「・・・・・ブイ」

「だつてこの子かわいいんだもの。尻尾もすごいふさふさしてさわり心地いいし」「そりや暇なときは手入れしてるからな。ケチャップ飛ばすなよ」

「・・・手入れ？ 誰が？」

「ここらへんに美容院なんてないだろ。俺の手持ちなんだから、俺がやってるよ」

「・・・アンタ、そんなこと出来るの!?」

「・・・俺が手入れするのがそんなに意外か」

イープイが孵化し、家に連れて帰ってきたときから姉さんに教わった。

まあ、正直俺も姉さんは肉体的訓練しか教わらないと思つてたけど。

毛の手入れや切り方、爪の磨き方など多義に渡り教わった。

・・・風船相手にカミソリの練習させられた時は本当にトレーナー訓練か心配したが。ちなみにイープイには主に毛の手入れ、ヒトカゲとニドランには爪の手入れをしてい  
る。

「じやなくて、ジム戦よ！ジム戦！ 本気で大丈夫なのアンタ！」

「さつきも言つたけど勝ち目のない戦いはしないよ。勝つ見込みがあるなら挑むさ」「そんなこといつてアンタの手持ちつてこの前見た3匹でしょ？ ほとんど相性が悪いじゃない」

「攻撃面じやまだ不安があつたりするけど、防御面はそこまで問題ないよ。用は戦い方次第さ」

「戦い方次第つて・・・。何よ余裕そうな顔して・・・。

わかつたわよ、アタシからはもう何も言わないわよ。せいぜいジム戦で後悔しなさい！」

そういうつて残り半分のオムライスを搔き込みだす。

本人なりの心配を無碍にされたと思ったのだろうか。

余計なフォローを入れるとさらに不機嫌になりそうだ。

一昨日から昨日の間に学んだ彼女の性格からして。

こういう時は熱が冷めるまでそつとしておくのがベターな選択だろう。  
飯も食い終わつたことだし。

「それじゃ俺はジム戦に行つてくるよ。イーブイ行くぞ」

「ブイ！」

ようやく解放されると喜んでいるイーブイをモンスター・ボールに戻す。普段はモンスター・ボール入れず肩に乗せて一緒に行動しているが、これからジム戦だ。

手持ちのポケモンを外に出せば相手にこちらの手持ちにイーブイがいる、と知られるので面白くない。

相手にこちらの手持ちをばらすようなものだ。

トレーナーを相手にするときはボールに入れ悟られないようにしている。

「じゃ、俺はこれで」

「!? ちょっと待ちなさいよ！ アタシまだオムライス残ってるのよ！」  
「？・・・え、と、ごゆっくりどうぞ」

「じゃなくて！ ・・・待つてくれたっていいじゃない」

「？・・・なんで？」

「なんでじゃないわよ！ アタシもジムに行くわよ！」

「え・・・あ、カスミもジムに挑戦するんだ。だつたら先に挑む？」

「違うわよ！ アンタのジム戦見るつて言つてんのよ！」

「え、応援してくれるんだ」

「な!? ・・・ そんなわけないでしょ。アンタの負けっぷりを見に行くだけよ！」

「やっぱ俺ジムに行くわ」

「待てつて言つてるでしようが!!」



そんな周りのトレーナー方に「迷惑を掛ける（音量）やりとりを終え、現在ニビジムの門の前。

結局カスミが食い終わるまで待ち、俺のジム戦を観戦しに付いてきた。

「それじゃ、行くか」

「・・・うつぶ」

「・・・あんなに急いで搔き込んだらそうなるつて」

「・・・うるさい」

締まらない面子だった。

「それじゃ、失礼します」

やたら重々しい外見の割にあっさりと開く門を通る。

中は真っ暗だつた。

「すいませ〜ん。ジムに挑戦しに来ました。ジムリーダー居ますか〜」

「・・・あんた緊張感ないわね」

「うるさいよ」

そんなやりとりをしながらジムに入り、奥へ進むと、

「君が挑戦者か？」

やや低めの声と共に照明が付いた。

「うお、まぶしつ。えゝとニビジムのジムリーダーで？」

「そうだ。俺がジムリーダーのタケシだ。どつちがこのジムの挑戦者かな？」

「あ、俺です。俺はマサラタウンのシゲルって言います」

「そうか、では早速だがジム戦を始めよう（パチツ）」

「へ？・・・うおつ」

いきなり始めようと指を鳴らすと部屋の両面から岩の何かが迫ってきた。

「つて、走るぞカスミ！」

「え・・・ちょっと!?」

カスミの手を取りジムの入口まで走る。

つていうかなんでわざわざ大仕掛けのジムにしてるんだ。

・・・する意味あるのかこれ。

十分距離を取り振り返ると両面から出た岩の何かがくつつく。

そして凸凹の激しい岩のステージが出来ていた。

・・・最初からこのままでいいじゃないか。

「さて、ジム戦を始めようか。審判、就いてくれ！」

「使用ポケモンは2体！ ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます！

先に2体のポケモンが戦闘不能になつた方が負けとなります！」

「では始めようか、俺のポケモンは『すいません！ ちょっとといいでですか！』・・・どうした？」

「おい、カスミ大丈夫か!? エチケット袋いるか!?’

「大・・・丈・・・・・うつぶ」

「無理すんなよ！ あんなにオムライスを搔き込むからそうなるんだよ！  
すいません！ 女子トイレってどつちですか!?’

「・・・あつちの奥の突き当たりに」

「だとよカスミ！ ほら背中さするだけじゃどうしようもないからトイレ行けって！」

「大・・・丈・・・夫・・・。あんま、・・・動かさないで・・・」

「すいません、椅子とか座るところないですか！」

「……そこに観客席が」



「……すいません、お騒がせして」

「……いや、こちらこそすまなかつた。今度からジムのアトラクションは控えるよ」

全く締まらない雰囲気がジムに蔓延していた。  
……どうしてこうなつた。

「えへと、ジム戦を始めてもいいかな？」  
「あ、はい。お願ひします」

ゴホンっと場の空気を払拭させるためか咳を一つし、

「それじゃ、俺のポケモンはこいつだ！ 行け『イシツブテ』！」

「一番手はお前だ『ニドラン』！」

「・・・それでは試合、始め!!」

無理やり空気をシリアルスにして俺の初めてのジム戦が始まった。

# ノーマルマサラ人 10話

「・・・それでは試合、始め!!」

「ニドラン、『にどげり』！」

「イシツブテ、『たいあたり』！」

審判の開始の合図が耳に届くと同時に、すぐさま予め決めていた指示を出す。お互いのトレーナーの指示に従い駆けだすニドランとこちらに迫るイシツブテ。互いの相手の間合いが自らの攻撃範囲内に入ると『わざ』の態勢に入る。

腕を曲げたまま頭をやや下げニドランに迫るイシツブテ。

片や体を反転させて足を向け、イシツブテ向かつて跳躍するニドラン。

2匹の間合いが一気に近づき、

「ニド!!」 「!!?」

結果は『たいあたり』をもらう前に『にどげり』が決まり、後方に吹き飛ぶイシツブテ。

『たいあたり』は不発に終わつたようだ。

「イシツブテ！ もういちど『たいあたり』だ！」

「少々もらつてもかまわない！ ニドラン！ 『にどげり』！」

技を決め着地し、態勢を整えているニドランに再びイシツブテが迫つてくる。  
先ほどと同じ態勢からの『たいあたり』。イシツブテの攻撃が決まり後方に飛ばされるニドラン。

それでも爪を地面に立てて踏ん張りブレーキを掛ける。  
そして指示通りすぐさまイシツブテに向かつて再び駆け出し、跳躍。

「ニド!!」 「!??」

「イシツブテ、戦闘不能！ ニドランの勝ち！」  
「戻れ、イシツブテ！」

審判のジャッジを聞きイシツブテをモンスター・ボールに戻すジムリーダー。

ニドランを優先的にレベルを上げた甲斐があった。

タイプが一致してないとはいっても、効果がバツグンの二度の格闘タイプは耐えれなかつたようだ。

予想通りの試合展開と自分の記憶に内心安堵する。

このジム戦、タイプの相性を考えればこちらの手持ちのポケモンでは分が悪い。

ニドランに格闘タイプの技を覚えさせてはいるがゴリ押しではニドランに勝ち目がない。

・・・というよりもニドランの『にどぎり』は相手によつて命中率がそこぶる悪かつたりする。

「命中率とか関係ないもんなんあ・・・」

つぶやくようにニドランの足に目をやつて愚痴てみる。

そうなるとこちらの取れるアドバンテージは自分の記憶。相手の手持ちのポケモンだ。

相手の手持ちがわからないのはここでは当然だ。いつもモンスター・ボールに入れているのだから。  
けれども俺には記憶がある。

もちろん全てが記憶通りというわけではないだろう。

むしろ相手が違うポケモンを出して来たら、作戦が台無しになり負けてしまう。  
あいまいな記憶を探つてるため不安要素が多い。

けれども作戦通りに行けば、確実とは言えないが高い勝率が見込める。  
脳内シミュレーションで何度も試行錯誤したのだから。

あと一体の相手の手持ちを倒せばこちらの勝ちだ。

こちらは『たいあたり』を一発もらつたニドラン。

ここまでは好調だ。

「岩タイプのポケモン相手に毒タイプのポケモンを出した時は

駆け出しのトレーナー」かと思つたが、ちゃんと対策はしてあるようだな』

「むしろこのためにこの子をゲットしてレベルを上げてましたからね』

「なるほど。新人トレーナーってわけじゃなさそうだな。なら、行け『イワーク』！」

ジムリーダーが繰り出したのは平均8・8m・重さ210キロの巨体を持つ『イワーク』。

最初のイシツブテで予想していたがやはりゲーム通りの手持ちのようだ。

・・・これなら作戦通りでいけるかもしない。

「それでは試合、始め!!」

「ニドラン！『なきごえ』！」

「イワーク！『いわおとし』！」

辺りに響く『なきごえ』がイワークの「こうげき」を下げる。

自身の変化を感じ取ったのか顔を歪めながら尻尾を振り上げるイワーク。次いでイワークの『いわおとし』が決まりダメージを受けるニドラン。・・・よく潰れなかつたな、お前。

「ニドラン、距離を取れ！『なきごえ』だ！」

「イワーク、接近して追いつめろ！『たいあたり』！」

・・・イワーク相手にゴリ押しさしない。出来ない。

ニドランの『にどぎり』はイワークにまず当たらないからだ。

「ニドラン！ 防御に徹しろ、『なきごえ』！」

「イワーク！ 接近して『いわおとし』！」

ひたすら『なきごえ』でイワークのこうげきを削ぎ落とす。

おかげで相手の巨体から放たれるこうげきは次々と当たるが、まだ闘えそうだ。

「アンタねえ！　さつきからなにやつて!?　・　・　・　うつぶ　・　・」

「・　・　・　カスミ、いきなり叫んですぐさまカミングアウトするのはどうかと思う。  
・　・　・　っていうかおとなしくしてろよ」

「うつぶ」　つて言うな。こつちは眞面目にバトルしてゐるのに脱力するわ。

「・　・　・　うるさい。・　・　・　アンタ、さつきから、なにやつてんのよ・　・　・」

「・　・　・　無理に声出そととするなよ。そこでいい子にして見てろつて」

「子供あつか!?　・　・　うう・　・　・　扱いするんじや・　・　・　ないわよ」

「だから！　無理して叫ぼうとするなよ！　変な空気になつて脱力するんだよ!!」

審判もジムリーダーもおかしくなり始めた空氣を呼んでバトルを一時停止してゐるし。  
申し訳なさで俺に精神的ダメージがボディーブローのようにじわじわと來てる。

「・　・　・　すいません、再開してもらえますか」

「・　・　・　まあ、君がいいなら」

「・　・　・　それでは試合、始め!!」

本日二度目のおかしくなつた空氣を無理やりシリアルアスにしてバトル再開。

カスミの言いたいこともわからなくはない。

岩タイプに効果がバツグンの『にどげり』を持つてゐるのに、なぜ使わないのかということだろう。

ニドランが『にどげり』を覚えるまでは俺もそうしようと思つたし、そのためにニドランをゲットしたのだが、・・・誤算があつた。

・・・それは「ニドラン」と「イワーク」の『体長』だ。



「……それで私に電話してきたわけ?」

『はい、ぜひともお願ひします!!』

「……正直、あまり気乗りしないわね』

珍しく慌てていた様子の友人からの電話に少々あきれていた。

電話を取つた直後に聞こえてきた焦燥感に満ちた声。

なにかあつたのか!? と本気で心配した数分前の自分を振り返り溜息をつく。

「……私、出歯龜って好きじゃないんだけど」

むしろ好きな人がいるのだろうか。

『そこをなんとか! ぜひとも今の中澤さん様子を覗き見してください!  
エスパーのナツメさんならば出来るはずです!』

言い繕う余裕もないのかはつきりと「覗き見」なんて言つてくる。  
犯罪行為だと理解しているのだろうか。

「・・・エリカ。 私、自分の能力をそういうことのために使つたことないんだけど」

疑う余地もなく犯罪行為だ。おそらくバレないだろうが進んでやるようなことじゃない。

数少ない友人のプライベートに興味がないわけじやないけれども、流石に覗き見はどうかと。

「・・・シゲルなら大丈夫でしょ。彼、まだトレーナーになつたばかりの10歳よ」

『いえ！ 電話越しで途中で途切れましたが、間違いなく「俺と同じ」と聞こえました！

今シゲルさんと共にされてる方は同い年なのでしょう！』

「・・・それに何か問題があるの？」

『大問題です!! 私のお店で働いている子が持つていた雑誌に書いてありました！

「自分と近い年の女性を恋愛対象に、自分よりも年下の女性を性欲対象に」と!!』

・・・ただの偏見だと思うんだけど。単に個人の好みの問題じゃないのだろうか。  
この友人、普段は楚々とした花も恥じらう乙女なのだが、  
たまにパニックになると普段からは考えられないようなアグレッシブなことを仕出  
かす。

こと「彼」のことになるとなおさらだ。

・・・というか乙女が大声で性欲とか言うな。

「・・・よくあるゴシップ誌のネタを鵜のみにするのもどうかと思うのだけれども。

はあ・・・、わかつたわ。今日はジム戦の予約が入ってるから、また今度ね」

『はい！ 急なお願いで申し訳ありませんがぜひともお願ひします!!

・・・あら、すいません。こちらもそろそろジムの挑戦者の方が来られるので、これ  
で』

「ええ、・・・そつちも頑張ってね。それじゃ」

『はい、ナツメさんも。それでは失礼します（ブツツ）』

ふう、会話を終え軽く溜息。

友人との会話は好きだが、内容がアレなだけに少し疲れたのかかもしれない。

『元引きこもり』エスパー少女の私からすればそれほど難易度の高い頼みではないけれど。

・・・やっぱり気乗りしないわね。

とりあえず今日の予定のジム戦を終わらせてからにしよう。

少し重い足取りで部屋を出て家の扉を開けてから、

おそらく居間とキッチンで仲睦ましく居るだろう一人に声を掛ける。

「・・・お父さん！　お母さん！　ジムに行つてくるわね！」

# ノーマルマサラ人 11話 + 登場人物紹介

ポケモンにも色々と個体差がある。色違いが最たる例だ。

ポケモン図鑑で表示されるのは、そのポケモンの平均の値だ。

ニドラン♀ たかさ（全長）0.4m（40cm）

イワーク たかさ（全長）8.8m（880cm）

ニドラン♀の足の長さ（爪含む）をおよそ15cmと推定。  
イワークの尻尾の長さ（全長の半分）をおよそ4.4mと推定。

ニドランの『にどぎり』を当てるには最低でも約15cm接近しなければならない。  
こちらから接近するにはイワークの約4.4mの尻尾をかわさなければならぬ。

・・・・・無理だ。



氣付いたのはニドランが『にどげり』を覚えた日。  
覚えたての技を見たくて野生のポッポを相手に『にどげり』を試した。

指示に従いポッポに向かつて駆け出すニドラン。

危険を察知したのか羽ばたかせ飛び上がるポッポ。

飛び上がったポッポを追うように跳躍するニドラン。

そして体を反転させ両足を曲げ相手に、ビシイツ！  
つと足を15cmほど伸ばし  
た。

ビシイツ！・・・・スカアツツツ!!

届くわけなかつた。

飛翔しているポツポに跳躍したとはいえ15cm以上接近出来た訳ではない。  
むしろ飛んでる相手に跳んで届くことなどまず無理だろう。

一部のジャンプ力があるポケモンは例外だろうが四足歩行で主に陸上を走り回る生  
活を

しているニドラン♀にそんなことは期待出来ない。

思い返せば「なにを当たり前のことを」と愚痴りたくなる。

常識的に考えればあれだけ距離があつて、ニドランの体長や足の長さなどを見れば、  
届かないのは一目瞭然だつた。

そしてポツポの『かぜおこし』で吹き飛ばされながらもなんとか俺の指示を果たそう  
と、

「届け、届け！」と必死の顔でつま先を伸ばし続けるニドランを見て罪悪感で一杯になつ  
た。

・・・あとちょっと癒された。



「つ・・・イワーク！『しめつける』攻撃！」

来たつ！ つと内心で歓喜した。これ待っていた。

3度目『なきごえ』をもらつたイワークの『こうげき』は元のステータスの5分の2にまで落ちている。

その『こうげき』の数値ではタイプ一致の『いわおとし』ですら大したダメージは与えられないだろう。

そしてニドランを倒しても俺にはまだ一体のポケモンが残っている。

相手からしてはこれ以上『なきごえ』をもらえば次のポケモンに勝てないと危惧するだろう。

たとえイワークにとつて有利な相性でもこれ以上『こうげき』を落とされれば…と。ならば相手の取る最良の手はこちらの動き、「なきごえ」使わせずに倒すこと。

イワークの『しめつける』で相手の行動を完全に封じることが最良だと考へるだろう。既にニドランにも十分ダメージが入っている、倒すの容易いはず。

イワークの尻尾がニドランに巻きつき拘束を掛ける。

俺の位置からでは既にニドランが見えなくなり、イワークがさらに圧力を掛け出す。後はニドランが戦闘不能になるまでこの拘束を続ければいいだろう。体格や体長から見てもニドランにイワークの拘束を解くほどの筋力はない。

(・・・・・つ)

イワークの『しめつける』が決まりニドランが拘束されてから

何秒経つたかわからないが、やけに時間が長く感じる。内心焦つている。それはジムリーダーも同じなのか、緊迫した沈黙がフイールドに。

ふと、観客席に座っているカスミに目がいった。

叫ぶと色々迷惑を掛けることを理解してか口を開けようとはしてないが、ニドランの行方が気になつてゐるのか真剣な目でこちらを様子を見ている。

俺のジム戦なのに自分の事のように心配をしてるみたいだ。

案外、感情移入しやすいというか、情に厚い子なのかも知れない。

そんなことを思いながら気分を落ち着けているとイワークに変化が起つた。  
徐々にだが拘束を緩め始めていた。

ニドランが戦闘不能になつたのか。

審判がジャッジを下そうと目を細め、状況を把握しようとしている。  
少しづつ拘束が緩んでいく、途中に、

イワークが苦悶の表情を浮かべていた。

「刺さった・・・!!」

そう確信出来た。



「ニドラン！『にどげり』!!」

「つ!?」

ここでニドランが戦闘不能になつてていると思ったのだろう。相手のジムリーダーは聞こえてきた俺の指示に驚いている。

俺の指示が聞こえ、緩んでいた拘束からじたばたと体を動かしイワークから抜け出す。

そして眼前にはイワークの体。自身の足の長さなど関係ない距離。

「ニド!!」

すかさず『にどげり』を決めた。

「どうしたイワーク!？」

効果がバツグンのダメージを受け後退したイワークに問いかけている。

そして、なぜ拘束を緩めたのか、と疑問を投げる前にイワークの様子気付く。

「・・・「どく」を受けたのか!?」

「よくやつた! 戻れ、ニドラン!」

特性「どくのトゲ」は体に接触すると確率で発動する、それがゲームの設定だ。だが、この現実においてそれは確率によって発動するのではなく、接触する「場所」による。

ニドランの体のどこかにある「どくのトゲ」の場所に相手が刺さると発動するのだ。

ならばニドランの全身を覆つた『しめつける』ならば確実に刺さる。

『なきごえ』を使い続ければ、「こうげき」が下がるのを嫌い『しめつける』を使うと踏んだのだ。

相手の戸惑いに答える必要はない。

かなりのダメージを受けているニドランをすかさずボールに戻す。

ここまで頑張つてくれたのだと、「ひんし」になるまで無理をさせることはない。あとは他の奴にまかせれば大丈夫だ。

「イーブイ！ 後はまかせた!!」

二番手に出すのはイーブイ。

『なき（）え』を受け続けたイワークとはいゝ、急所にもらえば「ヒトカゲ」では落ちてしまう。

ノーマルタイプのイーブイならば耐えてくれるだろう。加えて・・・、

「試合始め!!」

「イワーク！ 『しめつける』攻撃!!」

『すなかけ』だ!!

「つ!?」

ある程度距離があつても当てることが出来る『すなかけ』を持つている。

『しめつける』の攻撃は命中率85と低くはないが高くもない数値だ。

しかしピカチュウの『でんきショック』すらも自身の判断でかわすこいつならば命中率85は大した数値ではない。

そして『すなかけ』でさらに命中率を落とせば『しめつける』は脅威ではない。

「イーブイ！ 『すなかけ』を続けれろ！」

「イワーク！ 『いわおとし』！」

命中率の高い『いわおとし』を選択し、イワークが攻撃してくる。

『すなかけ』を行つた直後だつたイーブイに当たる。

・・・が、すぐに立て直して距離を取り待機する。俺の指示を待つ態勢だ。

もはや通常の攻撃では大したダメージを与えるられないほど「こうげき」は落ちている。そしてニドランから受けた「どく」がイワークを確実に追いつめる。

その後もイーブイの『すなかけ』とイワークの攻撃をかわすやりとりを繰り返し、やがて、

「イワーク、戦闘不能！ イーブイの勝ち！  
よつて、勝者！ チャレンジャー・シゲル!!」

俺の初めてのジム戦が終わつた。

◆◆◆登場人物紹介（ニビジム攻略後）◆◆◆

◆シゲル「主人公（笑）」

本ssの主人公。

姉による訓練というなの肉体改造によりネタになるくらいの身体能力を得た。

同時に数々のトラウマと欲しくもない身体能力（モンスター・ボール射殺事件）も得た。  
実はイワークの事を考えた時は時速80キロを思い出し胃が痛くなつたとか。

いまさらだがゲーム知識豊富・アニメ知識無し。

なぜカスミがハナダジムにいないのか疑問に思つてゐる。

またゲーム知識は豊富だが二次元と三次元の差にまだ慣れていない。

ポケモンバトルが特に顕著のため、ゲーム知識を生かしながら作戦を立てて挑んでいる。

(余談)

原作アニメでは「サトシ君」で有名な彼だがこのＳＳではそんなことは言わない。また最近じいちゃんがハマつてる俳句にもあんまり興味がない。

◆イーブイ

シゲルの最初のポケモンであり、何気に夢特性の個体。

「ひかえめ」な性格があんまり「ひかえて」ない。

食べる量が「ひかえめ」らしい。・・・どうでもいいわ。

無邪気に黒い所があり、今後もネタに出す予定。

(余談)

最近テレビで見た『はかいこうせん』にロマンを感じたらしい。

◆ヒトカゲ

シゲルが3体の内から選んだポケモン。

「おくびょう」な性格でその性格どおりの行動をとつたりしている。

シゲルにも最初は微妙な関係だつたが、何度かの爪の手入れなど結果「なつき度」が上がりシゲルの指示に忠実。

(余談)

ジム戦では活躍の機会が無かつたが実はトキワの森でのトレーナー戦では一番よく使用していた。『ひのこ』でみんな燃やした。

◆ニドラン♀

シゲルが初めてゲットしたポケモン。

「しんちよう」な性格。ヒトカゲ同様何度も手入れしているため「なつき度」は高い。毒タイプだが今のところ格闘タイプの『にどぎり』がメインウェポン。

ジム戦での一番の功労者。

(余談)

よく見ると片方のヒゲが少し短くなってる。

◆カスミ

ハナダジムの4姉妹の末っ子。

トキワの森の一件からシゲルと出会い、行動を共に。

実はその一件から1人で旅をするのが不安になつてゐる。

そのため出会つたシゲルに強引に付いていこうとしている。

今のところシゲルに対して恋愛感情はないが助けてくれたこともあります、気にはなつて  
いる。

同年代ということもあり遠慮はいらず、接しやすいらしい。

(余談)

「おてんば人魚」なのにこの前溺死しかけたとか言つちやいけない。

◆エリカ

タマムシジムのジムリーダー。

シゲルが幼少の頃からの友人（シゲル視点）。

本人はその頃から恋愛感情を持つていてとか。

シゲルと行動を共にしている女の子を非常に気にしている。

普段はおとなしい大和撫子的な感じだがパニツクになるとかなりアクティブティイ。

(余談)

店で働いている店員たちから色々な知識を学んでいる。（かなり歪んだ知識）

◆ナツメ

ヤマブキジムのジムリーダー。

シゲルとエリカとは良き友人の関係。

シゲルとは卵の発表の際にタマムシシティに赴く家族に同行し出会った。

その頃から超能力に没頭し引きこもりがちだつたが家族に無理矢理同行されたとか。

シゲルと出会い色々考えを改めたらしい。シゲルの紹介でエリカと友人に。現在の手持ちの「ユングラー」はその時シゲルからもらった「ケーシイ」。

(余談)

元引きこもりで親の脛をかじりまくつてたこともあります、

現在は「働かないと負けかな」と思つてゐるとか。

# ノーマルマサラ人 12話

「アンタってポケモンの手入れ以外に料理も出来たのね。けつこうおいしかったわよ」

「・・・それはどうも。というか、カバンの中が缶詰だらけって女の子としてどうよ」

「なによ、いいでしょ。料理は男の仕事なんだから」

「・・・流石にそれは偏見すぎる」

現在お昼過ぎ、ランチタイム後。

途中に作った昼飯を胃に収め、ハナダシティに向かつて足を進めている。

俺が昼飯作っている最中、自分の分も要求していた彼女と共に。

・・・一緒に旅をすると誘つた覚えもなければ、誘われた覚えもないんだけど。



今日の朝方のニビジム戦勝利後、ジムリーダーからバッジをもらい、ポケモンセンターで

手持ちのポケモンを回復させ次のジムのある「ハナダシティ」へ向かおうとしていた。

これ以上ニビシティに留まる理由もなく、あらかじめ必要な食糧や道具を

「フレンドリイショップ」で買っていたのですぐさま次の町へ出発する・・はずだつた。

『じゃあ、俺はこれからハナダシティに行くから。これで・・・』

『待ちなさいよ！ アタシまだ買い物してないんだから！』

『・・・？』

『ちょっと買い物するから待つて・・・ううん、やつぱり付いてきなさい』

『・・・なんで？』

『アタシはまだなのよ！ いいから付いてきなさい！』

『いや、だからなんで・・・つてこら！ 服引つ張るな！』

『い・い・か・ら！ 黙つて付いてくる!!』

その後、大量の缶詰を買い込み、カバンに押し込み、『さあ、行くわよ！』と、なぜかそのまま、ここまで同伴しながら旅をしていた。

「・・・まあ、別に嫌つてわけじやなんだけどさ・・・」

「なにか言つた？」

「前に『おてんば』人魚つて自称してたけど、

自覚しているなら直せばいいのにつて・・・・・ブツ!?

鮮やかな『メガトンパンチ』が決まつたとさ。



——ここまで来たのに今さら「何で付いてきたのか」と聞くのも引けるし。

——下手な事言つて不機嫌になられるのもめんどくさい事になりそうだし。

痛む頬をさすりながらそう自分を納得させ、

話題を変えるために前から聞きたかった疑問を投げてみた。

「カスミはハナダジムつてどんな所か知つてる?」



『カスミはハナダジムつてどんな所か知つてる?』

その言葉を耳にした時、グッと眉根が釣り上がるの自覚した。

聞いてきたコイツに悪気もなければ含むものもないと思う。

ジムに挑戦するのだから単に『どんな所』かを聞きたかつただけだろう。

・・・それでも、あまり聞きたくない話題だつた。

「・・・なんで私に聞くのよ」

声音は無意識に低くなつていた。

強張つた顔を見られたくないから、少しアイツから顔を背ける。

「え!? いや・・・えゝと、偶然腹だ s・・・ゴホン! カスミらしき女の子が『3番道路』から来たつて聞いてさ。もしかしたらハナダジムの事知つてるのかな」と

途中まで聞こえてきた単語に再び握りコブシを作つていたがなんとか踏み留まる。妙に言いづらそうに答えたアイツ。今度はアイツの方が顔見えないよう背けていた。

「・・・知つてるわよ。ハナダシティじゃ有名だもの・・・」

少し目を背けながら愚痴るようにつぶやいていた。

そんなつぶやきも近くにいたコイツには聞こえたのだろう。

興味深そうというか好奇心が刺激されたような、明るい表情をアタシに向けてくる。

「やつぱり知ってるのか。それでどんな所なんだ？　あとジムリーダーも気になつて  
る」

「・・・ジムリーダー。」

その単語を耳にして気分がさらに悪くなる。

コイツもハナダジムのジムリーダーがそんなに気になるのか・・・と。

「・・・アンタも気になつてるんだ。ハナダジムのジムリーダー」

「そりやそりやそうだろう、ジム戦を挑むんだ。相手の事は出来るだけ知つときたいさ」

「・・・本当にそれだけ」

「？　・・・それだけって、なにが？」

「・・・ジム戦のためだけに知りたいの？」

「他になにかあるのか？」

目を細めて疑いの眼差しを向けてみる。

瞳に映つたアイツはアタシが何を言わんとするかわかつてないようだ。

アタシの苦悩を知らないアイツの呆けた顔を見ると段々と腹が立ってきた。

「そう、それじや教えてあげる！」

ハナダジムのジムリーダーって凄い美人らしい女人よ！」

脳裏に浮かぶのは『美人三姉妹』とか『出涸らし』とか言つてくる姉さんたち。

いつもいつもいつもアタシを馬鹿にして面倒な事ばつか押しつけてくる。

おかげでアタシは、いつも貧乏くじ引かされて苦労していた。

そしてジムに来る男たちも、みんな姉さんばかりを見てる。

大抵の男はいつもそうだつた。

「へえ、ジムリーダーは女なんだ。やつぱり水タイプのポケモンがメインなのか？」

・

「・・・ そうね、ジムリーダーの美人三姉妹は水タイプのポケモンを使うわね・・・」

「つまり誰と当たるのかわからないくことか。そうなると相手の手持ちが定まらない

な」

「・・・それと美人三姉妹は大きなプールでジム戦をするわ・・・」

「ニビジムみたいにフィールドが変わつたりするつてこと？ それは面倒だな」

「・・・・・ジムリーダーの美人三姉妹は街の男の人からすごい人気があるのよ・・・」「そうか男の人に・・・・・それつてジム戦に何の関係があるんだ？」

——大抵の男はいつつもそうちだつた。

「・・・・・・・・・ねえ」

「なに？」

「ハナダジムの美人三姉妹なのよ？」

「さつきからそう聞いてるけど？」

「・・・興味ないの？」

「あるよ、相手の手持ちのポケモン。三姉妹つてことはそれぞれ手持ちが違うんだろ？」

——大抵の男はいつもそうだつた……はず。

「…………ねえ」

「なに?」

「……ポケモンに興味があるだけ?」

「さつきからその話をしてたんじやないのか?」

——なら、例外の男だつて居てもおかしくない……はず。

「……そつか興味ないんだ。美人三姉妹に」

「いや、だから興味はあるつて。……なに笑つてんの?」

「別に。アンタは『ポケモンバカ』なんだなあつて思つたのよ」

「……初めて聞いたよ、その名称……」

さつきと似たような呆けた顔をするアソシ。けどさつきみたいに腹は立つたりしない。

むしろ、おかしくなつてアソシの顔が少し緩んでくる。口元には笑みが浮かんでく

る。

「どうしたんだ？ さつきからこっち向いてニヤけて」

「べつに、なんでもないわよ！ ほら、歩いてないで走るわよ！」

あんまり遅かつたら野宿する羽目になるんだから。ポケモンセンターまでダッシュ  
よ！」

「日没まで十分余裕あるって。別に急がなくとも・・・コラ！ 服引つ張るなって！」

——やつぱり旅をするのは楽しい。

# ノーマルマサラ人 13話

所々に明かりが点いてあつた『オツキミ山』を半日掛けて抜ける。

暗がりに目が慣れていたため日差しを受けた目が少し痛む。

目を慣らすために両目を軽く揉んで瞬きを繰り返す。

そうすると視界に広がつたのは日に当たりいい具合に茂つていて草木。

そして遠くに目を向けると小さく見える町々。

「あそこがハナダシティか・・・」

この「4番道路」をまっすぐ行くと着くだろう。

らしくもなく逸る気持ちをそのまま行動に移す。

ここまで付いて来ている旅の同行者、カスミのスピードに合わせて走り出す。

（ハナダシティまでもうすぐだ!!）

「・・・ねえ、さつきアンタがゲットした『イシツブテ』なんだけど・・・」

「ほらカスミ、急ぐぞ！ ハナダシティまでもうすぐなんだからさ！」

「・・・アンタの投げたモンスターで両腕がもげた気がするんだけど・・・」

「H A H A H A そんなわけないじやないか！」

「きつと相当弱つてて、たまたまタイミングがジャストミートしただけだつて！」

「・・・アンタの全力で振りかぶったボールで片腕がもげたわよね・・・」

「H A H A H A そんなわけないじやないか！」

「モンスターでポケモンにダメージが与えられるわけじやあるまいし！」

「・・・ゲットに失敗したからつてもう一回投げて、残った片腕もいだわよね」

「H A H A H A そんなわけないじやないか！」

「顔面に当たると痛そうと思つて投げたら腕がもげたなんて思いもしなかつたさ！」

「・・・アンタ、今認めたわよね・・・」

「H A H A H A H A H A」

(ハナダシティのポケモンセンターまでもうすぐだ!!)



『4番道路』を駆け抜け、途中挑んできたトレーナーはガン無視。

ハナダシティに着くとすぐさまポケモンセンターへ駆けこみ、外に出すのが怖い『ばくだんいわ』・・・もとい『イシツブテ』と手持ちのポケモンを預けた。

・・・戻ってきたときには腕があるといいな。

「・・・とりあえず町を見て回るか」

「・・・そうね」

ツツコミを入れるのも無駄と悟ったのか、疲れた表情をしている。指摘するとさつきの話題が蒸し返されそうなので気付かぬふり。

「カスミはこの町詳しいんだろう。良かつたら案内してくれない?」

「・・・別に良いけど・・・。正直、案内出来る所って少ないわよ」「良いよ、それで。とりあえずジムの場所から案内してくれる?」

「アンタつてホントにジム戦のことしか頭に無いのね」

「別にいいだろう。元々ポケモンリーグに出るつもりで旅をしてるんだからさ」  
本当はポケモンリーグに出場するために旅に出たわけじゃないけど、

けれどもポケモントレーナーとして旅に出たからには目指してみたい。ゲームではそれほど難なくチャンピオンになれた。

けれどもこの世界で生きて、二次元ではなく三次元の世界でもなれる可能性があるならば挑んでみたい。ポケモンリーグに。

それに約束もある。

この世界での俺の友人兼ライバルのアイツと、お互い本気でバトルするのだと。別にポケモンリーグでバトルすることにこだわってるわけじゃないけれど・・・。どうせならお互いが盛り上がる場所でバトルしてみたいのだ。

そのために今はバッジを優先して旅をしている。

(・・・バッジといえば、エリカに連絡してなかつたな)

急いで連絡する必要もないだろうけど・・・。

ハナダシティを見て回つたら電話しとこう。

「ちよつと、なにボーツとしてるのよ。 着いたわよ」

「へ？ ・・・ ココ？」

「そうよ、そこにジムの看板があるでしょ」

カスミが指差した先を見るとジムの表記がされた看板が立っている。確かに『ハナダジム』と書かれているのだが、

「なんで『のぼり』とか『ポスター』とか『バルーン』があちこちにあるんだ？」

ポケモンバトルを行うジムにしては明らかに装飾過美的外観。

これじやジムというよりどこぞのステージ会場だ。

ニビジムはもつと簡素な外観をしていたはずだけど。

「そういえば、アンタ知らなかつたわね。ハナダジムつてこういつたショリーをするのよ」  
ほら、と再びカスミが指差したポスターに目を向けると、

『ハナダジム 美人三姉妹・水中ショリー 本日開幕！（ボロリはないよ♡）』

・・・無いのかよ。

いや、つつこむ所が違うけれどもさ。

「ハナダジムはこういつたショリーを定期的にやつてるのよ」

「・・・この前カスミが言つてた、男に人気があるつて意味がわかつたよ」

貼つてあるポスターには『大人のお姉さん』的な3人が水着姿で写っている。

顔も均整が取れていて、体のプロポーションを惜しげもなく晒している。

ポスターとはいえ、素人目で見てもえらく気合いが入った出来だ。

確かにここまで大々的に宣伝してあつたら男は食いついてくるだろう。

「……この水中ショーやつてる間つてジム戦出来たりする?」

「出来ないわよ。ジムリーダーが水中ショーに出演してるんだから」

「……だよな。終わるまでこの町に強制滞在か……」

ポスターに右端に記してあつた開催期間を見ると明後日の午前までやつてるようだ。  
午前と午後に1回ずつ行つてるようで明後日の午後からジム戦の受付が可能らしい。  
「まあ、俺の方も手持ちのポケモンのレベルを上げたいから急ぐ必要はないだけどさ。

けど実際問題、ジムでこんなことして良いのか?」

「……ポケモン監察官はなにも言つてこないみたいだから黙認してんじやない。

ほかのジムも勝手にいろいろアトラクションとか付けてるみたいだし……」

(ニビジムのあれもジムリーダーの趣味だつたのだろうか……)

「……とりあえず、場所はわかつたから他の所案内してくれる?」

「そうね。アタシもあんまりここに長居したくないし。それじゃ次は……ゲツ!?

年頃の女の子が出すような声じやない声を出して硬直。

虫。ポケモンでも出たのかとカスミの視線を追つてみれば……、

「あら、カスミじゃない。もう帰ってきたの?」

ポスターに載つてた顔と同じピンク色の髪をした『大人のおねえさん』がいた。

「どうしたの?『水ポケモンマスターになる!』って言つて家を飛び出したのに  
もう帰つてくるなんて。もしかして、寂しくなつて帰つてきたとか?」

「別にそんなんじやないわよ!! アタシは・・・えーと、コイツに頼まれたからよ!!」  
「え!? 僕!?

唐突な会話についていけず困惑する俺を余所に二人の会話はヒートアップしている。  
「そんなこと言つて、本当は寂しくなつたんでしょ。素直に言えばいいのに」

「違うわよ! 誰が寂しがるもんですか! アタシはコイツに頼まれただけよ!」

「嘘ばっかり。アンタ友達居いないじやない」

「いるわよ! アタシは水ポケモンと友達なんだから! ・・・ギャラドスは苦手だけど  
・・・人間はいなかよ。」

「とにかく! アタシは今コイツと旅をしてて、ここまで連れてきただけなんだから!」

・・・俺の記憶ではニビシティからここまで勝手についてきたのは君のほうなんだけど。

・・・いや、確かにこの町でハナダジムの案内は頼んだけどさ。

「・・・一緒に・・・旅?」

「そうよ!」

「・・・その・・・男の子・・・と?」

「そうよ!!」

先ほどまでヒートアップしていた会話が急に冷めていく。

見れば『大人のおねえさん』が目を見開いて『信じられない』といった顔をしている。

『驚愕』といった言葉がふさわしい表情だ。

「そんな・・・嘘・・・」

「嘘じやないわよ! アタシはここまでコイツと一緒に来たんだから!」

そんな様子に気づかず一人ヒートアップしているカスミ。

対する相手はさつきまでの勢いが無くカスミと俺を交互に顔を向けて確認しているようだ。

「そんな・・・カスミに・・・」  
「?・・・姉さん、どうしたのよ?」

・・・姉さん?

「カスミに・・・・・・男が出来てるなんて!?

「なつ!? 違うわよ!! コイツとアタシは別にそんなんじやないわよ!!」

「もしかして、あの人カスミの姉なの?」

「なんでアンタはリアクション薄いのよ!!!」

「理不尽!」

◆◆◆登場人物紹介&用語説明◆◆◆

### ◆イシツブテ

シゲルがオツキミ山でゲットしたポケモン。

「いじつぱり」な性格。モンスター・ボール射殺事件二四日の被害者。

前回の失敗を活かしてノーダメージの状態でモンスター・ボールを投げた。

結果、ダメージを与えて部位破壊に成功！ ···· そういうゲームじやない。

なんとかひん死寸前でゲット。最後は丸くなってしまったイシツブテを取り押さえ

て

上からボールをフリーフォールさせた。··· 傍から見ればヤバい人。

腕は戻る予定。

### ◆ポケモン監察官

アニメ特別編ニビジム・ハナダジムにて登場した人物。

主に印象に残っている外見はサングラスを着用し、コートを羽織ったジョーイさん。

ジムに置いてなんらかの不備があつた場合ジムリーダーの資質を確かめるためジムに赴きポケモンバトルを行つたり、監察官の名を出さずジムリーダー候補を見てふさわしいかどうか判断する様子。

ジョーイさんと言えばおつとりしたイメージだがこの監察官はれいせいな性格っぽい。

ニビジムに於いてのポケモンバトルではラティアスを使う鬼畜っぷり。どう見ても殺る気マンマンである。

# ノーマルマサラ人 14話

「それでそれで！ カスミとはどこまで行つたの！」

「もうアヤメ、そんなにがつたら駄目よ。それでどこまで進んだの？」

「サクラ姉さん、それ同じこと聞いてるわよ。ここはまず、二人の出会いから聞かなきや  
！」

・・・『女三人よれば姦しい』というが昔の人の名言は的を射ている。

矢次早に飛んでくる質問・・・というよりも野次馬。

大人のおねえさんに囮まれながらという状況はうれしいが、こうも露骨に野次馬根性  
丸出しだと呆れと疲れが先に出る。

対面に座っている道連れことカスミに目を向けるとあちらも同じことを思つている  
のだろう。疲れた表情をしている。

・・・どうしてこうなつた。

数分前、カスミから理不尽な言葉をもらつた後、目の前のお姉さんに強制連行。

なにか発言する間もなく「姉さん達に報告しなきやつ!!」と言いながらジムに連れ込まれ『休憩室』と書かれた部屋に。

中に入ると休憩でもしていたのだろう二人の女性が水着姿のままドリンクを飲んでいた。

俺に不審そうな目、カスミに驚きの目を向けてから俺達を連れてきたお姉さんに何事かと尋ね、

「私たちに弟が出来るのよ！ カスミに男が出来たわ!!」  
(・・・ナニヲイツテルノカワカラナイ)

そんな感想を抱かざるを得ない返答をしていた。



そして現在に至る。

「あたしたちつて姉妹しかいなから弟つて新鮮ねえ」

「そうよね、カスミよくやつたわ。顔も悪くないし」

「そうね、カスミにしてはよくやつたわ！ 一体どんな手でゲットしたの？」

「そんなんじやないわよ・・・」

ツツコミにも力が無く、しきりに溜息をついている。流石にちよつと同情。

「えくと、みなさんカスミのお姉さんで？」

話題を変えるため個人的に気になつてた所を聞いてみる。

「あら、カスミから聞いてなかつたの？ 私たちのこと？」

「・・・ええ、カスミに姉がいること自体知りませんでした」

「もう駄目じやないカスミ。ちゃんと家族のこと教えとかないと」

「私たちは『ハナダジム美人三姉妹』で有名なのよ」

「ちなみにそこにいる四女は出涸らしよ」

「誰が出涸らしよ!! 全然劣つてなんかないんだから!!」

(・・・ゴメン。変える話題間違えた)

「だいたいっ! そいつはジム戦をしに来ただけよ! アタシとはなんの関係も無いの！」

「あら、シゲル君ジム戦をしたいの?」

「・・・カスミの後半の叫びはスルーですか・・・。ええ、まあ今すぐってわけじや無

いんですけど水中ショーターが終わつたら挑戦しようかと」

「・・・ショーターが終わつたらすぐに挑戦するつもり?」

「ええ、そのつもりです」

「「「・・・・・・・」」

(・・・あれ?)

突然顔を見合させ渋い顔をしている3人。

なにかまずいことでもあつたのか、気まずそうにしている。

「なにか問題があるんですか?」

「・・・えくと、ごめんなさい。ショーターが終わつてすぐには無理なの」

「？・・・ ショーが終わつた後でもですか？」

「今回の水中ショーには私たちのポケモンも出しているの」

話しを詳しく聞くと、どうやら今回の水中ショー、今までと違つて自分たちの手持ちのポケモンも出演させているとか。

今まででは3人と数人のマネージャーで開催していたのだが、たまにはいつもと違つたことをしてみようと試したらいい。

不評ならば明日からはいつもどおり3人でショーをするつもりだつたが概ね好評。

ならば明後日までの間、このプログラムを続けようとマネージャーと決めたらしい。しかし、そうなると明後日のショーが終わるまでポケモンにはほとんど休み無し。

3人は慣れているがポケモンたちには慣れない仕事で疲労困憊になつてしまい、満足にポケモンバトルどころではない。

このシヨーが終わつたらしばらく休養させるつもりだつたとか。

「たぶん、バトル出来るのは今回シヨーに出ないこの子ぐらいね」

そういうつてモンスター・ボールから出したのは、

「・・・トサキント・・・だけ、ですか」

「ええ、この子だけなの。アズマオウにでも進化してくれればある程度戦えるんだけど」

そういうつて溜息をしながら床を跳ねて いたトサキントをボールに戻す。  
確かにトサキント1体だけでジム戦というのは・・・。

「では、ショードが終わってからどれくらい経てばジム戦が可能ですか」

「そうね・・・・・3日ぐらいかしらね」

「3日・・・ですか」

確かに急いでる訳じやないけれど・・・。

明後日のショードが終わるまでの日数を数えると5日間ここに滞在しなければならな  
い。

そこまでこの町に長居するつもりはなかつたんだけど。

「まあ、そちらも事情があるようですし・・・」

「それに問題はそれだけじゃないのよ」

「私たちのほうにも問題があるのよねえ」

「・・・そちらに問題があるんですか？」

「それが大アリ」

「ジムでショリーはしているのだけどジムリーダーはショリーよりもジム戦を優先しなきや  
いけない決まりがあるのよ」

「じやなきやジムリーダーの資格を剥奪されちゃうの」

「・・・なるほど」

納得出来る理由だ。確かにジムリーダーの本来の仕事、ジム戦を疎かにすれば問題ア  
リと見なされるだろう。

これまでジムでショリーをやってても『ポケモン監察官』が黙認しているのも頷ける。  
用はちゃんとジム戦をしていればジムで何をしようが構わないといった体裁なんだ  
ろう。

「ここ最近ジムに挑戦する人が居ないから連日でショリーをしようって話になつちやつて  
ね」

「それで今回のショリーは特別に3日間連続で行うこととしたんだけど・・・」

「中止しようにもチケットは完売して観客席はいっぱいの状況だから……」「まあ、中止なんて言つた日にはクレームの嵐でしようね……」

思つたよりもややこしい事態になつてゐるようだ。

ジム戦を優先しなければならないけれど、かといつてショーを中止するわけにもいかず。

「・・・挑戦者の俺が挑戦を取りやめたつてことで解決しません?」

「ううん、シゲル君がジムに挑戦するつてことを私たちに伝えた時点でジムリーダーの責務を果たさなきやいけないのよね。一応」

「どこにポケモン監察官の目があるかわからないしね」

「まあ、さつきショーが終わつてからつてシゲル君が言つてたからそれまでは向こうは口を出さないでしようけど・・・」

「ショーが終わつてるのに挑戦を受けてないつてバレると問題になるつてことですか」

ニビジムの時と違つてジム戦をする前にジムに入つてしまつたのが思わぬ弊害を起  
こしてしまつた。

こんな展開になるとは思いもしなかった。

「まあ、こんなことになつてしまつたんなら解決策は一つね！」

「なにが妙案が？」

「ええ、パウワウ！」

サクラさんが手を鳴らして呼びかけるとドアが開き入つてくるパウワウ。  
何気に賢いな……その手でどうやつてドアを開けたが気になるが。

「パウワウ、お願ひ」

「パウワウッ・・・んべえ〜〜」

・・・どこにバッジをしまつてやがる。

「はい、これブルーバッジ。受け取つて」

「・・・これが妙案ですか？」

「ええ、別にバッジを渡す条件はポケモンバトルだけじやないもの」

「・・・そうなんですか」

「そうよ、用はジムリーダーから認められればいいんだから！」

「俺は認められるようなことはなにもしてませんよ」

「大丈夫！ 私たちはあなたを弟と認めるわ！」

(・・・・・会話は成り立つてたけど噛み合つてない)

「・・・まあ、くれるつて言うならもらいますけど、良いんですか？」

「ええ、監察官にはジムリーダーが認めたつてことで言い訳出来るし、シゲル君もバッジが手に入るし、良い事尽くしでしょ」

「・・・はあ、それで良いつて事なら遠慮なく」

「ちょ―――――つと待つた―――――！」

「何よカスミ、居たの。てつきり空気になつてたのかと思つたじやない」

「そうね、さつきから一言もしやべらなかつたから空氣かと思つたわ」

「誰が空氣よ!! それとサクラ姉さん!! ジム戦もせずにバッジを渡すのはハナダジムの沾券に関わるわ!!」

立ち上がり、息を荒げながら詰め寄つてくる四女。

ジムバッジと俺の間に割り込み指を差してくる。

「シゲル！ 姉さんの代わりにアタシがジム戦をするわ！ ジムバッジが欲しいならアタシとポケモンバトルよ！」



『・・・それで、ナツメさん。調査の方は・・・』

「・・・エリカ、怖いわよ」

本気と書いてガチと言えそうなくらい真剣な表情で写っている友人。  
口元を横一文字に引き締め、目も瞑んでもるように見える。

いつもの赤い色を頭に巻いていたものが今は『必勝』の鉢巻きに変わっている。  
まるでこれから戦いに赴かんとしているようだ。

「……まあ、報告からするわね。件の女の子は今もシゲルと一緒に旅をしているようね」  
『……そうですか』

おそらく想定範囲内の答えだつたのだろう。

取り乱す様子もなく、静かに受け入れている。

「……私が最後に覗……コホン、観察したのはオツキミ山前のポケモンセンターから  
出たとこまでね」

『その間、お二人の様子に変わった所は?』

「……これといつてないわ。特に邪推するようなことは起きなかつたし』

私はシゲルと女の子の二人がポケモンセンターに入り、次の日にオツキミ山へ入つて  
いたところまでを観察していた。

無論、二人が食事をしている間や就寝に入つた時は私もそれに合わせて観察を中断し  
ていたが。

二人の様子は喧嘩するほど仲が良いといつた感じだ。

私の力は見る事は出来るけれど聞くことは出来ないのでが険悪な雰囲気にならず会

話も弾んでいるようだつた。

邪推するようなことはなく、仲の良い友人という関係だつた。

その事をエリカに伝え、落ち着くように言い聞かせる。

段々と強張ったエリカの顔も柔らかくなり始め、電話越しで安堵した雰囲気が伝わつてくる。

『そうですか。シゲルさんに仲の良い友人が出来たのですね』

「・・・ええ、ポケモンセンターで一緒に食事している時も会話が弾んでいたようだし」

『それならば、タマムシシティに赴かれた時に三人一緒に食事をしながらお話しでもしましようか。とても楽しそうです』

「・・・そうね、それがいいわ。友達が増えることは良いことよ」

穏やかな友人との会話と雰囲気。

和んだ空気は心を弾ませ、会話は続いていく。

『それではお食事の後はそのまま就寝されたのですね。ナツメさんもありがとうござい

ます』

「・・・別にいいわよ。私も友人のプライベートを見るのは・・・まあおもしろかつたから」

褒められた行為をしたわけじゃないけれど、それは事実だ。

二人の様子を見ながらこちらも微笑ましい気分になり和んだりもしていた。

「・・・とりあえず二人が揃つて就寝したから私もその日は寝たわね」

『そうですか。お疲れ様で・・・二人、揃つて?』

「?・・・ええ、二人揃つて寝たわ」

再び強張り出す友人の顔。

いや、先ほどと違つて焦燥間も醸し出している。

『・・・ナツメさん。揃つて、ということは・・・お二人は、共に・・・寝られたのですか?・・・ええ、そうよ』

いまいち要領を得ない質問に答える。

「……と、いきなり目を見開き、口を抑えて、驚愕の表情を浮かべる。

次いで顔を真っ青にし、目尻からは涙が滲み出している。

「！……どうしたのエリカ!?」

『……そんな・・・そんな・・・そんな、ことって・・・』

私の声が届く様子が無く、体を震わし涙の量が増えていく友人にどうすればいいかわからず、オロオロと動搖してしまう。

私はそんなにもまずいことを言つてしまつたのか・・・。

「・・・エリカ、落ち着いて。一体どうしたの?」

「そんな・・・一人は、既に・・・既に・・・」

目の焦点が合つてない・・・。

画面に映る友人の瞳は涙に濡れながら、自身の体と同じ様に震えている。  
こんなにも絶望している友人を初めて目にした。

「・・・エリカ、エリカ、落ち着いて。何があったの」

尋常ではない友人に何度も問い合わせる。

こういうとき自分の対人能力の無さが悔やまれる。  
気の利いた言葉を探せども思い浮かばない。

『・・・二人は・・・既に・・・つ!』

「・・・エリカ・・・」

『二人は・・・既に・・・・・・同衾をなされた関係なんて!!!』

(・・・・・・・・・・・)

「・・・・・単に一緒に部屋で寝てただけよ」

10歳の少年少女相手に何を考えているのだろうか・・・。

(・・・・・疲れた)

重い重い溜息をついた。

## ノーマルマサラ人 15話

あのどたばたから2日目のお昼過ぎ。  
——まあ、戦えるポケモンを持っているのはカスミぐらいだし、いいんじやないかし  
ら。

ということこで、結局ジム戦はカスミと行うことになった。  
ジム戦までの間レベル上げに集中したい俺と、姉の半強制的手伝いに駆り出された力  
スミとで別れた。

この2日間はお互い顔を合せることはなかつた。

腰のホルダーのモンスター・ボールを確認する。

正直、不安で一杯だつたイシツブテもすつかり腕は治り、今では立派な戦力だ。

流石ポケモンセンター、流石ジョーイさん。

笑顔で「お預かりしたポケモンはみんな元気になりました」とモンスター・ボールを差  
し出す様に痺れて憧れた。

となりに立っていたラツキーのタマゴ袋に差し込まれてた『木工用ボン』とまで見えた黄色いものは見なかつた事にした。

・・・治つていたのだから何の文句も言えやしない。

「さて、行くかイーブイ」  
「ブイ！」

既に昼食は済ませた。

イーブイを肩に乗せてポケモンセンターを出る。

今回はイーブイをわざわざモンスター・ボールに入れることはしない。

既に水中シヨーは終わっているだろう。

ハナダジムに向けて歩き出す。



「・・・よく来たわね、待つてたわ・・・」

「なんか・・・ちょっと見ない間にやつれたな、カスミ」

「・・・ブイブイ?」

「・・・色々あつて、疲れてるのよ・・・」

そこまで姉の手伝いは酷かつたのか、疲れた顔のカスミが出迎えに来ていた。  
後ろにはその姉達が爽やかな顔で手を振っている。

疲れというよりもストレスが解消されたみたいに爽やか顔。

3人からいじられまくったようだ。

「・・・とりあえずシゲル、手加減しないからね。・・・覚悟しなさい」

「そんな疲れた顔で言われても・・・」

「・・・うるさい、とにかくジムに入りなさい」

ジムに入ると既に用意は万全なのか審判も立っていた。

指定された場所に立ち、対面にはカスミが立つ。

両手で顔を叩き気持ちを引き締めようとしている。

改めて視線を向けるとさつきまでの疲れた顔はなくなり、真剣な表情を作っていた。

「それじゃ改めて、シゲル！ 手加減なしの本気でバトルよ！ いいわね!!」

「わかってるよ、バッジが掛かってるんだから手加減なんかしないさ」「

『ブイ！』

肩に乗つてるイーブイも高揚してきた場に感化されたのかご機嫌だ。  
二人の間に静かな緊迫感が醸し出してきた。

『がんばつてね～二人とも～』

『パウワウ、あなたもこっちに来て観戦しなさい』

『パウワウ～』

『カスミ～、変な顔してないでさつさと始めなさい』

『パウワウ～』

「・・・・・つ！ ・・・・・つ～!!」

(・・・・・すげえ奥歯噛みしめてる)

空気をぶち壊して、さりげなく馬鹿にされたジムリーダー代理。青筋を浮かべながら怒鳴りたい気持ちを必死に抑えている。

視線もきつくなり睨んだような顔になつてゐる。

・・・こつち見んな、怖いわ。

「・・・カスミ、始めるか」

「ええ、始めるわよ！ 審判！ 早く始めて!!

「はつ、はい!!」

「・・・やつあたりするなつて」

「うるさい!!」

オドオドしている審判がコホンっと咳をし、気持ちを切り替える。

「え、えーと。それでは、使用ポケモンは2体！ ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます！ 先に2体のポケモンが戦闘不能になつた方が負けとなります！」

「勝負よシゲル！ 行きなさい『ヒトデマン』!!」

「・・・頼むぞ『ニドリーナ』!!」

「そ、それでは試合開始!!」



「ヒトデマン、『たいあたり』！」

「ニドリーナ、迎え討て！　『にどげり』！」

カスミの指示に従い縦方向に回転しながら接近するヒトデマンをニドリーナが待ち構える。

「ヘアツッ！」

（あの鳴き声が気になつてしまふがいい……）

「ニドツッ！」

ヒトデマンの『たいあたり』が決まる前にニドリーナが体の向きを反転し、ヒトデマンに『にどげり』が決まる。

ニドリーナに進化し体長も0・8メートル近く成長し、それに伴い足の長さも成長したため『にどげり』の攻撃範囲も伸びた。

一撃目・左足でヒトデマンに当て回転を止め、二撃目・右足で無防備になつた胴体（力

ラータイマー?）を蹴り飛ばす。

鮮やかに決まる『にどげり』にこれまでの使用率が伺える。

「へアツ!?

(・・・3分経つたら勝てるのかな)

「だつたら、ヒトデマン! 『みずでっぽう』!!」

「ニドリーナ! 『どくばり』で応戦しろ!」

「ヒトデマン、潜つて回避!!」

「なにつ!?

ヒトデマンが『みずでっぽう』を放つと同時に『どくばり』を飛ばすニドリーナ。

しかし被弾したのはニドリーナのみ。

ヒトデマンはカスミの指示通りプールに潜り回避をする。

「どう! 水辺があれば水ポケモンは強いんだから! ヒトデマン『水中たいあたり』

!」

「なにその技!?

カスミの指示を聞き水中から飛び出し『たいあたり』。

これを回避するニドリーナ、がすぐさま再びプールに潜り『たいあたり』の攻撃を二ドリーナに仕掛ける。

これを回避できずダメージを受ける。

(・・・・・面倒な)

ニドリーナが体勢を整えた時には再びプールに潜つたヒトデマンを見て毒づく。シゲルの誤算はこのジムのフィールドだつた。

本来、単純な攻撃技の応酬、殴り合いではニドリーナの方に分がある。

二匹の種族値（ステータス）を比べるとＨＰが低いヒトデマンは殴り合いに向かず、種族値だけを見ればまずニドリーナが負けることはない。

だがこのフィールドが問題であつた。

現在ポケモンバトルを行つてる場所は大きなプール。

そして所々にビーチマットのようなものが浮いてあり、そこにニドリーナが居座つている。

しかし、所々にしか浮いておらず、当然足場も不安定である。

この状況で陸上を主に生活しているポケモンは当然不利であり、逆に水ポケモンにとっては絶好の環境である。

もし泳げないニドリーナがプールに落ちてしまえばヒトデマンの格好の餌食。モンスターボールに戻さざるを得ない。

けれども、それで二体目のポケモンを晒すことになるのはおもしろくない。

(こ)まで露骨に水ポケモンが有利なフィールドとは思わなかつたな・・・)

ニビジムの岩のフィールドではさしてこちらが不利になることはなかつた。

だが、このハナダジムは有利不利がはつきりと分かれるフィールドだ。

水タイプのポケモンや飛行出来るポケモンを持つていらないシゲルにとつては当然不利だ。

有一影響を受けないのはバトル時に浮遊しているイシツブテぐらいなものだ。

「いいわよヒトデマン！ その調子！ もう一度『水中たいあたり』!!」「ヘアツ!!」

「クソッ！ メンドクサイ技しやがつて！ ニドリーナ、『なきこえ』!!」

「二ド～ー。」

『なきびこえ』でヒトデマンの『こうげき』が下がる。

ヒトデマンの『水中たいあたり』がニドリーナにヒット、が元々「こうげき」があまり高くなかった上、こうげきを下がった状態では大してダメージにはならず。

『水中たいあたり』が思つたほどダメージが無かつたのか先ほどよりも体勢を早く立て直す。

「ニドリーナ、『にどげり』!! 一撃目は蹴り上げろ!」

指示を聞き、一撃目を胴体（カラータイマー?）に当て、二撃目で両足? の股間の部分を蹴り上げる。

「デュワツ??」

・・・急所に当たつたようだ。

「ああつ!? ヒトデマンが苦悶の表情を浮かべてる!!」

(いや、確かに痛そうな所に蹴りが入つたけどさ・・・表情がわかるの?)

「ヒトデマン、『みずでっぽう』よ！」

「ニドリーナ、『どくばり』を飛ばせ！」

再び交わされた「わざ」。

ニドリーナに『みずでっぽう』がヒットする、が先程と違い宙に浮いているヒトデマンにかわす手段はなく『どくばり』がヒットする。

そしてヒトデマンの胴体が点滅を始めた。

「！ ニドリーナ、もう一度『どくばり』だ！ 相手は弱っている！」

「ヒトデマン、こつちも『みずでっぽう』!!」

三度目の遠距離攻撃の応酬。同時にダメージを受ける二体のポケモン。宙に浮いていたヒトデマンがブールに着水し、水しぶきを上げる。

着水したヒトデマンの様子が確認出来ない。

マットの上で荒く呼吸を繰り返すニドリーナ、こちらは相当弱っている。

「・・・・・」

カスミとシゲルの二人がプールに着水したヒトデマンを確認しようと目を見張る。イーブイや審判、観客席で傍観している三姉妹も固唾を飲んで様子を見ている。やがて、ゆっくりとプールから姿が浮かび、現れる。

姿を現したヒトデマンの状態、何の動きも見られずプールに浮かんでいた。胴体の中心部の色は・・・・・鈍く黒ずんでいる。

「・・・ヒトデマン、戦闘不能!! ニドリーナの勝ち!!」

「よくやつたニドリーナ!!」

「ブイブイ!!」

「つ・・・・・お疲れ様、ヒトデマン。ゆっくり休んで」

くやしがりながらも奮闘したヒトデマンをボールに戻し労いの声を掛ける。モンスター・ボールを小さくして、次のモンスター・ボールを手に取る。

「・・・流石にやるわね、シゲル」

「(ほとんど力押しだったんだけど)・・・珍しいな、俺を素直に褒めるなんて」「別に。ただニビジムの時もだけど、アンタつてヒヤヒヤさせるような戦い方の割に

ちゃんと考えてバトルしてるって思つただけよ』

「まあ、一応作戦立てて挑んでるからな（このプールのせいで大苦戦だつたけど）『けど、アタシだつてハナダジムの四女なんだから負けるつもりはないわよ！ 行くのよ！ 『スターミー』!!』

「・・・スターミーか」

次にカスミが繰り出したのはヒトデマンの進化形。

当然、一体目のヒトデマンよりも種族値が高い。

ヒトデマンであれほど苦戦したのだ、スターミーはなおさらやつかいだ。

——ダメージが大きいニドリーナはすぐに倒せる——

——次に出してくるポケモンは水タイプに弱くない——ブイ——

——けれども、このフィールドでは『すなかけ』は使えない——

——勝てる！——

(・・・なんて考えてそうなんだな、あの顔)

自身満々、俺の肩に乗っているイーブイを見ながら不敵な笑みを浮かべている。

「ブイ?」

「……なんでもないさ。むしろ予定通りだ」

イーブイを出しつぱなしにしていたのは布石だ。

ニビジムの時にイーブイをボールに戻したのをカスミは見ていて。だが、このハナダジムに来たときからイーブイは外に出していた。

そして、このジム戦の最中もずっとイーブイは俺の肩に乗っている。カスミの頭には「イーブイ」がいるという固定概念が出来たはずだ。

もしかしたらカスミはジム戦をする前からイーブイは出る、と決めつけていたかもしない。

カスミはこちらの手持ちのポケモン知っている。

水タイプに不利な他の2匹は除外して、シゲルはニドリーナとイーブイを出してくると。

そう確信していたかもしない。

けれども、作戦通りだ。

——このジム戦、『俺』の勝ちだ——

「よくやつた！ 戻れ、ニドリーナ！」

荒い息をついていたニドリーナを戻す。

このフィールドのせいで苦戦してしまったが十分役目を果たしてくれた。  
あとは『こいつ』にまかせれば、勝てる。

「派手に頼むぞ!! 出番だ、『イシツブテ』!!」

「・・・・・・・・はあつ!?」



アイツの言つたセリフは幻聴なのだろうか、と思わず耳を疑つた。

しかし、アイツの投げたモンスターボールから出てきたのは紛れもなくイシツブテ。

(・・・・・あ、腕治つてる)

それは置いといて・・・。

現在、フィールドでアタシのスターミーと対峙しているのは紛れもなくイシツブテ。アイツの手持ちに居るのは当然知っているけれども。

「・・・どういうつもりよ?」

「なにが?」

「よりによつて水タイプが苦手なイシツブテを出したことよ。・・・まさか、試合放棄するんじゃないでしょうか」

(・・・本気で試合放棄するつもり?)

観客席にいる姉さん達も不思議そうな顔で見合わせている。

おそらく審判も内心、不思議に思つてているのだろう。

イシツブテを出すぐらいうならアイツの肩に乗つてているイーブイを出す方がまだ納得

出来る。

この場にいるアイツを除く誰もがそう思うはずだ。  
(なのに、なんで……?)

「それこそ『まさか』さ。試合放棄をするつもりはないよ。……むしろ、このジム戦、俺の勝ちだ」

「…………なんですって」

不敵な笑みを浮かべながら聞き捨てならないセリフをのたまう。

「……随分余裕ね。アンタ、イシツブテは水タイプに弱いって知らないの?」「当然知ってる。けど、さつきも言つたように俺の勝ちだ」

表情を崩さず、余裕の態度でアタシを見ている。

なぜこうも自身満々なのか。

けれどもアイツがあんな風な顔をするのも初めて見た。  
ニビジムの時もあんな顔をしてはいなかつた。

・・・よほどの自信が伺える。

「俺にとつての最大の難関はカスミの一体目のポケモンだつたからな」

「・・・スターミーはヒトデマンに劣つたりしないわよ」

「ああ、知つてる。けど正直、カスミの二体目のポケモンはどうでもよかつた。まあ、とんでも無く硬い奴だつたらヤバかつたんだが」

「・・・どういうことよ？」

「俺にとつて今回のジム戦の勝利条件は、ニドリーナが一体目のポケモンを倒す、かつ『ひんし』になつてないことだ。結論を言えば勝ち残ればどうなつても良い」

「それだけで、アタシに勝てるつてこと？」

「ああ、そしてニドリーナは戦闘可能状態のまま既にモンスター ボールに戻した」

だから勝ちだ、とアイツは言つている。ますます意味がわからない。

アタシのスターミーは体調も万全、当然ダメージも受けていない。

アタシに負ける要素は見当たらないはずだ。

「・・・両者よろしいですか？」

「俺はいつでもOKですよ」

「・・・アタシも良いわよ」

「それでは、試合開始!!」

「スターミー、『みずでっぽう』!!」

(うだうだ考えてもしようがない!)

先手必勝、審判の宣言するとすぐに攻撃の指示を出す。

アイツがどんな隠し玉を持つていてもアタシは全力で戦うのみだ。

何より悩んで行動しないなんてアタシらしくない。

アタシの指示を聞き、イシツブテに向かって『みずでっぽう』を放つ。

「いわ」と「じめん」タイプのイシツブテには効果がバツグンだ。

見た目の小ささの割に重く、「すばやさ」も低いイシツブテは俊敏には動けない。

スターミーの『みずでっぽう』を避ける間もなく被弾するイシツブテ。

腕を交差して必死に耐えているが、すぐに決着は着きそうだ。

・・・やはり、アタシに負ける要素は見当たらない。

(なにを考えているの……)

さつきまでの自信満々だったアイツの態度が気になつてしょうがない。  
対面に立つているはずのアイツの顔をにらみつける。

・・・・・・・・・・・・  
が、

「つて!? どこ行つてんのよアンタ!?

対面に立つていたはずだつたアイツが、・・・居なかつた。

見えるのは背を向けジムの出入り口まで全力疾走しながら全力失踪しょうとしている  
るアイツの後ろ姿。

肩に乗つてゐるイーブイが必死にしがみついてゐる。

「アンタッ!! 本氣で試合放棄する気だつた訳!?

ハナダジム全体に届くようなアタシの大声にもアイツは無視して走っている。答える余裕も無いといった感じだが、そんなことはどうだつていい。

「ちょっと！ なんか『イシツブテツ！ 「じばく」 よろしくっ!!』…………え？」

(・・・今、アイツはなんて言つた？)

そんな感想が頭に浮かんだ時には既に体が赤くなり始めたイシツブテ。

先ほどの『みずでっぽう』を喰らつた時のような苦悶の表情を浮かべている。そして、これまで見ていた姉さんや審判が慌ただしく動き出す。

——さつきまでの一番近い観客席から一番遠い観客席まで距離を取る姉さんたち。

——仕事を放棄して背を向けて走り出す審判。

——ジムの出入り口まで走り抜き、額の汗をさわやかに拭つている憎いアンチクショ

ウ。

——「ブイツ！」と鳴きながら右前足で敬礼しているイーブイ。

それらが視界に入り、ジム内に光が照らされた。

真っ赤になつたイシツブテから光と衝撃が發せられる。

真っ先に、対峙していたスターミーが壁まで吹き飛ばされる。

爆風によつて荒れ狂うプール。

それから導き出される効果は、津波。

アトラクションを行えるほどの大好きなプールから津波が起こり襲いかかる。アタシに。

『ざつぱん』



「・・・・・イ、イシツブテ、スタミー、共に戦闘不能・・・。  
よつて勝者、チャレンジャー・シゲル・・・」

『ヨシツ！』

『ブイツ！』

(・・・ヨシツ！ じゃねえ・・・)

水死体と化したカスミを除く全員が心を一つにした。

# ノーマルマサラ人 16話

「おうい、もしもし。カスミさんや。いい加減機嫌を直しておくれ！」

「…………」

「いや、確かに『じばく』はジム戦の前から考えてたけどさ」

「…………」

「ジム戦があんな津波が起きそうなフィールドなんて知らなかつたんだよ。いや、ほんとに」

「…………」

「まあ、確かに。あの時の水死体のような状態は打ち揚げられて死に掛けのトサキン  
トっぽくて、ちよつと笑つたけどさ」

『カスミのにらみつける！』

『シゲルのぼうぎよがさがつた』

『カスミのにらみつける！』

『シゲルのぼうぎよがさがつた』

「何か言うことは？」

「すいませんでした。だからその右手のメガトンパンチは勘弁してください」  
一撃で目の前がまづくらになりそうです。



「ところで、ここってどの辺なの？」

「さあ？ ハナダシティとクチバシティの間のどつかじやないのか？」

なんとか怒りを鎮めた自称おてんば人魚と一緒にどつかの道を歩いている。迷子である。

というのも、辺りの風景はどこを見ても真っ白の霧。

二人はこの霧のお陰で現在、道なき道を歩く迷子であつた。

「アンタがちゃんと地図を見てないからこうなるのよ」

「ここで残念なお知らせだ。実はこの地図、カスミのお姉さんからもらつたものなんだ  
が、日付を見ると俺たちが生まれるより前に作られたものだった」

「……つまり」

「道が改装されて変わつてもおかしくないってことだ。霧が出て道がわかりづらかつ  
たからこの地図に頼つたんだが……その結果がこれだよ」

「くつ……姉さんっ！」

「ブイブイ」

こんな会話をしながら霧の深い道を歩いているところから、二人と一匹はまだまだ精  
神的に余裕のようだつた。

「ま、方角は合つてるからいつかクチバシティに着くさ」

「…そうかもしけないけど」

「どううか、こんだけ歩いているのに野生のポケモンが出ないことが気になつてゐるんだ  
けど」

「そういえばそうね。近くに町もないのに。……アンタ、この前みたいなショッキング

「なゲットはやめてよね」

「……そればかりはどうしようも出来ない」

「……なんでよ。なんであんなモンスター・ボールを剛速球で投げるのよ…」

「長年の癖でつい……。いや、大丈夫だ！ ハナダシティで実家に連絡入れた時アドバイスをもらつたから、今度こそ問題ないはず！」

「……今度こそつて。アンタ、前のイシツブテ以外にもこんなことあつたの？」

「ノーコメント」

「それもう答え言つてるから」

「ブイブイ」

「…大丈夫だこんどこそは……ん？」

「どうしたの、立ち止まつて？」

「いや、……明かりが」

そんな会話のキヤツチポールを続けていると霧の中にぼんやりと明かりがあつた。  
それも一つではなく複数の明かりであつた。  
カスミも視認したのか不思議そうに視線を向けている。

「ほんとだ……なにかしら、あれ？」

「複数あるし、なんか動いてね」

「……もしかしておばけ!?」

「ブイヽヽヽブイヽヽヽ」

「こんな昼間からか？　出るなら人魂かも知れないけど。……あとイーブイ、うらめしや～つて言いたいのか？」

「人魂だろうがおばけだろうが一緒よ！」

「待てよ、案外ゴーストタイプのポケモンかも知れないな。俺ちよつと見てくるわ」「つて、待つてよ!?　1人にしないでよ!?」

二人と一匹が明かりへ近づいていく。

明かりはそれほど大きくなく、ゆらゆらと揺れている。

近づくと少しづつはつきりと見えてくるのは、ロウソク。

火を灯したロウソクをそれぞれ持っている数人の人影が見えてくる。

おばけじやなかつた、と安堵しているカスミを見ながらさらに近付くと、そこには

……、

『さあ、これはなんだ』

『……えっと、ズバット…ですか？』

『霧が深いからといってコウモリポケモンとは限らないぞ』

『……あ、それポッポです！』

『そのとおり。けど、わかつて当然。僕たちはその得意技を聞いているんだよ』

『ポッポの得意技は【かぜおこし】、レベル5で【すなかけ】、レベル・・・』

『なのは常識だ。ポッポはどのくらいのレベルで進化する？ そしてその進化形の名前は？』

『……』

『ほら、早く答えないとさらに早く走らないといけなくなるぜ』

『……つ』

「…………」

「……ブイ」

「お、あんなところに公衆電話が。ちょっと用が出来たから電話してくるわ。イーブイ、お前はボールに戻れ」

「ブイ！」

「あ、アタシも」

この世界は旅をするトレーナーが多いためか公衆電話は割とどこにでもある。しかもお金を払わずに使えるというなんともすばらしい公衆電話だ。

カスミとイーブイと共に公衆電話の前に立ち、受話器を取る。

「カスミが先に電話する？」

「アンタが先で良いわよ。どうせ同じ所でしょ」

「そもそもうだな」

受話器を耳に当てダイヤルをプツシュー。

『1』・『1』・『0』と……。

「あつ、ジ Yun サーさんですか。すいません、こちらに怪しい宗教団体が…」



「え、愛の鞭？ 野外でトレーニングマシンで走ることが？」

「はい。いつもしていますから」

「なんで野外で……。トレーニングマシンって屋内で使用する物だぞ」

「それも愛の鞭なんです」

「…ゴメン、意味がわからない」

電話でジ Yun サーさんをコール、すぐさま現場へ到着された。

流石にただならぬ雰囲気を感じ、全員そのまま逮捕…というわけではなく事情を聴き  
厳重注意のお叱りを受けた団体様方。

聞くところによるとポケモンゼミの生徒だつたらしく、団体の方もなにか問題を起こ

して成績を落としたくないらしく、すぐさまゼミに帰っていた。

残つたのは野外でトレーニングマシンの上で走らされていた、『ジュン』という生徒。

「……ジュンサーさん呼んで正解だつたな。俺じゃあの状況を愛の鞭で済ませそうにない」

あの団体も流石にジュンサーさん相手に強く出られなかつたのだろう。  
おどおどしながらゼミに帰つていつた。

「なんていうか：イヤイヤさせられてるなんらもう少し強氣で抗議したほうがいいん  
じゃないのか？」

「シゲルも強気でさつきの男たちをやつつけられればよかつたのに。すぐジュンサーさんに  
頼るなんて男らしくないわ」

「そんなことになつたら俺は腰に着いてる空のモンスター・ボールに手を掛けざるを得ないな」

「……やっぱジュンサーさん呼んで正解だつたわよ。下手すれば『一一九』に掛けること  
になつたかもしれないわね」

「最悪、相手が顔面スプラッターになつてたかもな。……自分で言うのもどうかと思う

けど

「ブイブイ」

「……あの、何の話をしているんですか？」

なんでもない、と言つて気になつていた事に話題を変える。

「ポケモンゼミって、確か学校みたいところだつたよな?」

「はい、そうです。僕はそこの初級生徒です」

「その学校つてどこにあるんだ? 見当たらんないんだが:」

「ああ、今は霧を出してますから見づらいんですよ。ほら、すぐそこにあります」

『キーンコーンカーンコーン』

なんとも懐かしいフレーズが聞こえると同時に霧が晴れだす。  
そして見えてくる大きな校舎がかなり近くに立つていた。

『今日の授業の霧の中は終わります。明日は雪の中での授業を行います』

学校特有のエコーのかかつた放送がかかり終わると完全に霧が晴れていた。  
あの霧の原因はこの校舎のようだ。

野生のポケモンが出ない理由も近くに人口建築物のこの校舎が原因みたいだ。

「…はあ、明日は雪の中か…。きっと雪だるまにされちゃうよ」

「君はいつもんじゃないじめにあつてるのか」

「いえ、いじめではありません。愛の鞭です」

「…君は実はただのマゾなんじや…」

「ほら、あの人を見てください」

ジュンが指差しをした方を見ると牛乳瓶の蓋の様な眼鏡を掛けた中年の男が芝生に座り読書をしていた。

「あの人、留年して年を取りすぎちゃって、もうみんなから目を向けられなくなつて愛の鞭をしてもらえないようになつてるんです」

「…あれだけ年を取つてまで留年続けるのもある意味すごいな。俺なら実家に帰つて

るよ」

「そんなこと出来ませんよ。せっかく入学出来たのに親に合わせる顔がありません」

「ああ：そういうえばゼミって入学金がとんでもなかつたもんな。帰りづらくもなるか」

「あの人、僕と同じ初級なんですけど。ずっと一人で参考書を読んでます」

「あれだけ年取つても初級か…。なおさら帰りづらいな」

「ちなみに名前はベンゾウさんとか」

「いや、名前を教えられても…………え？」

「ねえ、ポケモンゼミってどんな所なの？」

霧が晴れてから校舎を不思議そうに見ていたカスミが会話に加わる。

どうやらこの面子でポケモンゼミを知らないのは自分だけだと感づいたらしい。

「ポケモンゼミは全寮制のトレーナー養成学校です」

ちなみに僕は初級なんでバツジ2個分の資格があります、と前置き説明をする。

ポケモンゼミは入学金・授業料がとんでもなく高いが、卒業者には各ジムでバツジを集めなくてもポケモンリーグに参加が可能になる。

卒業するためには初級・中級・上級とクラスを上げていかなければならぬ。

初級はバッジを2つ分と同じレベル・中級は4つ分・上級卒業者になるとポケモンリーグ出場資格がもらえる。

なんども言うが入学金・授業料がとんでもなく高い。

「そういうわけで僕もこのゼミに居たいんです。パパとママが高いお金を払つてここに入学させてくれましたし」

「…そうだつたの」

「けど、だからって愛の鞭を素直に受け入れるのもどうかと思うんだがなあ」

「良いんです。だつて問題に正解したらもつと難しい愛の鞭をさせられますから」

「……君、完全に卒業する気ないよね」

もしかしたら家に帰りづらくてずっとここに居たいだけか、と思つてしまう。

「というかシゲル。アンタやたら詳しいわね。このゼミのこと」

「俺の所にこここのゼミから推薦状が来たことがあつたからな」

「え!? 推薦状って言つたらこここの入学金と授業料が免除されるじゃないですか!!」

「あ～、そんなこと書いてあつたつけ」

もう捨てちまつたな～、とぼやきながら思いだす。

オーキド博士の孫、という理由で推薦状が来たのか。

はたまたタマゴの第一発見者ということで一部の研究者から目を付けられたからか  
旅に出る数か月前に一通の推薦状が来た。

最も、内容を読んでからすぐさま興味を無くし断つた。

シゲルの姉もやめときなさい、と言つてシゲルに賛同したし、祖父のオーキド博士も  
同意した。

「なんで断つたの？ アンタつてポケモンリーグを目指してるんでしょ？」

「そのつもりだけど、考えてみたらこの全寮制の校舎で限られたトレーナーとしかポケ  
モンバトル出来ないって思つてさ」

「……ああ、なるほど。確かにポケモンのレベルが中々上がりそうにないかも」

「実践経験も乏しくなるし、ポケモンバトルも決まつた闘い方になつて新鮮さがないし。  
なにより全寮制だから遠出して目新しいポケモンがゲット出来ないし」  
「確かに息苦しい環境かもしれないわね」

「…………けど推薦状をもらえるなんてすごいです！　この学園にはセイヨさん以外も  
らつた人はいないんです！」

「…誰、その人？」

初級クラスのトップの人です、と懐から一枚の写真を取り出す。

「この人がセイヨさんです。初級クラスなのに既にバツジ3つ分以上の実力を持つてい  
るすごい人なんです。しかも他の生徒たちからもすごい人気もあるんです」

「人気があるつて、もしかしてさつきの集団の生徒たちも？」

「はい、セイヨさんは特に男子生徒たちから人気がありますから」

それは君もなんだろうな…と言いそうになつた言葉を飲み込む。

写真の右上に書かれた、傘の下にある『セイヨ』・『ジュン』の二つの名前は見て見ぬ  
振り。

野暮なことは聞かないのがマナー。

「要はさつきの集団のリーダーがこの女なんでしょ。なんか性格悪そうね」

「カスミ……ひがむなよ」

「ひがんでないわよ!!」

「やめとけって。カスミが男共を侍らせてたら引くぞ。カスミは今まで良いんだつて」

「なんで慰めてるみたいな目してるのよ！ 違うわよ！ 姉さんやこの女がうらやましい詰じやなんだから！」

「わかってる、わかってるつて。カスミは今ままが一番つてわかってるつて」

「なんかアタシを見る目がかわいそうな物を見てる目になつてない!?」

「…あの僕はセイヨさんみたいに性格悪くてもかわいければいいんで」

「悪かつたわね!! この女よりもかわいくなくて!!」

「えつ!? いえ、僕はそんなつもりじゃ！」

「カスミ……ひがむなよ」

「ひがんでないわよ!! わかつた！ こうなつたらアタシがソイツに直談判してくる

!!

肩をいからせ、大股で校舎に向かおうとしているカスミを慌てて止める二人。  
が、ずるずると引きずられながらカスミを歩みを止めることが出来ない。

「待てっ！ 今のお前が校舎に入ると確実に死人が出る！ 落ち着け！」

「ゼミで暴力は禁止なんですよ！ そうなつたら僕このゼミに入れなくなつちやいますよー！」

「ここまで言われて黙つてられる訳ないでしょ！ なんか言つてやらないと気が済まない！」

「お前は真っ先に手が出るタイプだろうが！ 出会い頭に何仕出かすかわからんわ！」

「うるさい！ アンタもその写真見て何も思わないの！」

「いや、俺は別にひがんでないし……ブツ!?」

真っ先に手が出てシゲルにメガトンパンチ。

流れるようなモーションからこれまでの使用率が伺える。  
ほとんどシゲル相手に使用率を増やしていつてるが。

「つ痛て。わかつたわかつた。ジyun、写真を見せてくれ。こいつの怒りを鎮められそうな物を写真から探す」

「えつ、……あ、はい。どうぞ」

カスミを抑えながら再びジュンの懐から出された写真に目を通す。

年は同じくらい、顔もなんの欠点も見当たらない美形。

写真に映っている後ろ姿からはなんの問題もない。

楽しそうに学友と話しているようでもあるし、性格が悪いと言わっていたが、あまり

そうにも見えない。

完璧超人と言われても通じそうである。

「…………ん？」

「どうかしました？」

「…………いや、この写真って君が撮つたの？」

「え、ええ、まあ」

右上の相合傘が今頃恥ずかしくなつてきたのか頬を染めながら頷く。

しかし、シゲルが気にしているのそこではなく・・・、

「……」の写真、明らかにカメラ目線じゃないんだけど・・・。これどこで撮つたんだ?」

「…………」

「…………」

すつ、と写真を懐にしまい、校舎の方へ歩いて行く。

「…今の時間ならセイヨさんはトレーニングルームに居ると思います。こっちです」

カスミがドン引きしていた。

## ノーマルマサラ人 17話

霧が晴れてそびえ立つてゐる校舎の玄関に入り、『入校許可証』をもらう。ここにいる生徒の大半は高い入学金と授業料を払えるお金持ちの家が多いため、その手の悪い人から狙われやすい。

ポケモンを持つてゐるとは言え、年若い生徒たちを危険を負わせたらお金持ちの親から苦情が殺到して運営も危うくなるだろう。

そういつたことのため、このゼミに入るには『入門許可証』がいるのだ。  
そう説明しながら、校舎内の案内をしてゐるジ Yun に付いていく俺たち。

やがて『トレーニング室』と書かれた部屋に着いた。

「いつもここでセイヨさんは自主練習してゐるんです

『……ゲームセンター……？』

部屋に入つて第一声の感想がこれだった。

「セイヨさんを納得させるならポケモンバトルで勝たないと意味がないよ。

『……』は、ポケモンバトルの実力が物を言うんだから」

「……」で、自主練?」

奥にポケモンバトルを行うフィールドがあるが、それ以外はゲームセンターに置かれてそうな筐体ばかりが置いてある。

もしくは自動車の教習所に置かれてる筐体か。

「これなに?」

「僕たちはこのシミュレーションで自主練しているんです」

そういうって一台の筐体の前に腰を掛けて電源を入れる。

しばらくすると画面に『ゲンガー』と『ニドリーノ』の闘っている映像が映り、

(……あれ?)

その映像が終わると『ポケットモンスター 学』というタイトルが表れてゲームが開始される。

ボタン操作で『つづきからはじめる』を選択。

そして 8 b i t クラスのドット絵が映され、十字キーはなくステイツクでキャラクターを移動させている。

「…………つて、なんでやねん!!」

「イタツ!? え、なんですか!? なんで僕叩かれてるの!?!」

「なんだよ『つづきからはじめる』つて!? なんだよ『ポケットモンスター 学』つて!? なんだよこのドット!? ほかにも色々ツツコミたいけどなんだよコレ!!」

「え、いやだから……これで自主練を」

「おかしいだろ!! なにがおかしいってなにもかもおかしいよ!! ツツコミ所が多すぎてどこからつつこめばいいかわからん!!」

ここまで感情を高ぶらせたことがあつたどうかと訝しむカスミ、呆然。

叩かれたジユンもあまりのテンションの高さに付いていけず、呆然。

尋常でないシゲルを止めるためにカスミのメガトンパンチ。—— 静かになつた。

「えーと、これでアナタはいつも練習してるので?」

「え、ええ、まあ。大体みんなこのシミュレーションで練習しているんだ」

「へえー。けど、これで練習になつたりするの?」

「もちろん。これにはカントー地方のジムリーダーのデータが入つてるんだ。ほらこれ」

画面に映つているキャラクターを動かしどこかの施設へ入るとなにやらバトルが始まつた。

お相手はハナダジム・ジムリーダーと映つている。

「僕はだつてバッジ2個以上の実力を持つてるからね。いつも勝つてるんだ」

ほらね、と画面でバトルをしているのはスターミーとウツドン。  
ボタンを操作し、はっぱカツターをウツドンに指示。

スターミーが倒れる。

「なによこれ!?

「なについて、僕だつてバッジ2個分の実力はあるからね」

「冗談じゃないわよ！ ハナダジムがこんな弱いわけないでしょ！ シミュレーションはシミュレーション、アタシはアタシ！」

「え、君つてハナダジムのジムリーダー？」

「ハナダジム美人4姉妹の末っ子よ！ ついこの間のジム戦もアタシが受けたんだから！」

「へ～、けど僕だつていつもこのシミュレーションで勝つてるんだ」

「上等じゃない！ 実際に闘つてみようじゃないの!!」

「なら向こうにフィールドがあるんだ。負けないよ」

慌ただしく、当初の目的を完全に忘れている二人がポケモンバトルを行うためにフィールドへ向かっていく。

そんな二人を静観し、われ関せずの姿勢を崩さない一人の男。

「……ステイックでキャラクター動かすの難しいなあ。おお、Bボタン押しながら移動しても走らない！ 初期の方のバージョンだな。せつかくのゲームなんだし、最初はシリダネを選んで……あ、あぶね、遂レポートするところだつた」

周りの空気なんて知ったこっちゃないと思わんばかりにメガトンパンチから復帰し、筐体の前に座つてシミュレーションを楽しんでいるシゲル。

気分は久々にゲームを初めからしたくなるゲームマニア、誰もが経験はある『最初からプレイ』。

「ゲーセンの筐体でポケモンが出来るとは。ゲームの世界でゲームするつてのも変な気分だけど」

などと言いつつ、ステイツクでキャラクターを操作ながらゲームに没頭する主人公。向こうで相性悪いはずのウツドンを一方的にボコつて最近の扱いの悪さの鬱憤を晴らすカスミ。

吹き飛んでいくウツドンを見ながら絶望の雄たけびを上げているジユン。  
レポートされそうになつた、危うし見知らぬ生徒のセーブデータ。  
協調性がない面子だつた。



「…それで、あれから落ち着いた…」

『はい、ご迷惑をお掛けしました』

数日前の電話から、様子を見るために友人である彼女、エリカに再び連絡をとったナツメ。前の電話では、正直彼女の狼狽っぷりとあまりにもぶつ飛んだ話題に疲れたので少し投げやり気味に電話をこちらから切ったのだが…。後々思い出すとその後とんでもないことを仕出かすのではないかと不安になり、こうして電話をした。

幸い、画面に映る彼女からは少なくとも負の感情は感じられない。自分を落ち着かせ、心にも整理が出来ているようで安心した。

『念のため、ナナミさんに連絡を入れて仔細を伺つたのですが、どうやら私の懸念だつた  
ようです』

「……そう、ナナミさんに」

…まあ、それで落ち着いたのなら良しとしよう。

シゲルの姉であるナナミさんに確認したのならば安心もするだろう。

覗きで得た情報を相手の家族にバラして大丈夫かなあ、と思ひもしないが。

「……一応確認して置きたいんだけど、……どんな風に聞いたの？」

『シゲルさんは異性との遊びに盛んなのかと』

「……聞くんじやなかつた」

…よりによつてなんて聞き方をしているのだろうか。明らかに相手の家族を不安にさせる聞き方だ。

「……それで、なんて答えられたの？」

『旅に出ながらそんな遊びが出来るほどあの子は器用じやない、と』

「……聞くんじやなかつた」

…あまりにもシビアで現実的な意見。確かに家族であるナナミさんなら弟のそういった事を分かるかもしけないが…。だとしても答えに優しさが全く無いような。

「……それで、納得して落ち着いたアナタもけつこうひどいような」

「？ すいません、聞き取れなかつたのですが  
「…なんでもないわ」

まあ、この友人はシゲルとの付き合いが長いから納得するところが合つたのかもしれない。  
ない。

あまりとやかく言つても意味もないようだし。

『そういえば、ナナミさんに電話した時、少し前にシゲルさんからも電話があつたようです』

『…そう、シゲルもホームシックにでもなつたのかしら』

『いえ、なんでもポケモンに出来るだけダメージを与えずゲットすることは出来ないか、  
と』

『？ ……ポケモンバトルでダメージを与えずにゲットしたいということ？』

『いえ、モンスターボールでダメージを与えずに、と。私も意味がわからなかつたのです  
が』

『……………ポケモンにまで被害を与えるとは』  
『ナツメさん？ どうされました、額に手を当てて』

思い出されるのは彼との初めての邂逅。いや、邂逅と言えるのかもわからない。

何か理由があつたのか、今思い出してもわからない。ただ、いきなりこちらへと投げられた剛速球。訳もわからず私へ向かつてきましたボールに驚くよりも早くボールは私に当たつた。いや、正確には私の持つていた人形に。完全に殺人級の球速だつた。

首から上が文字通り吹き飛び、無残になつた人形にS A N 値が一気に減つたものだ。

その後、彼に詰め寄り色々文句を言つてやつたのが彼との出会いだつた気がする。

そういえば、あの後人形がどこにいったのかまるで消えたかのように私の前からなくなつてしまつた。両親が捨てたのかと思ったが、彼に詰め寄り怒りを露わにした私を見ながら驚いて固まつていた両親が捨てたとは考えにくい。

あの人形はどこにいったのだろう？

『ナツメさん？』

「……なんでもないわ、考え方をしていただけ」

『？ そうですか。あの、申し訳ありませんが私、これからジム戦がありますのでこれで』

「…ええ、ごめんなさい。長々と電話してしまつて」

『いえ、全くかまいません。私もナツメさんと話そうと思つていましたから。それでは失礼します』

手を振りながら笑顔で電話を終えた彼女が画面から消える。こういつた礼儀正しく明るい表情が彼女の常なのだ。：最近はやたら暴走することが多くてこんな別れ方を久しく見なかつたが。

友人との会話を終えて部屋を見回す。もしかしたらあの人形があるのではないか、と。けれどもやはり見つけることはなく。

そういうえばあの人形はいつから持つていたんだっけ？

◆◆◆登場人物紹介◆◆◆

◆ナナミ

遂に名前が出た本編最チートキヤラ。

シゲルの姉であり、シゲルの師であり、シゲルの恐怖の対象。アニメでは名前のみしかわからず、どんな容姿かも不明。

ゲームではポケモンのなつき度を上げてくれるキャラクターだつたが、この ss ではシゲルの基礎ポイントを上げてくれるキャラクター。

この ss で屈指のキャラ崩壊がすごい人。（容姿・性格が元々不明なためキャラ崩壊というよりもキャラ設定というのかもしね）

# ノーマルマサラ人 18話

「そ……そんな、ウツドンは水タイプに強いはずなのに」

ゲームに没頭しているシゲルから数メートル離れたフイールド。

シミュレーション通りの相手のポケモンを見て余裕ぶつたのも束の間。ハナダジム代表のカスミのスターミーの前にあつけなく惨敗。結果を目にしたジ Yun の胸中は驚愕と衝撃であった。

「どう！ シミュレーションはシミュレーション、アタシはアタシ！ わかつた！」

対面にいるカスミの声に意識が向く。

シミュレーションはシミュレーション…つまり実戦的ではないと言っているのだろう

うか。なら、自分やこのゼミに居る生徒が学ぶことは意味があるのだろうか。ジュンの胸中に疑問が浮かび上がった。

「……だからアナタは駄目なのよ！」

いきなり後ろから聞こえてきた女性の声に体が跳ね上がる。聞き間違えるはずがないほどジュンはこの女性を日ごろ常に意識しているのだから。

「セイヨさん!?」

後ろを振り向くと、数人の男子生徒と、その中心に毅然と立ち、こちらに視線を向けている一人の女性・ユウトウセイヨの姿があつた。

「……アンタがセイヨ、ね」

またもや後ろから女性の声に体が跳ね上がる。  
さきほどのセイヨのような凛とした声ではなく、腹から絞り出すような低い声に寒気

を感じた。

対面に立っていたセイヨには聞こえていなかつたようだが、間に居るジユンにはしつかりと聞こえた。……聞きたくはなかつたが。

「彼女がハナダジムの末妹とはいえ、ジムリーダーの代理を務めることもある。まして、旅に出て持つている水ポケモンもそれだけ成長しているわ」

そう言いながら近づいてくる。平素ならジユンの内心は大いに喜んでいただろう。けれども、見つめる瞳は冷めたものを見る目であり、こんな目で自分が見つめられることは初めてだつた。

「…ジユン君。私はね、クラスメイトとは良きライバルでいたいの」

瞳を閉じて、感慨深く言葉を発するセイヨに、ジユンは心を奪われた。けれども再び開かれた瞳にはやはり冷めた目をしていて…。

「互いに切磋琢磨し合つて、共に強くなる。クラスメイトで在り、ライバルである、そんな関係でいたいの。——けれどもアナタはなに？」

「…えつ？」

「アナタはいつも周りの友達から愛の鞭を受けているのに、いつまで経つても勉強不足のままで、いつまで経つても強くなれない」

その言葉にはなにも言えなかつた。確かにずっと愛の鞭を受けていたし、分からぬ問題——否、答えるが分かつていてもこれ以上厳しくなるのがいやだから分からぬ振りをしていたし、先ほどのカスミとのバトルでも相性が良いはずのポケモンなのに惨敗。勉強不足、強くない、そんなセリフを言われてもなにも言い返せなかつた。

「今まで経つても強くなれないのなら、今まで経つてもそのままなら——このゼミから、私の前から！」

「……」

「——消えて」

目の前でセイヨが体をひり返すのを見ながら、絶望的な言葉を掛けられ、目の前が真っ暗になつていく。クラスメイトに、それも自分が想つていた少女から言われた言葉だからこそ、なおさらジ Yun の心が傷つく。

そんなジ Yun を見向きもせずに去つていくセイヨにただ、縋るような視線を送ることしか出来なかつた。

「待ちなさい!!」

これで話は終わり、と言わんばかりの空気をぶち壊すような鋭い叫び声に、セイヨが、

誰もが視線を向けた。

視線の先には仁王立ちをし、怒気を隠さんばかりの表情をセイヨに向ける少女。先ほどジユンをポケモンバトルで完勝したカスミがにらみつけていた。

「さつきから黙つて聞いてれば、いい！『弱い』男の子を守つて上げるのが——本当の女の子よ!!」

『——漢らしい!?』

潔く言い切つたカスミのセリフに取り巻きの男子生徒の誰もがそう思つた。心なし  
かカスミの背中に津波が起きたかのような心象風景が見えるほどの錯覚に陥る。  
：弱い男の子、と追い打ちを掛けられ更に傷ついているジユンには誰も気づいてない。

「男の子にひどいことばっかり言つて……。一人の女の子としてアナタが許せない！」  
(……あなたも言つてるんですけどね)

そんなジユンの心境などお構いなしに二人の少女はにらみ合いを続ける。互いの主張を譲らないかのように、ここで引いては女が廃る、と言わんばかりの気迫に取り巻きの男子生徒も固唾を飲んで見守る。

「あら、私は何も間違ったことは言つてませんわよ」

「間違つてないわよ！ けど、言つて良いことと悪いことがあるじゃない！」

「直接言わなければいつまで経つてもダメなままで現状に甘えて成長しないわ」

「確かにダメなままだけど、そこは心の広さを見せて長い目でダメな彼を見なさいよ！」

「見たわよ！ 何度もダメな彼が愛の鞭を受けているところを！ けどいつまで経つても成長しない弱いままなのよ！」

「だつたらアナタが弱い彼を強くしなさいよ！」

「弱い今まで、いつまで経つても成長しない生徒と一緒に勉強しても学ぶことなんてないわ！ そんな彼と付き合うなんて時間の無駄よ！」

「それでも一緒に勉強して上げるのが女の子が見せるやさしさじゃないのよ！ ああいつた男の子はね、こっちからアクション起こさないと何もしないウジウジ・ジメジメとした奴になるんだから！」

「既にそうなつてるのよ！」

「だつたらなおさら強気でしごいて、矯正させるぐらいのつもりで一緒に勉強してあげなさいよ！」

「だから、それが時間の無駄だつて言つてるのよ！」

『——もうやめてあげて!?

固唾を飲んで女性二人の口論を見守っていた取り巻きの男子生徒全員が思わず同情してしまった会話内容に心を一つにした。既にジュンは泣きが入っている状態である。

ジュンの成績を知っている彼らは立場的にセイヨの味方だし、口論が始まる前はセイヨの考えに賛同していたのだが……。流石にこの口論内容の酷さを本人が直に聞かされるのを見ると思わずジュンに同情してしまう。ここにいる男子生徒同様にジュンがセイヨを慕っていると知っているからなおさら。

自分たちが本人から直接こんな話を聞かされたら、と思うと心情的にジュンを慰めたくなる。

かといって、このヒートアップしている二人の女性の間に入る勇気なんてあるはずもなく。

『——もうやめてあげて…』

とりあえず、この一件が終わったら今後やさしく接しようと思う彼らであつた。



「いいわ！ こうなつたらポケモンバトルで白黒着けようじゃないの!!」

「望むところ！ このポケモンゼミ初級クラスの一番星のユウトウセイヨがどれほどの実力か思い知らせて上げるわ！」

「はや当事者であるジユンをそつちのけで勝手にヒートアップしている二人に誰も口を挟む勇気がないため、成るように成れと言わんばかりに誰もが静観している。ぶつちやけ、なんでも良いから早く終わつて欲しい。」

「末っ子だからつてハナダジムをなめないでよね！ がんばつて、スターミー！」

先ほどのウツドンの戦闘から出っぱなしであつたスターミーをそのままフィールドで戦闘をさせるカスミ。ウツドンとの戦闘では『みずでつぼう』一発で決着を付けたのだからダメージを受けていない。なによりカスミの手持ちのポケモンの中では一番強いポケモンもある。

対し、セイヨもフィールドに立ち、そばにある棚からモンスター・ボールを一つ手に取る。

「――知つていてカスミさん。ポケモンは相性が全てじゃないのよ」

「なによ、もう負けた時の言いわけ。言つとくけどさつきのバトルじや相性の悪いウツ

ドン相手に余裕だつたんだからね』

余裕とか言つてやるなよ、ヒツツコミを入れたい男子生徒一同。

『そう、いくら相性が良くても負けることはある。ポケモンバトルで必要なのは『レベル』よ。——行きなさい『ゴローン』!!』

「——!?」

モンスター・ボールをバトルフィールドに投げ、閃光と共に姿を現したのは『ゴローン』。

セイヨが選択したポケモンは、『いわ』・『じめん』タイプのイシツブテの進化形であるゴローン。進化形であるためイシツブテよりも能力は高く、主に物理攻撃を得意とするポケモンである。

そしてタイプを見れば当然水タイプに『弱い』。

「……ゴローン……なんて……」

「ふふふ、見せて上げるわ。相性が悪くともレベル次第で勝てるということを!」

「……ゴローン……ゴローン……」

「先にポケモンを出したのはあなたなのだから、先手をどうぞ」

「……ゴローン……イシツブテの……進化形……」

「さあ、早く始めなさい!」

「——アンタ馬鹿じやないの!!」

——なんですつて？

「……どういう意味かしら。この私に対し……『馬鹿』とは……」「そのまま意味よ！ アンタつてバツカじやないの!!」

「!!——なんですつて！ この私に対して馬鹿ですつて!?」

ポケモンバトルが始まつていなにも関わらず、いきなりカスミのヒステリーと暴言。

暴言を喰らつた本人であるセイヨが怒るのは当然とも言える。  
……が、

「アンタ死にたいの!! 本気で危ないのよ！」

「……はあ？」

「死ぬかもしれないのよ!! アンタも、アタシも、そこに居る生徒たちも!!」

「……（意味がわからない）」

なんか意味もわからず心配している、と誰もが思つている。男子生徒たちもカスミが

何を言わんとしているかが理解出来ず首をかしげるばかり。無視してポケモンバトルを始めようかなあと思つたりもしていたが相手のあまりの狼狽つぶりにそれも躊躇わられた。

「ちよつとそこで待つてなさい！ アイツ呼んでくるから！」

「……はあ」

状況が一向に理解出来ずに生返事。

「シゲル～～！」と呼びながら、シミュレーションをしている男の子に向かうのを黙つて見ていることしか出来ない一向だつた。

◇◇◇

「シゲル！ アンタなにやつて……なにシミュレーションで遊んでんのよアンタは  
!!」

「うお！ ……びつくりするだろカスミ。いきなり大声出すなよ」

「アタシがポケモンバトルやつたり、かよわい男の子を守るために舌戦したりしての間、アンタなにやつてんのよ!?」

「待て！ 拳を握り締めるなカスミ！ 僕は見ての通りシミュレーションで勉強してた

んだ！ なにもおかしなことはしてない！」

「少しばかしあたしを応援したり勞つたりしなさいよ！」

「応援したり勞つたりって……。なに？ 負けたのポケモンバトル？」

「負けてないわよ！ 余裕で勝つたわよ！ アタシの完勝だつたわよ！ それで今は腹立つくらいに男を尻に敷いてそんな女とポケモンバトルを……そうよ！ そいつがヤバいのよ！」

「……テンション高いなあ。 ……どつたの？」

「そいつ『ゴローン』を出したのよ！？」

「？ ……別に良いじゃないか。誰がどのポケモン出そうとそいつの自由じゃないか」

「アタシの『スターミー』相手に『ゴローン』出して勝とうとしてるのよ！！」

「…………なん……だと！？…」



「死ぬわよ！ 穴談抜きで死ぬかもしれないのよ！」

「するなよ！ 絶対に『じばく』するなよ！」

(…………増えた)

シミュレーションをしていた男の子を引き連れてきた後はようやくバトルかと思つたのだが。

なぜかそのまま一緒になつて『ゴローン』を糾弾している。相変わらず状況が全く理解できない一同。ここまで相手が必死なのに意味が全く伝わらないのが、なぜか少し申し訳ない気分になつてくる。

「こんな機械が多いところで『じばく』したら大惨事になるのがわからないの!?」「するなよ！ 絶対に『じばく』するなよ！ フリジやないからな!!」

「……『じばく』しませんから、もう始めていいかしら。『じばく』しませんから……」大事なことなので2回言つたそうです。大事な事なので。



「スターミー!! 『みずでっぽう』!! 油断しないで常に距離を保つて!!」

「良いぞスターミー!! 攻撃後は特に相手の動きに鋭敏になるんだ!! 油断するともらうぞ!!」

「ブイ!! ブイ!! ブイー!!」

糸余曲折あつて、ようやくポケモンバトルが始まつたのだが…、

「…………強い」

現在、フィールドではスターミーが優勢であつた。

「スターミー!! 続けて『みずでっぽう』!!」

「距離を縮められてるぞ! 間合いを取るんだ!!」

「ブイ! ブイ!!」

ポケモンのレベルは間違いなく『ゴローン』が上である。その証拠に何度か『スター  
ミー』からの攻撃をもらつても『ゴローン』は闘えている。同レベルの『ゴローン』な  
らば既に倒れているはずのダメージを耐えきつてゐるのだ。  
シゲルはそれを見て「…パネエ」と呆然としていたが、事実、まだ『ゴローン』は闘  
える。

セイヨもレベル差による力押しで『ゴローン』で『スターミー』を圧倒出来る、攻撃  
を耐えきれると踏んで選出したのだ。

けれども、現在フィールドによる試合展開は全く予測出来なかつた。

「ゴローン! 『たいあたり』!!

「スターミー、飛んで!!」

攻撃を跳躍して回避する『スターミー』。これも何度目かの攻防のやりとり。

「スターミー、『みずでっぽう』!! 水圧で距離を取るのよ!!」

『ゴローン』に向かつて『みずでっぽう』の攻撃を行いながら、自身は発射した水圧で空中で距離を離す。文字通りの「ヒット＆アウエイ」を見事に使いこなす様はセイヨだけなく男子生徒ですら舌を巻く光景だつた。

なにより、この闘い方は近距離で物理攻撃を得意とする、所謂『インファイト』の『ゴローン』が一番苦手とする。

「ゴローン!! 『たいあたり』!!」

「スターミー！『かたくなる』!!」

どうしても捌ききれない攻撃は回避という選択肢をすぐに放棄し自身の『ぼうぎょ』を底上げしてダメージを抑え、すぐさま距離を取る。これも何度目かの光景であつた。

(つ！……状況を挽回出来ない！)

セイヨはカスミの戦術に翻弄されていた。



「スター・ミー!!　『みずでっぽう』!!」

（何としてでも！　『じばく』される前に殺らなきや!!）——カスミの心の声。

思い出されるのは、数日前の溺死（しかけた）事件。

こちらに相性の悪いポケモン相手に楽勝だと思つたら、あのザマだ。

試合に負けるわ、水難に合うわ、拳句に姉に笑われるわ。

あんなトラウマになりそうな思いはもうしたく無い、とカスミは一切の油断と妥協を捨て、この試合に挑んでいる。全ては自身のプライドと体裁のために。

「良いぞ、スター・ミー!!　相手の攻撃の予備動作をよく見るんだ!!」

（何としてでも！　『じばく』される前に逃げなければ!!）——シゲルの心の声。

思い出されるのは、数日前の津波（を引き起こした）事件。

フィールドがプールなんて試合前には思いもしなかつたため、あの試合では一名の被

害者を見取つて二次被害の恐ろしさを改めて知ったが……。こうして自分に襲いかかる危険が目の前にあると思うと、今すぐ逃げ出したいくなる。

とは言え前回の事件で、それなりにカスミに悪い事をしたなあ、と思うこともありますリギリまで応援をしようと逃げずにいる。

けれども、既にカバンから軍手を取り出し、着用。窓を背にし、窓の外がプールであることも確認。そして保険で『イーブイ』をボールから出す。

相手が『じばく』しようものなら、すぐさま体を180°回転。アクション映画よろしく両腕をクロスして窓をぶち破つて脱出。手を切らないように軍手も着用。意味があるかどうか分からぬが、保険で『イーブイ』の特性『きけんよち』を頼りに逃げる準備は完璧である。

あんな悲惨な目に合いたくない、とシゲルは一切の油断と妥協を捨て、応援をしてい る。全ては自身の体と生存のために。



そんなそれぞれの思い（打算）なんぞ、相手が知る由もなく、試合は佳境に入る。

「スター・ミー！ 『かたくなる』！」

「つ！……『ゴローン』！ 力づくで突破なさい！ 『いわおとし』!!」

「今よ！ 『じこさいせい』!!」

「——つ!!」

今まで回避に専念し、捌けないものは『かたくなる』で防御力の底上げを図っていたが、この試合で一度も『じこさいせい』を使つたことはなかつた。

というのもこれもカスミの作戦であつた。

序盤に相手に『じこさいせい』を見せると相手はそれを疎ましく思い、大技で一気に攻めてくる可能性が高く、下手をすれば一撃でスターミーを落とされる危険もある。

そこで相手がこちらの実力を測るために小手調べをしている時に、こちらは回避の間に何度か補助技で自身の強化をしておく。

試合が終盤、相手が焦れて勝負を掛けようとしたときに『じこさいせい』でHPの回復。

『かたくなる』でダメージを抑えられたとはいゝ、何度か被ダメージを受けていたからこそ勝負を仕掛けたのに、ここで回復をされれば相手は浮足出す。加えて防御力が上がつていてる状態から回復すればスターミーの短所であるHPの低さを補える。今までのバトルで本命であるこの技、『じこさいせい』を使うタイミングを常に測つていた。

また相手にこちらの考えを悟らせいないように『みずでっぽう』で相手の気を引かせていた。

レベル差があるとはい、弱点の水タイプを貰い続けることは相手にとつて看過出来ない。故に何度もちらつかせれば相手は水タイプの攻撃技のみしか気が回らないだろう。

相手はレベル差による短期決戦を挑むだろう、とカスミは踏んでいた。

なぜならば、つい先日に相性の悪いポケモンと文字通り短期決戦を行つたのだから。「ほとんどの場合、相性の悪いポケモンが補助技なしで長期戦を挑む訳がない」と隣にいる少年もいつか言つていた。それ故にこちらはあえて長期戦の構えをとつていた。相手が『じばく』しないと言つたとはい、いざとなつたらやりかねないかも知れない、と危惧もしていたが確実に勝利を得るためにあえて危険である闘い方を選んだ。

(――考え方がだんだんコイツに似てきたわね。アタシ)

良いか悪いかはともかく……。

それはともかく、バトルは終わりを迎える。

ゴローンの一撃をスターミーが正面から『みずでっぽう』で迎え撃つ。

『みずでっぽう』の水圧で押され、一気に近づこうとしたゴローンを鈍らせる。しかし苦悶の表情を浮かべながらもそのまま攻撃体勢に移行、おそらく渾身の一撃であろう『たいあたり』をスターミーにぶつけた。

攻撃を喰らい吹き飛ばされるスターミー。だが、『かたくなる』の底上げのおかげだろう。すぐさま体勢を整え待機する。倒れる様子はない。

対し、ゴローンは追撃をせず、——否、出来ず倒れ伏す。

——決着がついた。

「——私の負け……ね」

悔しさも悲しさも感じさせず、自分に言い聞かせるようなセイヨの声が試合を締めくくつた。

◇◇◇

「セイヨさん、僕、ゼミを退学します」

「…そう、ゼミをやめるんだ」

「うん。……さつきのポケモンバトルを見て思つたんだ。ゼミで習う事だけがポケモンバトルの全てじゃないって。だから、僕は家に戻つて最初の一匹からやりなおしてみたいんだ」

「——私も同じ気持ち。ゼミだけではわからないこともあるつてわかつたわ。けど私はゼミに残つてもう少し自分を見直してみたいの」

「……あの、それで。……僕、セイヨさんの写真を持つてゐるんですけど、これからも持つていて良いですか？ ゼミに居た事を忘れないように……」

「……ジ Yun 君。私も持つてるの、クラスメイト全員の写真を」

「——え？」

「クラスメイトで共に学んだ友人を忘れないようにこれから大事に取つておくわ。この写真」

「……セイヨさん」

「いつか、また会いましょう。友人として、良きライバルとして」

「ハイ!!」

夕焼けが二人の影を延ばし、影が重なつてゐる。

そんな中、二人は約束をする。いつかまた会おう、と。

今は離れるけども、いつか交わるときが来ると、二人の心も重なつていた。

そんな中、もう一つの二人組は、

（……盗撮した写真とクラスメイト全員の写真だから、実はロマンも愛も欠片も無い  
という）

（……シツ！　言つちやダメよ、良い空氣ぶち壊すから）

……終われ。

### ◆◆◆登場人物紹介◆◆◆

#### ◆ジユン

ポケモンゼミの生徒であり、実は盗撮の疑いのある人物。

アニメでサトシたちに見せた写真ではマジでセイヨのみの後ろ姿、しかも全身を映しているという。トオル（カメラマン小僧）に匹敵しそうなテクニックを持つていそうである。

アニメでは故郷に帰つてやり直すということだが、当然、その後の動向は不明。彼は今なにをしているのか。

### ◆セイヨ

ポケモンゼミの生徒で、ゼミの基準ではバッジ3つ分の実力があるそうな。

このssでは「露骨な尺伸ばしかなあ」と思い、触れていなかつたが、

「そう、天下に名高き名門予備校ポケモンゼミ初級クラスの一番星、銀河の果てのそのまた果てに光り輝くアンドロメダかと人は呼ぶ、しかして、その実態は、ユウトウ・セイヨ！」

という口ケット団ですら「自分たちよりも壮大」と言わせるほどの前向上を持つている。

当時のスタッフもすごいことを考えているのだと思つてしまふ。ちなみに前向上中は背景が宇宙であつた。

# ノーマルマサラ人 19話

「ゴローン！『じばく』!!」「ツ!!」

ジム内で一際大きい爆音が響き渡る。

光と音が終わると、爆風と砂埃が起こり、視界が塞がれる。

少しずつ視界が戻つてくると、やがて2体のポケモンが見えてくる。しかし、砂埃が舞う中、ぼやけて状態が確認出来ない。

対面のジムリーダーも同じだろう。固唾を飲んで目を凝らしている。

そして、少しずつ視界が広がった先には、2体のポケモンが倒れ伏していた。

『じばく』したゴローンと、――至近距離でモロに喰らつた、ライチュウが…。

「ライチュウ！ゴローン！共に戦闘不能!! よつて勝者、マサラタウン・シゲル!!」

「Oh!! No~~~~~!!」

試合終了の宣言と共に、野太くも流暢な英語がジム内に響き渡った。

現在クチバシティのクチバジム内。そしてクチバジムのジム戦を攻略したシゲルであつた。



「クレイジーなバトルだつたぜ、ボーカー！ここまで思い切りの良いバトルは久しぶりだ！」

「どうも。マチスさんもかなりアグレッシブな闘い方で驚きましたよ」

握手をしながらお互いを讃える。ゴローン相手に『メガトンパンチ』を繰り出すライチュウに「なんて命知らずな!?」ということで驚いていたのだが。

「けど、こう言つては失礼かもしませんけど…。なんで『でんきタイプ』のジムリーダーなんですか？ 隨分立派な体格をなさつてるので『かくとうタイプ』のジムリーダーもありなのでは？」

「H A H A H A、確かに軍人は体が資本だが、軍に所属していたものは全員『でんきタイプ』のポケモンを所持しているのさ！」

「？……そうなんですか？」

「Sure! いざという時は『AED』の代わりになるからさ!」

(自動体外式除細動器、電気心臓マッサージ)

「……なるほど」

思わず納得してしまった。

「これがジムバッジだ。受け取ってくれ!」

「はい、ありがとうございます」

胸ポケットから出されたバッジを受け取り、バッジケースにしまう。  
これで3つ目。順調にバッジが集まっていると内心でガツツポーズ。  
この調子ならばポケモンリーグ参加も難しくはない。

「それでは、これで失礼します。ジム戦ありがとうございます!」

「痺れるようなバトルがしたければいつでも来てくれ! 歓迎するぜ!」

「はい、機会があれば

「次のジム戦も頑張れよ! Good bye! ボンバーマン!!」

(…………そのあだ名はやめてほしい)



「お待ちどうさま。お預かりしたポケモンはみんな元気になりましたよ」「どうも」

ジム戦を終え、ポケモンセンターでポケモンを回復。それと遅めの昼食。ポケモンフードをもらい、手持ちのポケモンにも遅めの昼食。お昼時が少しずれているおかげか、席は問題無く確保出来た。

「おまえらおつかれさん。飯の時間だぞ！」

手持ちの4体全員を出して、席に着いて食事。今日はカツカレー也。

「ここ」でカスミが居たら対面にオムライスを食しながらお前の尻尾をいじってるんだが……、よかつたなイーブイ。お前の今日のランチタイムは平和だぞ」

「ブイ！」

現在カスミはここにいない。

別に旅の道中で別れた訳ではなく、このクチバシティの港に停まっている『サントアヌ号』を見に行つているためである。

クチバシティに着いてすぐに、ポケモンセンターに貼つてあつたポスター。『現在サントアンヌ号停泊中、船内見学ご自由にどうぞ』という内容にカスミは真っ先に喰いつ

いた。

「アタシ絶対見たい！ シゲルも行きましょ！」

と、誘われたが正直あまり興味がなかつたため辞退した。

ジム戦を優先したいのもあつたが、船の中に入つたら絶対他のトレーナーからバトルを挑まれて時間がかかるつて、今日中にジム戦が出来るどうかが分からなくなりそうでもあつたし。

とはいゝ、案の定ふて腐れて一人で見に行つたカスミには申し訳無かつたが……今度なんか埋め合わせしどこ。

「というわけでイーブイ。カスミの埋め合わせを手伝つてくれ。具体的には進化直前に尻尾の毛を抜いてネックウォーマーを作る感じで」

「ブイ!?」

「大丈夫大丈夫。進化すればきっと毛は生え治つてるから……たぶん」

「ブイ！ ブイ!!」

「大丈夫大丈夫。シャワーズに進化すれば尻尾が尾ヒレみたいなるから毛なんか気にしなくなるつて……おそらく」

「ブイ～～～!?」

「ブースター やサンダースに進化しても……きっと生えてるつて。……待て待て、冗談

だ逃げるな』

カスミが居なくともなにかと話題に事欠かない面子と会話（鳴き声）を続けながら昼飯を消化。

あとはカスミが帰つてくるのを待つまで時間を潰すのだが。  
ジム戦が思いの外スマーズに終わつたのですることが無い。

「……フレンドリイショップに行つても買うものないしなあ」

必要な『どうぐ』は揃つている。

このクチバシティに着くまでの道中、特に消費した道具はなく、モンスターボールも補充する必要はなかつた。あまり持ちすぎてもバッグの中が膨らんでかさばるので精々5～6個ほどのストックで十分。

しかし、どこにも行かないとなると本当に暇な訳で……。

「……よし、久しぶりにお前らの手入れでもするか。イーブイ、こっち来な」

「……ブイ」

「……警戒するなつて。毛は抜かないから」

しぶしぶだつたが、ピヨンつて効果音が付きそうな軽快なジャンプで膝に着地。

体を丸めて尻尾をふりふり。『なつき』が上がる毛づくろいを嫌がるポケモンはそういない。

どうやら今日は尻尾をブラッシングして欲しいようだ。

「もう……進化はしてほしいんだが、そうなつたらこの尻尾の手入れも出来なくなるのか……」

このふさふさの尻尾は気に入ってるんだけどなあ。

シャワーズに進化したらどこを手入れすればいいんだろう？ 尾ヒレを磨くとか？  
：わからん。

「そういやお前の意見とか聞いてなかつたな。お前はなんか希望とかあるかイーブイ？」

「ブイ！ ブイ！」

「……ブイブイ言われてもわからんな。……ん？ なにテレビ？」

「あれ！ あれ！」という意思表示か、前足をテレビに向けて催促。ポケモンセンターの奥の方にある大画面のテレビには現在ポケモンバトルの中継がされていた。

「バトルしてるのは……ゲンガーとケンタロス……いや、俺はお前の進化形について聞いてるんだけど。……え、違う？ ポケモンじゃない？ なにを見ろって？」

「ブイ！」

再び「あれ！」と催促するように前足を指す。テレビにはゲンガーとケンタロスがやり合っている。

『ここ』でケンタロスが攻勢に移りました！『はかいこうせん』が放たれます!! だがしかし、ゲンガーの体を通り過ぎてしまつたあ!!』

「……ゴーストタイプに『はかいこうせん』を打つとは……。ああ、ポケモン講座のテレビか」

「ブイ～！ ブイ～！」

「いや、あれ見せられてもわからないんだけど…」

「ブ～～イ！」

「……どうした口を大きく開けて、歯でも磨いてほしいのか。——違う？ ジェスチャ～？ 口を開けて、ゆっくり首を振る？ ……なにがしたいのお前」

「ブ～～イ！」

「……さつきと同じことされてもな。——え、テレビの奴？ 口を開けて、首を振る…。振ってるんじやなくて……動かす。 ああ！ なぎ払つてるのか！ ……なにを？」

「ブイ!!」

「あれ！ つて言われてもな。さつきのテレビの……もしかして『はかいこうせん』？」

「ブイ！」

「——『はかいこうせん』で相手をなぎ払いたいつてこと?」

「ブイ!!」

「——そんな子に育てた覚えはありません!!」

「ブイ!?」

「——その教育ママのような口調が思わず出てきたが、そんなこと関係ねえ、トイーブイを向き合わせて座らせる。正面に向きあい珍しく真面目な顔でイーブイの目を見る。「いいか、イーブイ。『わざ』を見かけや威力で判断しちゃいけない。見た目の派手さや名前のカッコよさだけで『わざ』を覚えるのはアマチュアどころかビギナーのすることだ」

「……ブイ」

「オレにもそういう時期があつた。『はかいこうせん』が威力高いから最強とか、ひこうタイプの『そらをとぶ』が相手の攻撃も避けて最強とか、なぜロクに羽の無いドードリオが覚えてリザードンが『そらをとぶ』を覚えられないとか……コレは関係ないか。——とにかくそんな時期がオレにもあつた」

「……ブイ」「……カゲ」

「だがしかし! それが間違いだと気付くときは大抵相手にボコボコにされて負けると

きなんだ！『はかいこうせん』を耐えられて『じこさいせい』であつという間に回復されたり、『そらをとぶ』で相手にポケモン交換の隙を与えたり、ほのおタイプの特殊わざより『きりさく』や『じしん』の方が使い勝手が良かつたりザードンとか……コレは関係ないか。——とにかくそんな時がオレにもあつた

「……ブイ」「……カゲ」

「つまり！何が言いたいかというとイーブイ！お前は『はかいこうせん』を覚える必要はありません！」

「ブイ！」

「そしてそこで一緒に聞いてるヒトカゲ！お前も『そらをとぶ』を覚える必要はありますせん！」

「カゲ!?」

「——というカリザードンになつたら羽が生えて飛べるようになつてるから、わざわざ覚える必要がないはずだ！」

「カゲ!?」「ブイ~~~~！ブイ~~~~！」

「こら！駄々をこねるなイーブイ！大体お前の進化形は『でんき』・『みず』・『ほのお』タイプでタイプ不一致の『はかいこうせん』を撃つても大した威力は出ないの！それよりも『かみなり』とか『ハイドロポンプ』とか『だいもんじ』を撃ちなさい！」

「ブイ～～～！」

「あんまりわがままを言うと姉さんのところに預けて鍛えてもらいますからね!!」  
「……………ブイ」

……おとなしくなつた。……そんなに嫌だつたのか、タイヤ付き『でんこうせつか』もどき。……まあ、嫌だらうな。

「さあ、この話はここまでだ。ニドリーナおいで。爪を磨いてやるから」

「ニド♪」

しょんぼりしたイーブイを降ろして、ニドリーナを足に乗せる。

バツグからヤスリを取り出して、足を手に取り爪を磨く。あまり伸び過ぎると走つている時に引っかかつたりするらしく定期的に手入れをしなければいけなかつたりするのだ。

「――待てよ。いつそ思いつきり……銳角30度ぐらいまで削つたら『ひつかく』が『きりさく』になつたりするんじや…。よし、やってみるか」

「ニド!?」

「――なあ、アンタちよつといいか?」

「……はい？」

周りに人がいないから声を掛けたのは自分だと判断して声のした方へ。じたばたしていたニドリーナをなだめて、聞きなれない声に振り向く。

視界に入つたのは一人の女の子。白髪というべきか銀髪というべきか…ショートの見慣れない髪に、これまた見慣れない色の迷彩がらの服を来て いる女の子がこちらの様子を伺つていた。

「なあなあ、アンタつてポケモントレーナーだよな？」

「ええ、まあ。見ての通りですけど」

この通り、と抱えていたニドリーナを相手に向ける。

「やつぱり！ それでさ、アンタ『どく』タイプのポケモンとか持つてたりする？」

「？……こいつはどうくタイプですけど」

「ニド？」

「こいつが！ うわくこつち来て初めて見た！ ちょっと触らせてくれよ！」

「はあ、どうぞ」

「サンキュー！ うわ、けつこうやわらかい！ なんかふにふにしてる！」

(――なんか、ここまで新鮮な反応されるのも意外だな)

ニドリーナなんてけつこう見慣れてるポケモンのはずなんだが。

野生でも出てくるし、ニドランはゲットしやすいからトレーナーもそこそこ使つてる  
ポケモンもある。

「なあなあ、ちょっと抱っこさせてくれないか！　こいつけつこう温かいしさ！」  
「かまいませんけど…。どうぞ」

「サンキュー！！　——重つ！」

……おもさ20キロは流石に重かつたか。

「つ…ぐぐ、ちょ…ちょっと無理…。悪い…取つてくんね…」

「…流石に女の子には無理だつたか。ほらニドリーナ、おいで」

必死にニドリーナを持つて踏ん張つてる女の子から再びニドリーナを持ち直す。  
完全に荷物扱いされてるニドリーナはちょっと不機嫌のようだつた。

### ◆◆◆用語説明◆◆◆

#### 『A E D』

注：ゲーム設定ではありません

本文にもあるように電気で心臓をビクンビクンさせて相手を起こす道具。

病院だけでなく、最近はどこにでも置いてある救命装置。ただし正常な人には間違つても使つてはいけません。

用法・用途を正しく理解して使いましょう。

某F P Sゲーム（オンラインゲーム）ではこれ一発でミンチになつてようが蜂の巣にされてしまうが一発で復活できる——ある意味最強兵器。

### 『はかいこうせん』

ご存じ、初代ポケモンから伝統のノーマルタイプ高威力こうげき。

威力だけ見れば今でもトップクラスの威力。ただし、一発撃つと反動で次のターン行動不能になるため用法・用途を理解して正しく使いましょう。

一部では『ロマン砲』とも呼ばれたりする。

### 『タイプ不一致』

ポケモンバトルに於いて必須とも言える威力上昇に関係すること。

『わざ』のタイプと使用したポケモンのタイプが同じ場合『わざ』の威力が1・5倍になる。

例：ポリゴン——『はかいこうせん』——1・5倍

サンダース——『かみなり』——1.  
シャワーズ——『れいとうビーム』——1.  
0倍  
(威力変わらず)

# ノーマルマサラ人 20話

「なあなあ！ あれってオニスズメってポケモンだろ!?」

「いや、あれはポッポ」

「わかった！ あれがイワークだな!?」

「アーボだな」

テクテク、ガサガサ、ザツザツザツと草むらを歩く二人。

町を出て野生のポケモンを探すために現在ポケモンを観察しながら騒がしく歩いていた。

もつとも、騒がしいのは元気がテンションMAXの女の子の方だけなのだが。

「じゃあ……あれがニャースか？」

「あれはラツタ」

「あれは？」

「あれはピカチュウだよ……………あんつ時は超サーベンでしたっ!!」 「ピカツ  
!?」

「なんで土下座つ?!」

訂正、二人とも騒がしかつた。



——遡ること1時間ぐらい前。

「ああ、こつち来て初めてどくタイプのポケモンみたよ。サンキュー♪」

「はあ……どういたしまして」

「そつちもサンキューな。——えと、ニド……ニド?..」

「……ニドリーナ、な」

「そうそう。サンキュー、ニドリーナ♪」

「……」「ド」

ニドリーナを今だベタベタと触りながら上機嫌でお礼を言う女の子。

対するニドリーナは疲れた顔で返事をする。

彼女の性格というか気さくさというべきか既にこちらも既に敬語が抜けている。

誰だっけ、この人？ 記憶を探つても該当人物は思い浮かばず、首をひねるばかり。

「船の中じや見なかつたからさあ。せつかくカントーまで来たのに一匹も見れないつてのもくやしくつてさ」

「……船の中？」

「だからマジでサンキュー♪ カントー来て初めて見たよ！」

「カントーまで来てつて……今、停泊してたサントアンヌ号から？」

「そうそう！ アタシ……つていうかアタシライツシユから來てさ。カントーに来るのは初めてなんだよ」

「…………イツシユ!?」

——イツシユ地方。

随分となつかしく、久しく耳にしなかつた言葉に驚く。  
イツシユ、といえば今いるカントー地方のポケモンとは一風変わつたポケモンが生息  
されている、カントーから遠く離れた場所にある地方。

一風変わつてゐるのはポケモンだけでなく、そこに住んでいる人もこことは違つた独  
自の文化・施設・イベントを盛んに行つていて有名だつたりする。  
遠い海を越えた先にある場所——それがイツシユ地方だ。

とはいへ、それは昔——『シゲル』になる前の『情報』だ。

『現在』のイツシユという地方は、あいにくとほとんど情報が無い……というよりも、”  
なにもない田舎”ぐらいとしかイメージがなかつたりする。

おそらく、誰に聞いてもそうだろう。もしくはイツシユという名を全く知らないか

…。

それほど今のイツシユ地方は知名度が全く無かつたりする。

理由は簡単、——ポケモンが居ないからだ。

正確には未だ『発見』されていないからとも言える。

それは他の地方、ホウエン・シンオウにも言えること。

現在、ポケモンは150匹以上存在する——と言われているが、主に発見・生息が確

認出来ているのはカントー地方のみ。

他の地方、このカントー地方から近いジョウト・ホウエン・シンオウ地方にもポケモンを確認出来てはいるが、いかんせん発見されている絶対数が少ない。

そしてポケモンは昔から世界に存在する、子供も知っている『当たり前』の存在となつてている。

そんな御時世、多くの研究者は日夜伝説のポケモン・新たなポケモン・既存のポケモンの生態を研究をしている。

だが、そんな研究を行えるのはポケモンが居てこそだ。

また多くはの人はポケモンを研究したい、ポケモンを見たい、ポケモンを手に入れたいと考え、集まるのだ。

つまりポケモンの数が多いほど、その地方は盛んであるということだ。

逆に言えば発見されているポケモンが少ない地方は”田舎”というイメージが付いていたりする。

実際、多くのポケモン研究者はわざわざ他の地方からカントー地方に来ていることが多い。

じいちゃん——オーキド博士の先輩である、シンオウ地方出身のナナカマド博士がカントーのタマムシ大学に在籍していたのもそういう理由だろう。

「まさか、ポケモンを見るためにカントーに？」

「うりうり♪ …ん？ いやいや違うよ。カントーに来たのはまた別の理由。けど、せつかく来たんだからポケモンも見ておきたくてさ」

相変わらずニドリーナをいじつている女の子。

とはいって、イツシユから来るとは……かなりの遠出をしたものだと感心してしまう。

「さつてと！ サンキューなアンタ。アタシそろそろ行くわ！」

「ん、ああ…どういたしまして。もう船に戻るんだ？」

「……いや、まあ、ちよこつと、な…。それじゃな！」

妙に歯切れの悪い言葉を残し、女の子はポケモンセンターの出口まで駆けて行つた。

「……なんだつたんだろうな、あの子」

「ニド？」

さあ？ と首をかしげるニドリーナも同じ感想だつたらしい。  
とにかく、どたばたした一時だつたことは確かだけど。

透明のガラス窓からはさつきの女の子がそのまま駆けて遠くへ行く姿が見えていた。  
船に戻るのかと、何気なく女の子を視線で追いかける、……と。

「あの子、どつかで見たことあるような？ ……あ、外に出てつた」

港とは違う方向——クチバシティから外へ出る道に足を進めているのが見えた。  
そしてキヨロキヨロとなぜかしきりに周りを気にしながら町を出ていった。

(…………どうするかな)

「——ん、お前らボールに戻つてくれ。ちょっと出かけるぞ」  
「ブイブイ？」「ニドニド？」

??マークを浮かべる4体をボールに戻し、腰のホルダーにセット。  
食器を戻して、カバンを肩に掛け、ポケモンセンターの受付——ジョーイさんの元  
へ。

「すいません。ちょっと言伝をお願いしたいんですが」



「なんでいきなり土下座なんてしてんだよ？あのポケモンも完全に意味不明で首を傾げてたぞ」

「いや、人違……ポケモン違いだつた。気にしないでくれ」

「ふうん？」

その後、行動が気になつたオレはこの子の後を追うように町を出た。

そして少し距離が離れたところで発見。彼女の事情を聴き、そのまま同行している。

「それはそうとサンキューな、わざわざ付いて来てもらつて」

「それは良いんだけど、いくらなんでも手持ちのポケモンなしでポケモンゲットは危険

だつて

「むう、それはそうだけどさ……」

「……まあ、気持ちは分からぬでもないけど

イツシユから来たと聞いた時から予想はしていたが……そう、彼女は手持ちのポケモンを一体も持つていなかつた。

そんな状態で町の外——野生のポケモン相手は非常に危険である。

そんな危険を冒してまで外に出た理由はシンプルで、ただポケモンが欲しいということがだつた。

「……しようがないじやん。ダチに言つたらダメダメ言われまくつたんだから」

そして一人で外に出た理由がコレである。

なんでもイツシユと一緒に来て友人にポケモンが欲しいという旨を話したら、危険すぎるという理由で反対されまくつたそな。

その友人も当然ポケモンを持つていないため、一緒に外に出ることを済つた。

けれどもあきらめきれず、モンスターボールを買い込み、こつそり一人でポケモンを

ゲットしようと行動に移したということだ。

「事情はわかつたから、とりあえずオレから離れないこと。それとむやみにボールを投げないこと。良いな?」

「ん、わかつた。……サンキュな、シゲル」

はにかみながら礼をいう彼女の気持ちが分からぬでもない。

イツシユはまだ未発見のポケモンが多く、また確認されているカントーのポケモンも少ない。

せつかく10歳になるまで我慢していたのに、10歳になつても未だポケモンを持ってないというのはつらいだろう。

自分だって10歳になるまでがひどく待ち遠しかつた。

……早く姉さんから離れたかったわけじやないぞ。

とにかく彼女の気持ちに同情してしまつたオレは1体だけという約束で彼女のポケモンゲットに協力することにした。

ちなみに本人の強い希望でどくタイプのポケモンを。

「それでそれで♪ どくタイプのポケモンってどれなんだ！」

「さつきのアーボとか」

「うそ!? 早く言つてくれよ! おゝい、待てゝアーボゝゝ!」

「つて！ 言つた傍から離れるなつて！」



「行けっ！ モンスター ボール!!」

——ボコンツ！　と軽い音が聞こえると同時に投げられたボールが開き、眩い光線を出す。

光線が消えると当たつたポケモンが光と共にボールの中に納まる。

けれどもそれでゲット出来た訳じやない。ボールはの中心部がまだ点滅している。ボールの中でポケモンが抵抗しているのだ。

1回、2回と、ボールが揺れて3回目の揺れが……

「あつ……」

揺れが終わる前にボールが開き、赤い光線が漏れ出し、中からポケモンが出て来た。ゲットに失敗したのだ。

「もう一回……あつ!? こらっ、逃げるな!?

カバンから新しいモンスター・ボールを取り出そうとしているとき、ポケモンが逃げ出した。  
慌てて2個目のモンスター・ボールを投げる……が、狙いが定まってなく外している。

その隙に一気に距離を取つて逃げ出し、再び野生のポケモンとなつてこの場から居なくなつた。

「…………つ」

俯き、項垂れた後ろ姿。後ろから見ているオレからでは表情が見えないが……。

「…………つ…………つ！」

おそらく、いや間違いなく悔しげな表情が浮かんでいるだろう。

「ニド～～」

先ほど闘っていたニドリーナが近寄り体を擦り付ける。おそらく慰めているのだろう、心配そうな鳴き声で擦り寄っている。

そして俯いている彼女は肩を震わせて、やがて……、

「…………うう…………うがくくくくくつ！ また逃げられたくくくくつ！」

「ニドツ!?」

…………感情を爆発させた。

「ああ、くつそく!! これで5度目につつ!? また逃げられたっつ!!」

瘤瘻を起こした子供みたいに地面に倒れて手足をバタバタ。やりきれない気持ちをひたすらぶちまけている。仰向けになつて見えた顔からは、ちよつと涙が滲んでいた。

「うう～～～～～つ!! うが～～～～～つ!!」

[.....]

「ううう～～～～～つ!! ううが～～～～～つ!!」

[.....]

あまり……といふか全く女の子らしくない呻き声（叫び）。

流石にこれ以上ほうつておくわけにも行かず。

「ほれ、ううう言つてないで体起こせつて。服が汚れるぞ」

「う～だつて～～」

「どんまいどんまい。今日が初めてなんだから仕方ないって」「ううう、けどくこれで5度目くくうがくくくつ！」

なんかちよつとふて腐れてるみたいだ。未だ体を起こさずにバタバタ。

この5度目というのは察しのとおりゲットに失敗した回数である。

彼女は『自分』でポケモンをゲットしたいということで経験者の助力を請わず、ひたすら野生のポケモンにアプローチを繰り返している。

と言つても流石にダメージを与えずにモンスターボールを投げてもゲットは難しい

ので、現在はニドリーナを貸している。  
最初はポケモンを貸されることも渋つていたが、ノーダメージではゲットどころか投げたモンスターボールをかわされることもあり、今はニドリーナを使ってゲットしよう

と頑張っている。

最も未だゲットは出来ていない。おそらく初めてということもあり、どれくらいのダメージを与えればいいか加減がわからないのだろう。

H Pバーなんてものはない。

それに彼女の方もこちらからの助言は求めていない。

だから口出しをせず後ろから黙つて様子を伺つている。

ちなみにニドリーナを選別して渡したのは彼女の要望ではなくこつちで決めた。

理由は状態異常の『どく』にならないためである。

『どく』になつてしまつたらわざわざ薬を使つたり、ポケモンセンターまで戻る羽目になるので手間がかかる。

防御力の高いゴローンでも『どく』になると面倒なため、無難などくタイプのニドリーナを貸した。

彼女もどくタイプということなのか満足気。

レベル的にも余裕があるおかげか、五戦目にしてもニドリーナにはまだ余裕があるようだ。

ほとんどの相手がどくタイプの攻撃なので受けるニドリーナには『こうかはいまひとつ』。

ポケモンの方にはなんの問題も無い。

それでもゲットが出来ないのは彼女に原因があるわけで。

「もう少し弱らせても良かったな。あと、一度ボールに入つても油断せずに次のボールの用意をしどくべきだったかな」

なんて偉そうに上から目線で言っているが、弱らせた所を更にモンスター・ボールという追い打ちで『ひんし』では無く『もんぜつ』させる奴が言うセリフではない。初心者の方がポケモンにやさしいモンスター・ボールの投げ方をしていることに内心ちょっと傷ついているシゲルだつた。

「ぐぬぬ」

「ぐぬぬって言うな」

体を起こしてガバツとニドリーナを抱きしめる。……癪しが欲しいのだろうか？

あたふたしているニドリーナには申し訳ないが、ふてくされてる彼女と話すにはこのままの方が良さそうだ。

「どうする。まだ一人で頑張つてみる？ 無理ならオレが代わろうか？」

「…………ヤダ。…………アタシがゲットする」

ニドリーナを抱いたまま倒れて、今度は体をゴロゴロと横に転がしている。

抱き枕を抱いてベッドで転がるように。哀れ、ニドリーナ。

「…………けど」

「ん？ どうした？」

「…………もう暗くなっちゃつたな」

「まあ、そうだな」

夕日は既に暮れて、道の街灯の光のみが辺りを照らしている。

良い子はお家に帰る時間だろう。

「…………シゲルはそろそろ」

「気にするな。オレは大丈夫だ」

顔を横に向けてこちらの顔色を窺うようにチラチラと横目で見てくる彼女に釘を刺しとく。

チラチラとこちらの顔を窺つて言外にヘルプを出してるニドリーナはスルー。

「……けど」

「どくタイプのポケモンってのは夜行性が多いんだ。むしろ今まで出現しなかったポケモンが出てくるかもしねないぞ」

付き合うぞ——と伝える。

せっかくイッシュから来てポケモンをゲットしようと頑張っているのだ。

それが報われるよう手伝うのが先輩トレーナーの務めだろう。

意識して余裕そうな表情を——疲れを感じさせないよう——作つて、彼女の手を取つて立たせる。

ついでにニドリーナに絡んでいる腕を解いて解放させる。

ニドリーナのなつき度が上がつた。

「ほら、行こうぜ。ニドリーナの体力もまだ大丈夫だし、モンスター・ボールのストックもまだあるだろ」

「…………アリガトな、シゲル」

「どういたしまして」

テクテク、ガサガサ、ザツザツザツと再び草むらを歩く二人……と一匹。町を出た時と違つて騒がしくなく、静かな雰囲気で一緒に歩いてポケモンを探す。けれども町を出た時よりも親しくなった二人……と一匹だった。



「今日はサンキュな、シゲル！　スゲーうれしいよ!!」

「…………どういたしまして。せっかくカントーでゲット出来たんだから大切にしてやれよ」

「モチツ！」

とつぐに日が暮れて……日が昇つてやや肌寒い早朝。結局、あれから何度目かの……何十度目かの失敗があり、ようやく彼女の要望通りに見事どくタイプのポケモンをゲットした。

失敗しても、あきらめずに何度もチャレンジした甲斐もあり喜びもひとしおだろう。ゲットした時は感極まつて抱きつかれたぐらいだ。

対してここまで付き合わされるとは露ほどにも思つていなかつたポケモンとトレーナー。

付き合はず、と言外で表現したのは何時の事やら。

疲労困憊といった具合で疲れが溜まつて重く感じる体を引き摺りながら戻ってきた。ポケモンの方はとつづくにボールの中で爆睡しているだろう

「よし、これでアタシもポケモントレーナーだつ！　へへつ、イツシユに帰つたらパパにも自慢してやるんだ！」

徹夜と歓喜でテンションMAXなのだろう。

コイツすげえ、とテンションMINなシゲルが思わず感心する。

「……それより、早く船に戻つた方が良いんじやないのか。友人も心配してゐるだろうし」「…………あつ!?　そういえば黙つて出てきたんだつた！」

「そつちはジョーイさんに伝えといたから大丈夫だと思うぞ。　流石にここまで遅くな

るとは向こうも思つてないだろうけど」

トレーナーや観光客が町に入った時に訪れるのは宿泊施設や食事が取れるポケモンセンターだ。

もしくは交番か、どっちにしろ迷子になつた友人を捜索するときポケモンセンターに確認を取るだろう。

「そつか。……サンキュな、シゲル。何から何まで世話になりっぱなしで」

「ああ、良いよ良いよ。何度も言つてるけど気にすんな。……それじゃ、オレはこれで」

「…………ここで別れるのはサッパリしがじやないか……まあ、アタシも戻つて寝たいけどさ」

なんかブツブツ言つてるけど、聞こえない。それよりも早く寝たいのだ。

「…………まあ、いいか。それじやなシゲル。もしイツシユに来る時はアタシのとこ来いよ。今度はアタシが色々案内してやるからよ」

「ああ、そうだな。その時は好意に甘える。…………えうと…………アレ?」

「?…………どうした」

「…………オレ…………名前教えられて無いような」

「へ?」

「いや、そうだ……間違いない。オレは名乗つた憶えがあるけど、名前教えられた覚えは無い」

なぜ今まで気付かなかつた――――と今まで軽口を叩き合つてた気さくな友人を改めて思う。

確か町を出て、それから「お前の名前は?」と聞かれたから答えたが、こつちは全く聞いていない。

「…………あく、そういうえばあん時は誤魔化そうと適当に流してたな。ワリイ」

「そんな気さくに言われても」

「いや、マジでゴメンつて。カントージや反応微妙だつたけど、名前知つてサインとか求められたらメンドウだと思つてさ」

「…………もしかして有名人」

「んぐ……ちよい微妙かな。イツシユのアタシの地元じや名が知れてるけど、コツチじや来たばつかだしさ。ちよつと待つてな」

そう言つて、ポケットから髪留めを取り出し、後ろを向いて髪を弄り始める。  
前髪だろうか、髪を立てて髪留めで括り、手ぐしで髪型を整え……いや、ガシガシつて感じでワイルドに全体も立てる。

そしてポケットから手鏡を取り出し確認。

こう言つてはなんだが、意外だ。女の子らしい所もあるもんだ。  
髪の整え方は男らしかつたが。

「よしつ、どうだつ！」

そう言つてくるりと体をこちらに向ける。  
当然ながら髪型は先ほどと違う。  
おでこをむき出しにして、全体的に外はねした髪型。

「…………へ？」

硬直するシゲル。

「やつぱり反応が微妙…………。むう、カントージやアタシらの知名度はまだまだかあ」「…………あれ？」

硬直しているシゲル。

「まあ、いいか。アタシは『ホミカ』！ イツシュのタチワキシティから来たバンドチームのリーダーだ！！」

「…………なぜ？」

硬直が解けないシゲル。

「それじゃ、アタシは帰るよ。実は明日他の町でゲリラライブするから急ぐんだ。今日はホント、サンキューなシゲル！」

「…………どういたしまして」

「イッショに来たらアタシン所に来いよ！ 絶対だぞ！ それじやあな！」

爽やかな笑みを向け、手を上げてバイバイ。

颯爽と港に走つて行くホミカに力無く手を振るシゲル。

こうして慌ただしい一日……を通り越して二日目の早朝にまで時間がかかった、遠い地から来た女の子との出会いが終わつた。ひとまず。

「…………. Wh y？」

◇◇◇

「なに朝帰りなんかしてんのよ!? アタシがどれだけ心配したと思つてんのよ、バカツ  
!!」

「理不尽つ!?」

ポケモンセンターに戻ると、<sup>メガトンパンチ</sup>お帰りが待っていました。

◆◆◆登場人物説明◆◆◆

『ホミカ』

ポケットモンスター ブラック2・ホワイト2にて初登場したどくタイプを使うジムリーダー。

アニメではイツシユ地方8つ目のバッジを持つジムリーダーだが、ゲームでは2つ目のバッジを持つジムリーダー。

アニメ・ゲームともバンドチーム「ドガース」のリーダーであり、ボーカルとベース担当らしい。

ゲームのBGMで有一、登場キャラクター自身の声付きBGMが流れるというスタッフに愛されているらしいキャラクター。

声付きBGMは他にもあるが、登場キャラクター自身が歌っているかのようなBGM

は今のところホミカだけである。

(人気モデル設定のカミツレにすら無い)

余談だが父親はポケウッドに出演しているリオルマン。

呼び方は「パパ」。

# ノーマルマサラ人 21話

『シゲルさんが……来る……来ない……来る……来、ない……?』

「…………エリカ」

『シゲルさんが……来る……来ない……来る……来、ない……!?』

「…………エリカ」

『シゲルさんが……』

「…………」

プチ、プチ、と押し花用の花弁を一枚ずつ筆つていてる状態が画面に映つていて。何かに憑かれた様な虚ろな瞳をしながら花弁を筆る様はかなり恐い。…………向こうから電話を掛けてきたのに。

『来る……来ない……来る……来、ない……!?』

「…………エリカ、4枚の花弁で『来る』から始めたら絶対に『来ない』になるわ』

『そう、ですか。では、今度こそ。……あら、もう花が』

既に全て塗りつくしたようだ。画面からは見えないだろうが、床には相当な花弁が落ちているだろう。花弁のみを塗つた後の花の本数が数十本は見える。

『…………ああ、良かった。ちょうど良い所に大きな花がありましたわ。これで、今度こそ』

『クサツ!? クサツクサツ!!』

『あらあら、どこへ行くのかしら? 大丈夫ですよ。きっと……多分……おそらく……もしかしなくとも……痛くない、はずですから』

『クサツ!? クサツ!? ク…………クあ wせ d r f t g yふじこ l p…………!!??』

「…………」

…………クサイハナの臭い<sub>（氣配）</sub>が消えた。



「…………もういいかしら」

『…………すいません、お見苦しい所をお見せしました』

「…………」

今まで割と見てるから何をいまさら、と云つた感じのナツメであつた。

「…………それで、今回はどうしたの？」

『はい、実はシゲルさんのことなのですが……』

「…………それはわかってるわ』

なんせ画面に映つた時からアレだつたのだから。

『御存じだと思いますが、シゲルさんはクチバジムを攻略し、次のジムに向かわれているところでしょう』

「…………そうでしょうね。私にもジム戦に勝利したと連絡してきたから。…………なぜか

顔を腫らしていたけど

『私の所にも電話をもらいました。……けれど』

そういうつて、少し溜めを作る。いや、思案に耽つてゐるようだ。

「…………けれど?」

『…………はい。けれど、シゲルさんは次にどちらのジムに向かうのか、と』

「…………ようやく話がわかつたわ」

つまり、あの呪いのような花占いは、次に自分のところに来るかどうかと云うことだつたようだ。というのもクチバシティから次のジムに向かうルートは大まかに3つある。

一つはクチバシティからそのまま北に進み、私の居るヤマブキジムに進むルート。クチバシティから一番近いルートではあるが、クチバシティからヤマブキシティに行く道はあまりおススメは出来ない。なぜなら本来のジムバッジの獲得順が違うからだ。ジムバッジにはリーグが薦めた順番があり、バッジケースにその順番が形で示されている。基本的にバッジケースの順に進むのが効率良く集められる道筋である。とは言つ

てもあくまで『薦めた』順番であり、好きな順番でジムに挑戦しても構わないが。

二つ目はクチバシティから南。東に向かつて迂回して進んで行き、セキチクジムに進むルート。こちらは徒歩でかなり距離がある上に、リーグが決めたバッジの順から考えてもおススメは出来ない。

三つ目はイワヤマトンネルを通じ、シオンタウンに出て、タマムシジムに進むルート。迂回して進むため、かなり距離もあるがバッジの順はこちらのルートが薦められている。

「…………シゲルなら順当に進むタマムシジムに行くんじゃないかしら?…………行動が玉に突飛だけれど、他のジムで博打を打つより、順当なルートで確実性を取ると思うわ」  
『うう~、そうでしょうか?……』

「…………どのみち、私たちジムリーダーは挑戦者を『待つ』立場なんだからおとなしくしていなさい」

しょぼくん、と氣落ちするエリカが画面に映っているが、こればかりはシゲルの行動次第なのでどうしようもない。…………出来ることがあるとすれば床に転がっているクサイハナをどうにかするべきだと思う。

「…………シゲルは今頃どうしてるかしら」



「ニドリーナ、威嚇で良い。『どくぱり』！」

指示を聞き距離の離れた相手に向けて『どくぱり』を放つニドリーナ。幾つもの『どくぱり』が相手の近くに命中し、注意をこちらに向ける。相手に当てるつもりはないのだ。今回の目的は相手をゲットすることなのだから。

「キツ!? キツ!!」

急な攻撃で怒り狂っているのだろう。独特の高い鳴き声でこちらに戦闘の構えをするマンキー。脳内のアドレナリンに従うように一気にニドリーナに飛びかかり、

腕から  
振り上げて攻撃。  
チヨツブ

飛びかかつた急襲を喰らうニドリーナ、とはいえかくどうタイプの攻撃。どくタイプには『こうかはいまひとつ』である。なにより単純に元々の体力やレベル差でニドリーナが野生のマンキーに押し負けることはないだろう。すぐさま後ろに飛び去り、間合いを測るニドリーナに大きなダメージは感じない。一方マンキーの方は攻撃を当てたことに気を良くしたのか、続けざまに攻撃を行うよう再び飛びかかる。

「ニドリーナ、『にどげり』で迎え撃て！」

相手の攻撃を何度も受ける訳にはいかない。ニドリーナが受けるダメージではなく、ニドリーナの特性が『どくのトゲ』だからだ。何度も物理攻撃を受けると逆にマンキーが『どく』状態になりジリ貧になるのだ。ゲットをするのに『どく』で倒れてしまつては意味が無い。

空中に飛んだことで避けることも出来ず、踏ん張ることも出来ず、無防備になつたマンキーに『にどげり』が決まる。

人々『ぼうぎよ』の種族値が低いマンキー。大きく吹き飛ばされ、受け身も取れず地

面に蹴り落とされる。立ち上がったときは荒い息を吐いていた。

「二ドリーナ、『たいあたり』！」

ゲットするにはまだ相手の体力を削る必要があるだろう。威力の低い攻撃で相手の体力を調整する。生かさず、殺さず。

『たいあたり』が当たり更に体力が削られたマンキー。先ほどよりも息が荒くなり、受けたダメージの大きさが表れる。これぐらいのダメージを与えれば十分だろう、空のモンスター ボールを取り出し、ボタンを押して手の平におさまるサイズにする。

すぐには投げない。——否、投げるつもりはない。とても残念な結果なることはわかりきつているのだから。



『えっ？　ポケモンを上手くゲット出来ない？　モンスター ボールの投げ方は練習した

でしょ』

「いや、モンスター・ボールは今のところ百発百中なんだけど……。問題は威力、というか球速にあつてさ……」

『なるほど、話は分かつたわ。ポケモンがひんしなつちやうのね』

数日前、久々に電話で姉と画面越しで対面し、その時に今までの旅の道中で起こしてしまった悲劇について相談した。こちらの悩みを聞き、すぐさま言わんとしていることを理解してくれる姉が頼もしい。

最も「話しが早くて助かる」と思うよりも、「察し良すぎじやね?」とも思つたが。……どうやら姉もヤツていたらしい。

『大丈夫よ、シゲル。私も旅に出たばかりの頃はそれで悩んだこともあつたわ。生まれて初めてピカチュウと相対したときなんて、嬉しくて思わず<sup>ウイニングショット</sup>決め球のスプリットを叩き込んでしまつたこともあつたわ』

――聞くんじやなかつた、と今までの人生でこれほど思つたことはない。そしてピカチュウの結末が気になる。いや、詳しく聞きたくないけど、気になつてしまふがいい。

…………少なってもミンチになつた、なんてスプラッタな結末以外で。

『シゲル、思い出しなさい。今までの訓練で私はボールの投げ方以外にも色々と教えてハズよ』

「色々教えてもらつたね……。うん、色々と……教えて、もらつた：ね」

——思い出そうとしたら記憶が拒否つた。

『そう、色々教えたわ。中でも最初に重点を置いて鍛えたのは走り込みだつたわよね』

——うん、何度も倒れたから覚えてるよ。……忘れられないとも言うけど。

『走り込みはポケモンゲットのために必要な特訓なのよ。中でも短距離走は絶対ね』  
「なんでゲットに短距離走……。逃げた。ポケモンを追うため？」

——走り込みは体力づくりのためだけだと思つていたけど。

『ポケモンをモンスター・ボールに入れる条件はただ一つ。モンスター・ボールがポケモンに接触することよ。……ひんしさせずに』



「…………フウ」

モンスター・ボールをしつかりと握り締め、困憊しているマンキーとの距離を測る。戦闘体勢を解いていないマンキーに向かい合うのはニドリーナではなく、オレだ。

軽く深呼吸して、鼓動が早くなっている心臓を落ち着かせる。そして姉から言われたアドバイス通りに、マンキーの行動を観察する。

「――ニドリーナ！　『なきびえ』　つ！！」

ニドリーナが指示を聞き、辺りに『なきびえ』が響く。必然的に意識をニドリーナに向けるマンキー。オレへの視線を外す——コレを狙つたのだ。

視線を外し、ニドリーナしか目に入つていらないマンキーに向かつて一気に駆け出す。上体を前のめりにし、意識的に足を強く細かく地を蹴り、最短距離で相手に近づく。こちらの接近に気付き、再び臨戦態勢をオレに向ける——が、オレの方が速いっ！

『ほとんどの人はボールの大きさ……手の平におさまるサイズから、ボールを投げてポケモンに当てるゲットしようとするわ』

——右手のモンスター・ボールを握り締めて、

『けれども、絶対に投げなければいけない……なんてことは無いのよ。用はボールをポケモンに当たさえすれば良いのだから』

——相手の一撃手一投足を見逃さずに、

『そう、ポケモンをボールに触れさせなさい。そのためにあんなに走らせたんだから。』

良い？ まずは相手に近づいて——』

——こちらの間合いに入つたら、左足を強く踏み込み、『距離を縮めたら、ボールを持った手で、一気に……っ！』

——腰を捻り、右手で一気に……っ！

『ダイレクトアタックよつ！』（訳：直接殴れ）

「喰らえつ！ モンスター、ボールツ!!」

「ツ！？ プギツツ！？」

突き出した右手のモンスター、ボールで相手の顔面（胴体？）に肩まで入れた右ストレートをかます。右腕が伸びきった所で当てているため、そこまでダメージは無いはずだ。……めり込んでいるけど。

ボールがポケモンを感じし、赤い光を出して、手に収まる。カタカタと手の中で抵抗をするのが感じられたから、出てくるなど握力を強くして抑える。やがて、振動が止まり、ボールの点滅も消える。

「…………よしつ！ マンキーをゲットしたぞ、ニドリーナツ！」

「ニドツ♪」

初めてのかくとうタイプのポケモンであり、今まで手持ちに居なかつた速攻アタッカーのポケモン。これでバトルに幅が広がるだろう。加えて最近新しいポケモンをゲットしていかつたから一層喜びが増す。

駆け寄ってきたニドリーナの頭を撫でて労う。新しく出来た仲間にうれしいのだろう。短い尻尾を左右に揺らしている。そして、こちらの様子を静かに見守っていたカスミが歩いて来て、

「…………なにやつてんの……アンタ」

「…………実はオレも思つていた…………なにやつてんだろ、オレ」

冷めた目と冷静なツツコミが心に刺さつて痛い…。姉さん……オレ、もうちょっと普

通にゲットしたいです。遠い目で空を見上げれば、晴天の彼方にサムズアップしている姉の姿が映る。

### 『ナイスファイニッショブロー☆』

### ◆◆◆登場ポケモン説明◆◆◆

### 『マンキ』

シゲルの5体目のかくとうタイプのポケモン。シゲルのマツハパンチ（もしくは『ふいうち』）によりゲットされ、かくとうタイプのプライドが粉々になつてているが、同時に師匠認定。指示はちゃんと聞く。

ナナミ（シゲル姉）に合わせると教え技で『ばくれつパンチ』を覚えそうなのがシ格尔の不安要素。合わせるな危険。性格は『むじやき』、特性は『やるき』（ねむり状態にならない）。

# ノーマルマサラ人 22話

久方ぶりに連絡を入れたじいちゃんの一言。

『ところでシゲル、ポケモン図鑑はどれくらい集まつておるんじや?』

「……え?」

『いや、なに……そろそろ手持ちのポケモンが6匹を超えて研究所の方にポケモンが転送されることじやと思つたんじやが、サトシからもまだ送られてこないみたでのう。ならば図鑑の方は順調なのかと思つたんじやが』

「……え?」

『……え?』

……ポケットモンスターってポケモン図鑑を埋めるゲームでしたね。  
そんなことを思いだした今日このごろ。



「そうだった……。バッジを集めることばかり考えて目的を忘れていた……」

バッジを8つ集めて四天王を倒してチャンピオンを倒してスタッフルが流れる  
から大抵の人が忘れがちなのだが、ポケットモンスターというゲーム、150種類のポ  
ケモンを集めるのが目的のゲームなのだ。

いや、確かに旅に出る前にじいちゃんから頼まれたが、バッジ集めばかり頭にあつた  
から完全に忘れていたのだ。……反省。

しかも話を聞く限り同期にマサラタウンを出たサトシ含む他のトレーナーもあまり  
芳しくないらしく、サトシを除く他二人は連絡すら取れない始末らしい。……大丈夫  
か、それ？ 消息が途絶てるぞ……。

「どうしたの？ そんなに眉間に皺を寄せて」

対面に座つてオムライスをつついているカスミ。ここはポケモンセンター、今はラン

チタイム。

「さつきまで誰と話してたの？」

「ん、ちょっと家族に現状報告してただけだよ。それで思う所があつてな」

ちなみにオレは牛丼。普通の牛丼である。ケンタロスは入っていない。

「なに？ ポケモンのゲットの仕方のこと？」

「当たらずも遠からず…かな」

これも問題の一つである。ポケモン図鑑を完成させるためには色々なポケモンを捕獲する必要があるのだが、それが難しいのだから一向に埋まらないのである。姉さん、オレ：普通にゲットしたいです。

「その割にはアンタつてあんまり欲張らないわよね。毎度ポケモンを見つけても図鑑に記録してるだけじゃない？ ゲットの仕方はアレだけど、そこまでポケモンのゲットにこだわっていないつていうか…」

「そりや捕獲の仕方にも問題があるからって理由もあるけど……まあ、確かにそこまで多くのポケモンを捕獲する気はないかな。当面必要になりそうなポケモンぐらいだな。あんまり集め過ぎると面倒見るのが大変だし」

これは本音。加えて言えば、確かに手持ちで使えるポケモンを増やせることは戦略の幅が広がるが、戦力が増強される訳ではない。なぜならばポケモンバトルで重要な要素は経験値だからだ。これはレベルに限つた話ではない。例えばゲームではタマゴから孵化したばかりの『レベル1』のポケモンでもコマンドを押せば戦闘行えるが、『ココ』では難しいのだ。赤ん坊に戦えと言つてはいるようなものだ。

そうなると重要なのは純粋な戦闘経験、そしてトレーナーの指示をどれだけ理解出来るか、つまり判断能力が必須である。そして判断する材料としてポケモンからトレーナーへの信頼が必要だろう。

少し話しが逸れたが、つまり野生のポケモンを捕まえ過ぎても即戦力としては使いづらいということだ。

「まあ、他にも気になる所があるんだけど……」「カゲ？」

これが最近になつて浮き彫りになつてきた新たな問題。こちらの視線に気付いて食べているポケモンフレーズから手を止めて見上げるヒトカゲ。実はこのヒトカゲにある。

「…………お前進化しないな～」

「…………カゲ～」

少し目線を落としてしょんぼりするヒトカゲの頭に手を置いてナデナデ。うむ、爬虫類（？）特有のすべすべしつとりとした肌触りが気持ちいい。

ヒトカゲ自身も最近悩んでいる問題、即ち、『進化出来ない』。

先の図鑑の完成に当たつて、進化形の登録は必須である。図鑑を埋めるためにも、今後のバトルのためにも是非とも進化して欲しいのだが。

「まあ、こればっかりは本人……もとい、本ポケモン次第だしなあ」

「言いづらそうね、『本ポケモン次第』って

「…………どうでもいいよ」

同じくポケモンフードを食べているオレのポケモン、ニドリーナとゴローン。この二匹はポケモンバトルから得られた経験値で順当に進化していつたが、旅に出た時から共にいるヒトカゲがなぜか一向に進化の様子が見られない。

レベルが足りない、ということは無いはずだ。『えんまく』、『いかり』、『こわいかお』と順調にわざを覚えていつてるため、レベルは十分足りているはず。

なのに進化しない。進化出来ない。

イシツブテがゴローンに進化した辺りから、ヒトカゲも気になりだした自身の問題。おまけになにが原因かわからないからなおさら問題である。

「レベルは問題ないはず…。体調も問題なし…。わからん…」

「ねえ、こうなつたら実家に転送してみたら？ オーキド博士に見てもらえばなんとかしてくれるんじやない」

「……そうなつたら、その場に居合わせた姉さんによる進化という名の肉体改造が行われそうでなあ。そのまま進化出来ずに強化されて違うポケモンになつてないか不安で不安で」

「ずっと前から気になつてたんだけど、アンタの実家つて本当に研究所なの？ トレー ニングジムじゃなくて？」

「研究所と実家は別にあるんだけど、まあ実家の方にトレーニングジムリーダーがいるんだよ。……トレーナー専用のが」

「……なにそれ？」

「……なんだろうな」

今、オレはきっと遠い目をしてるだろうなあ。

「話を戻して、とりあえずもう少しレベルを上げてみるか。というかそれぐらいしか現状出来ないし」

「あのさ、少しヒトカゲの相手を変えてみたら?」

「……変える?」

「アンタつてヒトカゲには相性の良い相手ばつか闘わせてるじやない。もしかしてそれが原因とか?」

一理ある。

確かにヒトカゲには相性の良い草や虫タイプのポケモンを主に当てる。もしくは火力で押しきれて、タイプの相性の悪くないノーマルや飛行タイプ。

ニドランやイシツブテには相性の悪いポケモンとも闘わせた。ニビジムのイワーク然り、ハナダジムのスターミー然り。

というのもコレはポケモンのわざのタイプを考慮したためだ。ニドランは毒タイプと地面に相性が悪いが、『にどぎり』という格闘タイプが使えるため岩タイプが含まれるイワークに当てた。イシツブテもノーマルタイプの高火力『じばく』が使えたため、水タイプに当てた。

しかし、ヒトカゲには相性の悪い水や岩、地面タイプとは闘わせたことがない。理由は単純、使える攻撃のわざがノーマルと炎しかないからだ。総じてサブウェポンが乏しい。

加えて、まだヒトカゲの段階では打たれ弱さがあるため、あまり無理のある力押ししが出来ない。

「確かにそういう実戦経験なら、ニドリーナやゴローンに比べると劣つてるな……」「でしょ、試してみたら」



「という訳で、お前たちにはこれから練習試合を行つてもらう。練習試合とはいえ、二四とも本気と書いてガチと呼べるぐらいの気持ちでぶつかつてくれ」

場所はポケモンセンターの近くにある簡素な土のバトルフィールド。そしてフィールドの上にはオレのセリフに了解の意味を込めて頷く2匹のポケモン、ヒトカゲとゴローンが対面している。

カスミのアドバイスを参考にヒトカゲと相性の悪いポケモン、岩タイプ・地面タイプ複合のゴローンを練習相手に任せた。タイプ的に相性は悪く、単純なステータスでもゴローン方に分がある。仲間であり相手の技を知っているとはいえ、今まで相性の悪い相手を経験したことがないヒトカゲから見れば初めて相対するポケモンと何ら変わりないだろう。

「今日はオレから指示は一切出さない。それぞれの判断でバトルをしてくれ。ただヒトカゲは相性の悪い相手にどう立ち回るかを常に考えながら動くように」

「カゲッ！」

「よしつ！ それじゃ、バトル始めつ！」

両者の臨戦態勢を確認して試合開始の合図を出す。願わくばこのバトルでヒトカゲに進化の兆しが見えるといいんだけど。

「カゲツ」

試合開始の合図と共に動き出したのはヒトカゲ。とはいってもこれは当然だろう。総合的にゴローンにステータスで負けているとはいえ、『すばやさ』に限ればヒトカゲに軍配が上がる。立ち回りを意識するなら勝っているすばやさを活かしてどう闘うのかが鍵となるだろう。

一気に距離を詰める……ようなことはせず、逆にバックステップの様に相手から距離をとる。そして口から放たれるのは攻撃技ではなく、辺りに煙を撒く『えんまく』。そしてすぐさま煙の中に自分を隠す。

これはオレが教えたヒトカゲの遠距離での闘い方である。力押しを不得意とするヒトカゲには、距離を取り自分を隠して常に相手の死角、もしくは遠距離から『ひのこ』を飛ばして相手を弱らせて叩く、という流れである。

……例えカスミから呆れられた目線を向けられてもオレはへこまない！

難点があるとすれば『えんまく』のせいで尻尾の炎が弱くなる（酸素が薄いため）ために頻繁に煙の外に出て炎を維持することと、煙が薄くなると尻尾の炎で位置が悟られるやすくなるために『えんまく』を一定の間隔で吐き出さないといけないのだが。……例えカスミから冷めた目線を向けられてもオレはへこまない！

「カゲッ！」

十分に『えんまく』を張った後、教えた通り遠距離から『ひのこ』を放ちつつ、発射位置を悟られないよう常に移動してかく乱する。

相性が良かろうが悪かろうが安定して相手を倒せる、倒せずとも弱らせることが出来るために、この戦い方を教えた。……が、ヒトカゲのステータスを考慮してオレ自身の選択で相性の良いポケモンとしか相対させていなかつたため、相性の悪いポケモンとのバトルでこの戦術は初めてだ。……経験が不足している要因は相性ばかり気にし過ぎていたオレ自身の判断のせいだろう、反省。

『えんまく』で相手、ゴローンのダメージは確認出来ないまでも火花の散り具合から確実にヒットしていることがこちらからも視認出来る。ゴローンもヒトカゲを狙うため

か、もしくは煙から脱出するためかしきりに『たいあたり』で応戦するが、ヒトカゲも常に確認して距離を取り再び『えんまく』行い視界を塞いでいる。

明らかにヒトカゲが優勢である。この調子ならば時間が掛かれどもヒトカゲが勝利するだろう。

「カゲッ！」

煙の中から見える火花が段々と激しくが幾度も飛び散るのが確認できる。ヒトカゲがここに来てラツシユを掛けているようだ。

バチバチと音が激しくなり、薄くなりだした煙から見えるゴローンの体表は徐々に熱くなつていき、まるで熱膨張のように膨らみ……、

「退避―――――――――っ！！」

汚い花火となつた。



「なんで『じばく』した！　なんで死なば諸共みたいなガチで練習試合してんの!?　え？　『体力減つたらじばくしなきやいけない』つて？　誰がそんなこと教えた!?　え？」

「オレ？　そんなバカな!?」

「アンタがいつもひん死寸前にじばくさせているからでしょうが!!　純度100%アンタのせいよ!!」

「ゴフツ!?」

目の前には先ほどじばくをして自らの石をまき散らしてせいで一回り小さくなったゴローン。そしてその隣では肉焼きに失敗して焦げ肉のようになつたヒトカゲ。なにも知らない人が見ると色違いに見えなくもないかも知れない。

模擬戦はご覧の通り、両者ダブルＫＯというなの引き分け。……いや、今の状態だけを見るとヒトカゲが負けたみたいになつてるけど。

「つて、それよりもヒトカゲをポケモンセンターに連れて行きなさいよっ！」

「おおお……、だんだんとカスミのこうげきが増してきてる気がする……オエ」

ボールを取り出し、ヒトカゲに向けて構える。ボールから赤い光線が放たれ、ぶすぶすに黒く焦げて皮膚がぼろぼろのヒトカゲの体を包む。

「…………あれ？」

ヒトカゲに向けて構える。ボールから赤い光線が放たれ、ぶすぶすに黒く焦げて皮膚がぼろぼろのヒトカゲの体を包む。

「…………あれ？」

「…………戻らないわね」

「え、モンスター・ボールが故障した？　まさかさつきの爆発の時の緊急回避で……いや、そこまで脆くないと思うんだけど」

「空のモンスター・ボールと間違えてるんじゃないの？」

「んく……ボールは合ってるな。ヤバいマジで壊れたかも……」

「ど、とりあえずヒトカゲをポケモンセンターに連れて行きましょう。ボールは後でな

んとかしましよう

「そ、そうだな。とりあえず、このイモリの丸焼……ヒトカゲを抱えて……」

——ビリツ！

「…………」

「…………」

「…………ねえ、アンタ今なに持つてるの」

「…………ヒトカゲの……皮……かな？」

もしくは黒い炭。片腕だけ取れた黒いソレの中から見えるヒトカゲの皮膚はいつもより真っ赤になっていた。

「…………今度は何したの」

「待てっ!? そんな目で見るな！ 今回はホントに何もしてない！ ただ持とうとしただけだ！ これホント!!」

「何もしてない訳ないでしょ！ アンタが今手に持つてるモノはナニよ!?」

「イヤイヤイヤ！ これはきっと……きっと……なんだろう？」

ビリツビリビリビリビリ——ベリツ——バキツ！

「グルルル……GYAAaaaaaaaaaaaaA!!」

〔.....〕

[ ... ]

グルルル



「おや、その資料は何ですかオダマキ博士？」

「おおこれか。最近カントー地方の学会で発表された論文がこつちにも届いてね。  
おもしろい発表だよ」

「カントー……というとオーキド博士ですか?」

中々

「いや、なんとそのお孫さんだよ。まだ10歳になつたばかりだというのにしつかりとした論文でね。ポケモンのタマゴの時もそうだつたが今回もおもしろい着眼点だよ」

『ポケモンの進化はレベルや石などの影響が現在明らかになつてゐるが、これはポケモン自体の体質にも大きく影響してゐると思われる。例えばヒトカゲなどのとかけポケモンは皮膚がそれほど硬くない。そういうふた。ポケモンがバトルを繰り返し成長していく中でどう体型を変化させ進化を行うか考察したところ【脱皮】するのではないかという結論に達した。これは日々の成長とダメージによつて体表に出る古い皮膚とこれまでの……』

# a n o t h e r マスター・マサラ人

「…………うう…………ここ、どこ〜〜」

日差しが強く、木々が生い茂る森の中、麦わら帽子をかぶつた一人の少女がとぼとぼと歩いていた。周囲に他の人影は無い。泣き腫らした目と頬に伝う涙がその少女の境遇を明確にしていた。

「みんな〜〜、みんな、どこ〜〜〜!?」

迷子であつた。

「うう……痛いよう……グス」

どこかで転んだのであろうか、膝は皮を擦りむき血がにじんでいた。

「ひっく…………だから、キャンプなんか、行きたくないなかつたのに……」

泣き顔ながら今の状況になつた元凶に愚痴る。自分の意志では無く親により参加させられたこの『ポケモンサマーキャンプ』のせいでこんな迷子になつてしまつたのだ。迷子になつたのは自分の行動のせいだと考え付かないのは子供なのだから仕方もないだろう。

「…………ううう…………ママ～～～～～～～!!」

愚痴りながらも、この寂しさを癒してくれる存在に大声で助けを求める。自分はここにいるのだと、助けに来てくれと、大声で伝えようとする。

「ひっ!?」

そんな声に応えるかのようにガサガサと近くの茂みが揺れる。決して大きくない茂

みの揺れに小さな少女の心は恐怖で一杯になる。

足がすくみ、ペタンと尻もちを付いてしまう。ガサガサと段々近づいてくるナニカから少しでも逃げようと必死に手を動かす。が、震える手では力が入らないのだろう。その場を離れることが出来ず。

「あ：ああ」

そして、

「ゲフオツ!!」

ゲホツ！ ゴホツ！ ゴホツ！ ペツ！ ぐつ……水、飲みすぎた

才工

「あう…………あ…………う」

ん?

「……あ」

「え」と

「……………サダコの……子」

「どちらさん？」

「……………きゅう」

「サダコ？…………あ、藻がついたままだつた」



「…………んん」

「お、目が覚めたかな」

(――男の子の声?)

まだ眠いのに、と睡魔の誘惑に負けそうな瞼を引きとめたのはいつも起こしに来てくれるママや『つつく』で攻撃的に起こしてくれるポケモンでも無く聞き慣れない男の子の声だった。

ゆつくりと目を開けるといつもの私の天井…………ではなく、晴れやかな太陽。お昼過ぎの温かい風を感じる。

「…………、どこ？」

「……？」「……」は『ポケモンヒートエンドキャンプ』の中だけど。……というか君はこんなところでどうしたの？』

聞き慣れない単語の意味が分からぬ。

体を起こし先ほどから聞こえてきた方へ顔を向けると、草むらに座っている一人の男の子が居た。たぶん私と同い年ぐらい。

「もしもし、オレの言つてることわかる？」

「え……あ、ごめんなさい。……えつと」

目の前で手の平をブラブラされて少しひっくりした。状況がわからず混乱して、上手く言葉に出来ない。

「まずは落ち着いて状況を確認しようか。君はどうしてあんなところにいたの？」

「え……と、私、ママから『ポケモンサマーキャンプ』に連れていかれて……」

「ああ、それなら堀の向こうでやつてるよ」

……牢屋？

「…………それから、みんなと森の中に入つて……たくさん歩いて……みんなが居なくなつて……」

「たぶん、それは君の方から迷子になつたんじゃないかな」

「みんな呼んでもこなくて……転んで……足から血が出て……」

「おうい、オレのこと見えてる？ なんか遠い目をしてるぞ！」

「ママを呼んで……誰かが出てきて……ダレカガデテキテ…………ガタガタガタ」

「なんかトラウマ思い出してる!? 落ち着いて！ あれはオレだから！ 川で泳いだときの藻が頭に掛かつてただけだから！」

「――ハツ！ ここはどうつ！ 私は……セレナ!!」

男の子に両肩をガクガクと揺らされて意識がハツキリとしてきた。

そう私の名前はセレナ、カロス地方から船でカントー地方に来て、マサラタウンつていう町のオーキド研究所に行つて、ポケモンサマーキャンプつていうので森の中に入つて、みんなとはぐれて、

「えーと、君は——セレナちやんだつけ？ つまり、迷子になつてこんところに迷い込んだんだね？」

「う、うん。えと、ここはどこ？ あなたは？」

「さつきも言つたけど、ここは『ポケモンヒートエンドキャンプ』。オレはシゲルつていうんだ」

「ひ、ひーと？ エんど？ ……その、みんなはどう？」

「それも言つたけど、堀の向こう」

「…………ここ、どこ？」

「だから、ここは『ポケモンヒートエンドキャンプ』で……」



「つまり、ここは『ポケモンサマーキャンプ』のとなりにある『ポケモンヒートエンドキャンプ』ってところ。堀で仕切っているから普通は入つてこれないはずなんだけど、何故かセレナちゃんは入つてきちゃつたつてわけだね」

「じゃあ、みんなは……」

「ここには居ないね」

お互の状況を把握するのにけつこうな時間を要したが、なんとか話しを進めることが出来た。

とはいって、セレナっていう子はまだ状況に戸惑っているようだが、まあ無理もないだろう。

「あの、どうすればみんなのところに戻れるの？」

「ゴメン、はつきり言つて無理」

「…………え？」

「というか、現状は君が思つていてるよりもさらに悪いんだ。セレナちゃんはサバイバル経験ある？」

「サバイバル？　ここはキャンプ場じゃないの？」

「うん。キャンプはするけど、ここにはキャンプ場はないんだ。ついでに言えば今日の晩御飯もない」

「えっと、それじゃ晩御飯は……」

「今あるのは……チョコレートぐらいかな。あ、食べる?」

「あ、ありがとう。…………苦つ?」

「あ、ゴメン。カロリー補給用だから86%チョコしかないんだ」

「…………うぐ…………なにコレ」

「さて、とりあえずここから移動しようか。長いことここに居ると危ないし」  
彼女は人生で初めて甘くないチョコレートの存在を知った。

「あ、うん」

「危ない?」と疑問を浮かべながらも差し出されたシゲルの手を取り、立ち上がる。そこで初めて彼女は気づいた。自分の膝に巻かれたハンカチに。

「このハンカチ……」

「ん？ ああ、怪我してたみたいだつたからね。食糧は無いけど消毒薬ぐらいなら持つてるんだ。けど、あいにく包帯やガーゼは無くてね。それで我慢してもらえるかな」

「…………うん：ありがとう」

簡素なハンカチで覆われた膝を見て、次にセレナを気遣うように見るシゲルの顔を見て少女は仄かに頬を染める。

お兄ちゃんみたい……、先ほどまでずつと一人ぼつちだつたセレナには同世代とはいえ精神的に落ち着いているシゲルがとても頼もしく思えた。

「とりあえず、ここから先に洞窟があるから今日はそこで寝よう。ただ、そこまで行くのにかなりキツイから、大変だと思うけど頑張ってくれ」

「う、うん」

「それじゃ、まずは最初にイシツブテ地雷地帯があるから、ほふく前進で進もう。オレが先に進んでイシツブテ撤去をするから、オレの進んだ道だけを進んでくれ」

「…………え？」



以下ダイジェスト

「次はスピアーライフ軍団の森。良く訓練されたスピアーライフから見つからないように隠密しながら進むんだ。もし見つかったらすぐに川へ飛び込んでやり過ごすように」

「うう、服が……砂だらけ」

「ただ川に飛び込んでも油断しちゃダメだ。川の主のギヤラドスが荒れ狂っているからやり過ごしたらすぐに陸上へ上がつて避難するんだ。じやないとオレたちがアイツの晩御飯になつちまう」

「…………」

ああ、だから出会った時に藻がついていたんだ……、と現実逃避した少女がいた。



「…………くしゅんっ！ うう～～…………寒いよう」

「火を起こすからちよつと待つてて。あ、服乾かないと風邪ひくぞ。とりあえず服脱いで」

「でも替えの服持つて無い……」

「そこに寝袋があるから包まるしかないな。あっち向いてるからパパツと脱いで寝袋に入つて」

「う…………うん」

平然な顔をして服を脱げという同世代の男の子に、自分は女として見られていないと思いつつも、落胆する。帰つたら女子力の努力値に全振りを少女は決めた。



「…………こんな風に寝るの…………初めて」

「ごめんな狭くて。寝袋が一つしか無いから男としてはセレナちゃんに譲るべきなんだろうけど…。流石に洞窟で布団無しで寝るのは寒くて寒くて」

「ううん、それはいいの。その…………私こそ、ごめんなさい。迷惑掛けてばかりで」

「しようがないよ。初めてでココは誰だつてキツイと思うし。オレは何回もやつてるからさ」

「ねえ、何でシゲルはこんなことしてるの？」

「…………」

「…………」

「…………ホント、何でだろうね」

「…………よしよし」

彼とて好きでこんなところに居るのではないのだと感じ取ったセレナ。遠い目をしている精神的に年上の男の子の頭をなぐさめるように撫でる。母性と親近感が湧いた。



「ああ、おはようセレナちゃん」

「…………んん。…………ここどこ？ あなただれ？」

「とりあえず、近くの川で顔洗つてきたら。ほら、あつち」

ん

「川沿いでボウつとしてるとギヤラドスが捕食してくるから気をつけろよー」「んくくくく」

「イヤ」

強烈な朝の挨拶をもらつたようだ。



「ハア…ハア…ハア…  
グス」

「ほら、もう大丈夫だから。泣かない泣かない」「うううううう、食べられる…グス…思つ…」

「よしよし。もうギヤラドスはいないから泣きやんで。ほら、朝ごはんにしよう」

「グシュ…………朝、ごはん?」

「チヨコレート食べる?」

「甘いの?」

「苦いの?」

「苦いのは……イヤ」

「なら他のにしよう。さつきそこでパラスからもぎ取ったキノコとナゾノクサの葉を引きちぎつてきたから火を通して食べよう。塩分補給用に食塩は持ってるから味はあるよ」

「…………チヨコレートでいい」

(――ママ、今までピーマンやニンジンを残してゴメンなさい)



「おつかれさん。なんとか今日は乗り切れて良かつたな」

「ひぐつ…………うう…………お家、帰りたい……お風呂、入りたい……はん、食べたい」「…………まあ、こういう風になるわな。よし、お湯沸かしたから髪を濯げるよ。体も拭いてさっぱりしよう」

「……シャンプーとせつけんは?」

「うん、もちろん無いよ」

「うううう、もういやうううう!! こんなとこ、いやうううう!!」

「うん、オレも正直言えばこんなとこイヤだけど、出られないから色々我慢するしかなくてね。ほら、オレが髪濯いあげるから泣きやんで」

「やううううつ! やうううううつ!」

「よしよし、よしよし」

(ポケモンが寄つてきませんようにつ!! ポケモンが寄つてきませんようにつ!!)

生活の不安と今までの癪癩を爆発させた少女の頭を撫でながらあやすシゲルの内心は少女以上に内心不安であつた。なぜならここは洞窟内。逃げられない。

「よしよし、よしよし、おうよしよし」

ナデボなんてものは存在しない。



「はぐはぐ……もぐもぐ……ん～」

「そんなに慌てて食べるとのど詰まらせるぞ。 ほい、水」

「ん～～～ふう、タマゴおいしい～～～！」

「それは何より。運よく手に入つて良かつたよ」

(何のタマゴか知らないけど……まあ、火を通せば大丈夫か)

チヨコレート（甘くない）をかじるシゲルと満面の笑顔でタマゴを頬張るセレナ。先ほどの癪癩はタマゴのお陰で綺麗に吹き飛んだ。セレナからすれば、ここしばらくの食事の訳の分からぬキノコや雑草と比較出来ないほどの豪華な食事に思える。ゆでタマゴに塩を付けるだけで最高の食事なのだ。

「むぐむぐ、…………～」ちそうさま！」

「よく食べれたね。ゆでタマゴ4個は流石にキツイと思つたんだけど」

「だつて、今度いつタマゴ食べれるかわからないもん。変なキノコも変な草も甘くないチヨコもイヤ！」

「まあ、そうだな」

「シゲルは甘くないチヨコ好きなんて変だよ」

「いや、オレも別にコレが好きなわけじやいぞ。効率考えてコレを食べてるだけで、出来ればオレも市販の甘いチヨコを食べたい」

「そうなの？　でもずっと変なキノコや変な草やそればつかり食べてる」

「まあ、今はこれしかないからね」

「…………シゲル、タマゴは？」

「…………あく、あんまり気にしなくていいよ。慣れればチヨコも甘く感じるし、キノコも嫌いじやないし」

「…………ゴメンなさい」



——3日後

「ねえシゲル」

「ん? どうした」

「……いつになつたら、お家に帰れるの?」

「あ、言つてなかつたつけ。明日にここから西の方に行けばこのキャンプから出られるようになつてるんだ。ここはエスパー・ポケモンの『ねんりき』を結界みたいにして出られないようなつてるけど、明後日には一部の所にねんりきが無くなつて出られるようになるんだよ」

「……明日。そつか、明日には帰れるんだ」

「セレナはカロス地方だつけ。まあ、ここから出てもカロス地方に行くには少し時間が掛かるけど」

行動を共にしてすっかり打ち解けた二人。ちゃん付けも無くなり、お互いい良い意味で遠慮が無くなつてきた。

「明日の朝は適当に鶏の巣でも見つけてタマゴでも見つけてくるよ」

「じゃあ、私は火を起こしておくね。あと、川から水汲んでくる」

「ん、頼む。セレナがいてくれて、こここのサバイバルだいぶ助かつてるよ」

「えへへ」

「それじゃ、もう寝よう。おやすみ」

「うん、おやすみシゲル」

肌寒い洞窟の中、一つの寝袋で眠る二人。そしてシゲルの方へ身を寄せて、くつつきながら目を閉じる。

この数日で抵抗もなく一つの寝袋で寝れるようになつたセレナ。

明日には帰れるという喜びと、もう終わりなのだと小さな寂しさを感じながら眠りについた。

こうしてセレナのデンジャラスなキャンプは無事（？）終了した。

◇◇◇

「うう～～、ピーマンもニンジンもおいしいよ～」

「そ、そう」

「ちゃんと味も付いている……、おいしい！」

カントーへ送り出すのは母親としてもやはり不安だったが、将来のためにと心を鬼にして送り出した愛娘。数日して無事帰ってきたことは何よりも喜ばしいことだった。

そんな娘にささやかなご褒美として、

「好きな夕食を作つて上げる！」

と、言つてあげたら

「味のついたピーマンとニンジン！」

と、普段残している嫌いな食べ物を要求された。

「おいしいっ！　おいしいよっ！　…………グス」

(…………な、泣くほど？)

一体何があつたのかと不安になる母であつた。

# ノーマルマサラ人 23話

「使用ポケモンは3体！ ポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます！ 先に3体のポケモンが戦闘不能になつた方が負けとなります！」

いつもの審判のルール説明を聞き流しながら対面に立つ挑戦者をじつと見据える。

挑戦者は腰のホルダーからモンスター・ボールを一つ手に取りボタンを押して手の平に収まる大きさに変えて、私の方を見る。

そして目が合い、少し笑う。私もつられて口元を緩ませる。

「いつか対戦するつてわかつても、実際に挑戦者としてこの場に立つとなにかおかしいな」

「幼馴染との初めてのバトルがこんな形だからですか？」

「そうかもな。幼い頃からの付き合いなのにジム戦が初バトルつてのもな。まあ、年齢的にしようがなかつたんだけさ」

「そうですね。ですが、私はずっと楽しみにしていました。この日が来るのを」

「随分と待たせて悪かったね。けど今のオレは挑戦者だから、遠慮する余裕が無いんだ。

この初戦でバッジをもらうつもりだよ」

「はい、私も今は挑戦者と合間見れるジムリーダーです。遠慮も、手加減もいたしません」

本音を言うなら、ここで私が勝つて再戦しに来て欲しいだけれども。

——そうすれば、また来てくれるから。

「それでは始めましょう。準備はよろしいですか？」

「いつでもっ！」

「では……タマムシジム、ジムリーダー・エリカ！ 参ります!!」



——タマムシシティ。

大きなデパートやカジノ施設などの娯楽があり、多くの人が住めるよう大型マンションを置き、街の外は多い茂る森に囲まれている。

人が住む環境としては至れり尽くせりである。カントーでもここまで都会なのはヤマブキぐらいだろう。……まあ、フレンドショップどころかポケモンセンターすら無い地元のマサラタウンが町として異常なのだが。なんでいつも歴代の主人公の町にはこういった施設がないのだろうか。タウンじゃなくてヴィレッジの間違えじやない？

そんなタマムシシティでオレことシゲルはジムバトルを行っています。

「お行きなさい、モンジャラ！」

「出番だ、マンキー！」

バトルフィールドに投げられる二つのボールから出現するのは、純粹な草タイプのモンジャラ、純粹な格闘タイプのマンキー。出現と同時に互いに敵を確認、トレーナーの指示を実行出来るよう即時戦闘態勢をとる。

「それでは、バトル始め!!」

「マンキー、『きあいだめ』！」

「モンジャラ、接近なさい。『つるのムチ』です！」

審判の合図を受けて、真っ先に動いたのは素早さで勝るマンキー。その場で深く息を吸い、気合いを込めるにより相手への攻撃が急所に当りやすくなる技。一方、モン

ジヤラは通常の草タイプの攻撃、接近しながら『つるのムチ』で動かないマンキーを打ちすえで確実なダメージを与える。

「近距離戦ならお前の得意分野だ、『からてチョップ』！」

『からてチョップ』は相手の急所に当てやすい格闘タイプの攻撃技。先ほどの『きあいだめ』の効果と重複する。『からてチョップ』の元々のダメージは低くとも、急所により大きなダメージをモンジヤラに与えることが出来る。

「モンジヤラ、『しめつける』攻撃！」

急所により想定外のダメージを受け、動きを止めたモンジヤラであつたが、エリカの指示を受けてすぐさま行動に移る。体の長いツルを使いマンキーを締め付けてじわじわとダメージを与える。だが目的はダメージではない。相手の攻撃——腕を封じることだ。

「ツ！——マンキー、距離を取れ！」

「モンジヤラ、そのまま『メガドレイン』です！」

ツルが淡く光り、マンキーにダメージを与えると同時に体力を吸収し、体力を回復する。相手を動けないようにして確実に倒す、かつ次のバトルのために体力を温存する戦い方。草タイプ特有の器用さとも言える。

「マンキー」、飛び回つて『ちきゅうなげ』！

相手を振り回せ！」

最もそんな戦い方はわかっている。シゲルが生まれてから付き合いが長いのはサトシについてエリカなのだ。

なにをしたか、こんなことがあつた、友人のこと、ポケモンこと、チャレンジジャーのこと、家族のこと、最近近づいてきた女性はいませんか……。

そんな会話をしていればエリカの手持ちのポケモンも分かる、使う技も知ることが出来る。

自身に巻きついたツルを体ごと捻り、モンジャラを力づくに振り回す。モンジャラのおもさは35kg、相手のおもさと伸ばしたツルの長さが遠心力を強める。

「モンジャラ、『メガドレイン』です！」

「地面にたたきつけろ！」

ツルが淡く光り出し、マンキーの体力を吸おうとする前に、今までの横回転から縦に、マンキーが飛び跳ね遠心力の勢いのまま地面にたたきつける。

たたきつけられたモンジャラは衝撃を殺せず地面にめり込む。そしてマンキーに巻きつかれたツルが解かれる。

「マンキー、『からてチョップ』！」

自由の身となつたマンキーが飛び、未だ地面にめり込んでいるモンジャラに『からてチョップ』を炸裂させ、さらに深くモンジャラをめり込ませる。

何か潰れたような音がした気がするが、気にせずマンキーは後退。次の指示を待つようシゲルの前に立つ。

「モンジャラ、戦闘不能！ マンキーの勝ち!!」

「お戻りなさい、モンジャラ」

エリカのモンスター・ボールに回収される。モンジャラの消えた所にはモンジャラの形をした小さなクレームが出来ていた。

「格闘タイプで力押しですか？。てつきりリザードかニドリーナをお使いになると想いましたが」

「……なんで炎タイプと毒タイプがいるのを知っているのかな」  
「電話でナナミさんからお聞きしまして」

「……手持ちが……ばれてる……!?」

「あ、ご安心ください。流石にどんな技を使つてるか、などという話は聞いてませんので。ただ最近のシゲルさんの近況をお聞きになつたらナナミさんが色々とお話してくれまして、その時に」

姉さんのバカ……、イヤ、わざとか…わざとなのか。まさか旅に出てる間もこうして間接的にオレに難問を押しつけているのか…。

「ちなみ、その時の姉さんは普通だつた？　いや、普通だつたって言う意味がよくわから  
ないかもしないけど……どうだつた？」

「とても良い顔で話されていましたよ。それはもう手入れしたばかりと言わんばかりの  
肌のツヤは同じ女性として憧れ……シゲルさん、どうかなされましたか、急に肌色が悪  
くなつたかのように」

「……なんでもないよ。ただ身内の苦労にメシウマな家族がいることを改めて痛感した  
だけだよ」

離れてても家族と繋がつてると本当なんだな。……きつとキラキラしていたであろう姉のイイ顔が容易に想像がつく。

「では、私の次のポケモンはこの子です。　お行きなさい、ウツドン！」

——  
続く

『ガブリアスはプリズムタワー方面へと向かつて行きます！』『はかいこうせん』を辺り構わず発射して…ッ!? わ、我々報道陣にも威嚇してきました!?!』

「これなんて映画?」

「違う違う、緊急生中継ですって。ミアレシティからの」

「え？ これ生なの？ うわあ、本当に撃つてる。これミアレシティの人たち大丈夫かなあ」

「野生のガブリアスなんて滅多に見ないし、トレーナーから逃げ出したのかしら？」



『一体あのガブリアスに何があつたのでしょうか!? 住民のみなさんは急ぎ避難をしてください！ 特にプリズムタワー周辺から……え、なに、今生中継なんだから顔を出さないつて…後ろから？ こつちに向かつて?』

『もしもし、そこのヘリコプター、そこでホバーしていると的にされちゃいますよ。撮影が仕事なのは分かりますけどもう少し動き回つてください。繰り返します、そこでホバーしていると花火になっちゃいますよ!』

『……なにあれ？ え、マイクのスイッチ……あ、やっぱ……コホン。え、後ろからり

ザードンに乗つて、メガホンで我々に声を掛けてくる少年が来ました。彼がガブリアスのトレーナーなのでしょうか？　あ、こつちに近づいてきます』『もしもし、何度も声掛けてますけど、ここで停止してると危ないですよ。撮影するならもつと動かないと当たっちゃいますよ』

『あの、あなたは、君があのガブリアスのトレーナーなのかな？』

『いえ、違います。オレ：私はある人に頼まれてガブリアスを止めるよう来ただけです。あれ、これテレビ撮ってる？　ここチヨツキンしてくれます。身内にバレたくないんで』

『えーと、生放送なんだけど』

『え、マジで。コホン、あのガブリアスはプラターヌ研究所のポケモンです。私のポケモンではありません。抗議とか損害賠償とか責任問題諸々は研究所にお願いします。大事なことなので2回言いますけど、私のポケモンではありません』

『……はあ』

『それでは私はこれで失礼します。出来れば録画放送の時にはモザイクと音声編集をお願いします』

『……はあ。　つて、ちょっと君！？　危ないから近づいちゃダメよ!!』

『ご心配なく、すぐ終わらせますんで。　リザードンGO！』

『G Y A a a a !』

『……行つちやつた。つて、うわ！　あの高さから『ちきゅうなげ』!?　いや両足を掴んで叩きつけてるから違うのかな?』

『アナウンサー！　あれはキン○ドライバーですよ！　キン○ドライバー！　すごい！　ポケモンが48のサブミッショングを使うなんて!!』

『カメラに出てくるなガンマイク!!』



「なんなかしらね、これ？」

「…………」

「セレナどうしたの？　豆鉄砲喰らつたみたいな顔して？」

「…………ママ、私旅に出る」

「…………はい？」

# another スーパーマサラ人 1話

その日はとてもいい天気だつた。

旅たちの日には申し分のない快晴。空は青く、風は心地よく、おかげで気分は最高だつた。少し急な坂道も気分の乗つている時ならなんてこともない。自転車のペダルを強く漕ぐことを苦に感じなかつた。そして登り切つた後の下りはスピードを緩めることなく一気に進む。

ようやく訪れた10歳の旅たちの日。この日が待ち遠しかつた。家族にはポケモントレーナーになると言つて旅に出る口実を作つたが、実際のところやりたいことは『旅に出る』ことだつた。ただポケモンを持たないと基本的にどこの親も旅に出ることを認めてくれないからその口実を使つただけ。

それどころか少しポケモンは苦手だつたりする。

何はともあれポケモンを貰うことで旅に出ることが許されるのだ。多少のことはがまん、がまん。

——きつと楽しくて素敵な旅が始まる。

あの時はそう思えたのだ。

不意に気配を感じて顔を向けると見たことのないポケモン。

それに驚き、ついハンドルをおかしな方向へ向けてしまい道を外してしまった。

凸凹とした生い茂った森の下り道へ。スピードが上がり転がるのが怖くて、ただ下り降りるがままブレーキが出来なかつた。

どうすればいいのかわからず、パニックになつていた。

「へ？」

そんな気の抜けた声が耳に届いたときには既に遅く、とても大きな衝撃が体に響き、私は地面に叩きつけられた。

「なつ！？ にいといいいいいいい——……」

そんな時、目に入つた光景は自分と同じくらいの男の子が吹き飛ばされ宙に少し浮き、すぐに下へと消えた。

そしてバキバキと木の枝が折れる音、ガサガサと葉が鳴る音、キリキリと自転車のタイヤが回る音。

自転車を見てみるとタイヤのフレームがおかしな方向へと曲がっていた。

「…………やばい…………かも」



ホウエン地方ミシロタウン、ここには他の町には無い名所がある。それは『ポケモン研究所』。

ホウエン地方の各町から新人トレーナーが旅立つ前に必ず一度は訪れ、最初に自分のパートナーとなるポケモンを手にする場所。

その多くの新人トレーナーの中の一人、トウカシティから一人の女の子が訪れる。

名前は『ハルカ』。ジムリーダーの父を持つ10歳になつたばかりの女の子。念願の旅に出るために初めてのポケモンを貰う……予定だつた。

「切り傷と打ち身が数カ所、あとはたんこぶが出来てるくらいかしら。特にこれといった大きな怪我はありませんでした」

「そうですか、それは不幸中の幸いだ。良かつたねハルカちゃん」

「……ふあい」

その予定だつた。だが今の彼女はとても念願の旅に出かけるような雰囲気ではない。グスグスと泣きながら嘆き悲しんでいた。

「ありがとうございます、ジョーイさん。すいません、ポケモンを見てもらうために来てもらつたのに」

「いえ、これも私の仕事ですから。……むしろあの高さから落ちてこの程度の怪我で済んでることに驚きました」

「うまく木の枝がクツジョンになつたのかも知れませんね。何はともあれ大きな怪我もなくてよかったです」

研究所の一室で会話をする二人。

一人はここポケモン研究所の責任者であり、ホウエン地方でも有名な研究者である才ダマキ博士。

もう一人は今日新人トレーナーに渡す予定のポケモンの健康をチェックするために訪れたジョーイ。

そしてもう一人。先ほどからソファーに座り泣いている少女、新人トレーナーのハルカ。

ことの始まりは彼女が自転車の操作を誤つたことから。不運なことにその結果一人

の少年に勢いそのまま体当たりをし、吹き飛ばされた少年はさらに不幸なことに崖から落ちた。それもかなりの高さから。

一時は放心状態だつた彼女だつたが一度頭が動き始めると状況を受け入れきれずパニックに。自分が助けようにも崖の高さに顔を蒼白させて余計不安が増すだけだつた。死んでしまつたのかもしれない、と。

そんな彼女が唯一出来たことは助けを呼ぶこと。

幸いなことに彼女は助けを呼ぶ人物をすぐ思いつくことが出来た。

つい今しがた向かおうとしていたポケモン研究所。そこにいる父や母の知人でもあるオダマキ博士である。

「ほらハルカちゃん、彼に大きな怪我もなかつたんだ。もう大丈夫だよ」

「……はい」

泣きながら研究所に駆けこんだハルカ、上手く頭と口が回つておらず、わかりづらい言葉の中から判断したオダマキ博士はすぐさま車をぶつ飛ばして現場へと急行。所々怪我をして倒れていた男の子を見つけ出し保護。

来訪していたジヨーイさんに彼を預け今に至る。

「ほら、もう泣かないで。大丈夫だよ、ちゃんと謝ればあの男の子だつて許してくれる

さ」

「ええ、あの怪我なら治るのにそう時間も掛からないと思うわ。そう落ち込まないで」「でも……服もボロボロですし、持ち物もぐちゃぐちゃで、ポケモン図鑑も壊れていますし」

倒れていた男の子の回りには鞄と散らばった道具の数々。落下の衝撃でほとんどの道具は駄目になり、ポケットに入っていたポケモン図鑑は砕けていた。電源は付かず、何の反応も返さず、データの吸い出しを試みたが駄目であつた。完全にジャンクとなつていて。

ちなみにちょっとやそつとで壊れることのないポケモン図鑑が壊れていって、その所有者が軽傷で済んでいることにジョーイはかなり驚いていた。

「なに、そんな不安になることはないよ。道具はある程度はこちらから提供出来るし、データはどうしようも無いけど図鑑も予備の物を出せるよ」

「いいんですか?!」

「今回は不慮の事故ということですね。流石に服は今すぐには無理だけど」

「ありがとうございます!!」

「それにセンリさんには内緒にしどきたいだろう」

碎けた表情で冗談を言う目の前のオダマキ博士にバツの悪い顔を浮かべるハルカ。実際そのことも考えていた。

けれど感じる気遣いにハルカの表情が先ほどよりも柔らかくなる。

10歳の少女の心に傷を付けさせたくない大人二人の気遣いだった。

「博士、失礼します！」

ちょうど会話が一段落したとき、ノックされたドア。急いでいるのか入室の許可を出す前にドアが開けられる。

「先ほどの少年が目を覚ましたのですが……その……」

急にトーンダウンする言葉に嫌な予感を覚える3人、そして部屋に入った白衣の男はハルカを一瞥すると言い辛そうにしながらも爆弾を落とす。

「どうにも、記憶喪失……みたいです」

場が一瞬でぜつたいれいどになつた。

## another スーパーマサラ人 2話

トウカシティ、自然と人が触れ合う街。

それなりに大きな街には多くの人が行き交い、いつも明るい雰囲気に包まれている。街の周りには自然が多く毎朝気持ちの良い風を送ってくれている。

そんな中、名称不明の一人の少年はジョギングをしていた。特に焦ることもなくそれなりに余裕のあるペースで街の外周を走っている。

名称不明の理由は少年には記憶がない。1週間前にある事故が起き、その折に記憶喪失に陥っている。

幸いなことに少年は日常的な生活が送れないような酷い状態ではなかつた。

言葉も言えるし読み書きも問題ない。目に映る物を理解も出来るし考えもしつかりとしている。

ただ、自分のことに関してだけが一つも思い出すことが出来なかつた。

自分が何者なのか、どこから来たのか、何のためにあの場所にいたのか。

少年が持っていたであろう道具にもこれといった痕跡もなく、トレーナーにおいて身

分証明書に当たるポケモン図鑑も事故のときに壊れている。

捜索願いも出されていないため、少年についての情報はほとんど無かった。

事故状況から分かつことは少年はそれなりのポケモントレーナーではないかとうこと。

『すゞいきすぐすり』・『かいふくのくすり』・『なんでもなおし』、そしてなぜか大量の各種ボールと木の実とかたいいし、かわらずのいし。

少年のバッグの中に入っていた道具がとても初心者トレーナーが持つ道具ではなかつた。

しかしトレーナーならば手持ちのポケモンがいる筈だが、何故か彼はポケモンを持つていらない。

そのことが状況をさらに混乱させている要因にもなっている。

身元不明、捜索願いも無し、ポケモンもない。

その少年については誰もがお手上げといつても良いだろう。

「おはようミツル君。元気そうだね」

「おはようござります。いやあ、記憶以外は何の問題もありませんよ」

「おはようミツル君、相変わらずよく走るね」

「いやあ、何故か走つたり体動かさないと不安な気分になつてくるんで、何ででしようね？」

「少しずつ記憶が戻つてきてるんじやないかな」「だと良いんですけどね」

朝日が眩しい中、町の人と朗らかに会話をする記憶消失の少年、仮名ミツル。そんな彼は、

(…………ああ、朝の風が心地いい。今日もなんて素晴らしい天気なんだろう)

悩みや不安なんぞ全く感じられないクツソいい顔でジョギングをしていやがつた。



娘のハルカが10歳を迎えて、ポケモントレーナーとして旅立つこととなつた。家を出たときは旅に出ることへの不安もあつたが、それ以上に旅を終えて成長しているであろう娘の姿にも期待していた。

落ち着きの無い子ではあるが、素直ない子に育つてくれたと思つてゐる。将来の夢を見つけるかも知れない、その過程でジムリーダーでもある自分に挑んでくるかもしない。

旅に出てつらいこともあるだろうが、それでも無事に旅を終えてくるだろう。

そう信じて送り出した娘だが、まさか数日と経たず戻つてくるとは私を含む家族全員が思わなかつただろう。

今にも泣きそうなハルカ、同伴者にはこの町のジョーイさんとこのホウエン地方で知らない人はいないであろうオダマキ博士。二人の表情には気まずさが窺えた。

そしてハルカと同年代に見える見知らぬ少年。

なぜか驚いた顔をされたが、この少年の事情が我が家に一番の衝撃を与えただろう。

そしてあの時から私たち一家に一人家族が増えることになつた。

「おかえりミツル君」

「ただいまです、センリさん。もしかして待つてました？」

「なに、新聞を取りに来たついでにね。相変わらずすごい体力だね、ご近所さんに聞いたけどかなり走り込んでるようだけど」

「そう、ですかね？ そこまで長い距離走つてるようには感じないんですけど」

「そう、この少年がつい最近我が家の一員となつたミツル君。ただし本名ではなく、名前がわからぬために暫定的に呼んでいる名前であるが。」

「体の調子はどうだい、どこか痛むどころとかあるかな？」

「いえ、怪我したとこもかさぶたが剥がれてますし、打ち身もほとんど痛みませんよ」

「そうか、なら良かつた」

毎日問い合わせている彼の状態。

彼がこの家に来て1週間が経っている。

あの日、今はミツルと呼んでいる少年の記憶喪失、その経緯を家族に知らされた時はなんとも居たたまれない空気だつただろう。事故とはいえ一人の少年の人生に多大な影響を与えてしまつてはいるのだから。

家に来るまでに病院にて精密検査などを行つたようだが、そんなすぐに治るモノでもなく、時間経過による様子見といったことしかなかつた。

普通そういった患者は病院にて入院するのだが、我が家に連れてきたのは少し事情があつた。

私がジムリーダーであること、そして彼がポケモントレーナーであつたかもしないこと。

「そういえばマサトが君を呼んでいたよ。なんでも朝食前にテレビを一緒に見るとか」

「ああ、前にやつてたポケモンバトルの再放送を見ようつて言つてたんです」

「マサトもすっかり君に懐いているね。もうお兄さんみたいなものじやないか」

「だと良いんですけどね」

ポケモンを連れていなかつたが、事故が起ころる前に彼が所有していた道具から彼は旅慣れたポケモントレーナーの可能性がある。ならば彼は各地で旅をしていたかもしれない。となれば各地のジムの戸を叩いたかも知れない。

例えジムリーダーの顔を覚えていなくても、彼の目に移つたジムや町の風景から彼の記憶に影響を与えるかも知れない。そういつたことで彼はここへ連れて来られた。

あいにくと私の記憶には彼の顔に覚えはなく、彼もこの場所についての記憶はなかつたが。

「ところでハルカちゃんは？」

「もう大丈夫だろう、元気そうだったよ。さつき見に行つたときも顔色が良かつたしね。ミツル君も朝食の後で顔を見せに行つてくれるかな、きっと安心する」

「そうですね……なんというかそれについても申し訳なく」

「いやいや、ハルカについてはこちらの方が申し訳なく思つてるよ」

けれど彼を温室に案内し、私のポケモンを見せてみるとおかしなことがわかつた。

『このポケモンに見覚えはあるかい？』

この一言から始まつた彼のやりとりがおかしかつた。

ポケモンの名前はわかるかい？

どんなタイプかわかるかい？

どのポケモンの進化形かわかるかな？

このポケモンの特性は？

e t c . . . e t c . . .

彼はポケモンについての知識が豊富だつた。

いや、年齢を考えれば異常と言えるかもしない。

今まで大半の質問にわかりませんと答えることしかなかつた彼が饒舌に返答したのはこれが初めてだつたようだ。ジョーインさんもオダマキ博士も驚いた表情を浮かべ、ハルカも内容が理解出来ないまでもスラスラと答える彼に目を丸くしていた。

そんなことから彼をポケモンと身近に接しやすいという環境がある我が家に引き取ることにした。オダマキ博士がいる研究所という選択肢もあつたが、落ち着いた環境と負い目からくるのか、ハルカの強い願望により決定した。

無論、その負い目は家族である私たちにもあり、彼を迎えることにした。

「それじゃ、シャワーお借りします。ハルカちゃんにもあの事を伝えておきます」

「うん、やつぱりハルカは君の記憶喪失にはかなり重く受け止めているようだから、そうした方がいいだろうな。申し訳ないけど、これからもハルカのことを気遣つてくれないかな」

「はい、俺の出来る限り、ですけど」

少し荒れていた呼吸はすつかりと整えられていた。しつかりとした足取りで家に入つていく。

見たところハルカと同い年ぐらいだろうが、受け答えや他人の心情を慮る姿勢はとても同年代とは思い辛い。記憶喪失で不安もあるうに自分よりもハルカのこと気遣つてくれることはとてもありがたかった。彼ならば今後ハルカと一緒に行動しても問題は無いだろう。

「しつかりとした子だ」

この一言が私が彼に抱く印象だ。



ら。  
女の子の部屋をノックして相手が返事してもすぐには開けない。病人ならばなおさら。

この家に来て初めて知ったことだと思う。なにをつまらないことを、と思いそうだ  
が、これは女性にとつて大切なことらしい。  
具体的には身だしなみについて。

病人ならば身だしなみはどうしようもないと思うのだが、髪のセットやら服の皺とか汗臭さとか、とにかく家族以外の異性相手には病人は敏感なのだと、この家の大黒柱の妻であるミツコさんから力説された。

まあ、記憶喪失で常識も欠落されて思われているのかかもしれない。真剣な顔での忠告なので今後は気を付けます、と。

実際に今、部屋の向こうからはドタバタとした音が聞こえてくる。前に部屋に入つたときはそんなに散らかっていなかつたと思うのだけれども。髪のセットだろうか？いや、引き出しの音も聞こえたから着替えかもしだれないな。別に多少の汗臭さならば気にしないのだけど、これが常識が無いと思われているのだろうか。けれどもそれは個人の許容範囲の問題だと思つたり思わなかつたり…。

「……ミ、ミツル、もう大丈夫……かも」

思考の海に溺れかけていると、ドアの向こうから声が掛けられる。どうやら身だしなみは終わつたようだつた。ここで『かも』と言われると不安に思うのだが、単にこれは彼女の口癖なのだ。

こういう時に言われるとちょっとまどろっこしい。

「それじゃ、失礼します。ハルカちゃん、もう大丈夫?」

「う、うん、もう全然平気だよ。ごめんね、心配掛けちゃって」

部屋に入り彼女が寝ているベッドの傍に座る。

布団から出でているパジャマの皺の無さから見るにどうやら先ほどの時間で着替えたようだ。あの短時間で着替えを終えたということはもう体は問題ないようだ。

「大丈夫そうだね、安心したよ。ミツコさんからもう熱も無いって聞いたけど顔色も良さそうだ」

「うん、昨日の夜から平熱に戻ったの」

「今朝もおかゆを卒業してたみたいだし、食欲も戻った?」

「大丈夫、今朝は普通のご飯をちゃんと食べれるようになつたよ」

笑顔の返答から、おかゆ生活の脱却がとてもうれしいのだろう。と言つてもすりおろしリンゴやハチミツレモンやフルーツゼリーとかしつかりと甘いものを要求していたようだが。まあ、消化の良いものだから問題は無いけど。

「これで私も一緒に旅に行けるようになつたかも！」

「ああ、うん……そうだね……」

気まずさというか負い目というか、そんな感情が胸に渦巻く。実を言うとオレはこれから旅に出る。目的は、特にない。

ただ、記憶を失う前の自分はどうやらポケモントレーナーだつたらしい。それも駆け出しの初心者ではなく、それなりに旅慣れているほどの。

なら記憶を失う前にはなにか目的があつて旅をしていたのだろう。体が覚えているのなら、それを回顧しながら記憶が戻るかもしれない。

そんな期待を持ちながら近い内にこの家を出るつもりだ。まあ、いつも気遣つて貰つてる上に、いつまでもタダ喰らいというのも気が引ける。そんな理由で旅に出ることを決めた。一人のつもりで。

しかし、予定と違い一人の同伴者が出来た。無論、目の前に居るハルカちゃんだ。深い理由はなくオレに対する負い目だそうだ。記憶喪失の原因が自分にあるため、オレの旅のお手伝いをすると。

基本良い子の同い年の女の子が笑顔で旅に同伴してくれる。

「ここだけ取れば何の問題も無く、喜んで頷くだろう。一人旅よりずっと楽しいだろうし、記憶の無い今、心細さもある。あるんだけど……。

「絶対……絶対に、私がミツルの記憶をなんとかするから！」

「あ、うん」

「困つたことがあつたら何でも言つて！ 私なんでも手伝うから、ミツルの力になるから！」

「あ、はい」

本気と書いてガチと言える顔でオレを見つめてくるハルカちゃん。正直、記憶が無くて人様に迷惑かけるのは気が引けているのだが、自分自身にとつてはさほど困つていな  
い。

確かに記憶が戻つた方が良いのだが、特に日常生活で困つたことはないし。なんとい  
うか妙に心が晴れているのだ。重荷を下ろせたというか、重圧から解放されたとい  
うか、とにかくなんか解放された感があつて心が軽いのだ。

……なのだがそんなことを知る由も無いハルカちゃんにとつては逆にそのことが重

圧となつてゐるようで、

「そんな不安そうな顔しなくても大丈夫だよ。きっとすぐに記憶が戻るかも！」  
「……ソウデスネ」

正直、旅の同伴者になる娘の気合の入りよう引いてるんですが。  
なんというか……重い。